

332  
408



始



3625

332-405



嚴子縣案內





努力は、其殆ど無効なりしにもせよ、また自ら慰むるに足る。総ての後、本書の価値は獨り之を讀者に問ふべきのみ。  
本書は政治、産業等の方面に關し、詳細なる記述を缺く。これ等は自ら別箇の編述を要求せずんばならず。又史蹟等は深く虚實の考證に立入るを見合せたり。そは特に専門史家の擅場たるべきを以てなり。

大正元年十二月

岩手研究會

# 岩手縣案内

岩手研究會編

## 岩手縣概説

岩手縣の領域

岩手縣は本州奥羽地方の一縣にして、陸中の大部と、陸奥、陸前の各一部とを管轄す。西は秋田縣と腹背相接し、北は青森縣、南は宮城縣と首尾隣し、東方一帯は渺茫たる太平洋の煙波に對す。北緯三十八度四十六分より起り四十七度廿七分に至り、東徑百四十度三十八分より起り百四十二度四分に至る。東西三十一里南北四十五里、面積九八三方里、實に本邦無比の大縣なり。西境は那須火山脈に通じて峻嶺嶮峯重疊し、烏帽子岳、仙岩峠、和賀岳、駒ヶ嶽、須川嶽等の高山を隆起せしめ脈絡歴々として自ら秋田縣との境界を作る。岩手山はこの山脈の東方に分派し、二



平均一方里につき八百人強に過ぎず。これ雄峻の山岳、不毛の高原に閉塞せらるゝが爲にして、その密度臺灣に及ばず。之を行政上左の一市十三郡に區分す。中、氣仙は陸前國に、二戸は陸奥國に屬す。(括弧の内に示せるは郡役所在地なり)

盛岡市  
岩手郡 (盛岡市)  
紫波郡 (日詰町)  
稗貫郡 (花巻川口町)  
和賀郡 (黒澤尻町)  
膽澤郡 (水澤町)  
江刺郡 (岩谷堂町)  
西磐井郡 (一ノ關町)  
東磐井郡 (千厩町)  
上閉伊郡 (遠野町)  
下閉伊郡 (宮古町)  
九戸郡 (久慈町)  
氣仙郡 (盛岡町)  
二戸郡 (福岡町)

**岩手縣の今昔**

岩手縣地方は維新以前迄單に『陸奥の國』なる名稱の下に在りて世の耳目を遠ざかり『陸奥の國』とし云へば蝦夷の巢窟の如く、又蝦夷と云へば『陸奥の

國』に制限せられしもの、如く、概ね野蠻未開の總稱なりしは史に照らして明かなり即ち『東夷背叛邊境騷動』と記せられ『蝦夷此の地を據有し反覆常なし』と書せらる。之を按ずるに、桓武帝の御宇征夷大將軍坂上田村麿は酋夷高丸、惡路王、大墓公等を討平して其の巢窟を覆すに及び夷賊始めて跡を斂むと云ふ。田村麿の到る所遺跡を留めて千有余年の今日なほ其の功烈を偲ばしむるもの多々枚擧に遑あらず。以て如何に田村麿の足跡此の邊土に行き渡りて醜類を除き良民を安定したるかを知ると共に、如何に所在夷賊の跋扈蔓延しありしかを徵するに足るべし。田村麿以前に在りて東夷征討の任に當りしは大野東人にして、聖武帝の時東海東山按察使兼鎮守府將軍として派遣せらる。彼の膽澤郡なる鎮守府趾は其當時實に東人の創設に係るものにして、後ち田村麿はこれを修築し、又志和の一城をも築造したりと傳へらる。之に次ぎて歴史上著名なるを前九年の役及び後三年の役となす。康平年間、安倍賴時及び貞任の戚族、勢強大にして膽澤、江刺、和賀、稗貫、志波、岩手の六郡を劫略し衣川に據りしが

陸奥守源頼義朝命を奉じて之を厨川柵に討平す。前九年の役これなり。時に清原武則、頼義を援けて軍功ありたるに依り鎮守府將軍に任ぜられて此の地方を治む。寛治年中、頼義の子義家、陸奥守となるに及び、武則の孫家衡、叔父武衡と共に羽州に據りて乱を作し、義家に平定せらる。後三年の役これなり。當時藤原清衡、義家に屬して軍功ありしを以て義家の歸洛に際し、奥羽兩國の押領使に任ぜられ、鎮守府將軍を兼ね。清衡の子基衡、孫秀衡相襲ぎて平泉に館し、兩國を管領し傳へて泰衡に至り、源義經の來り投ずるに及びて之を容れしが、文治五年、泰衡、源頼朝の強壓に依り義經を高館に襲ひて之を殺す。既にして頼朝泰衡の久しく義經を舍くを譴めて討伐の軍を向くるや、泰衡、防戦力竭き、平泉の居城に火を放ちて北に走り、途にして家臣河田三郎に弑せらる。之より葛西三郎清重を留守として陸奥兩國を綏撫し、其將南部光行等に分封し。後醍醐帝建武中興の時北畠顯家國司となり、義良親王を奉じて大義を此の地方に唱ふ。弟顯信も又勤王の師を募り兵を率ゐて西上し、以て足利氏を討つ。

天正年中、豊臣秀吉の北條氏討伐に際し南部信直三戸より小田原の軍に參し、又九戸政實の乱には豊臣秀次大將となり、徳川家康副將となり、蒲生氏郷、淺野長政等を隨へ來り、信直を援けて政實を討平す。文祿元年、豊臣秀吉征韓の軍を起すや、信直、兵を率ゐて肥前名護屋に陣す。慶長二年利直の代に至りて盛岡城の修築を始め、三戸城より移りて藩鎮の基を開き、永く居城となす。時に寛永十二年にして子重直の代なりき。徳川氏封建の制を以て天下を一統せし時、岩手縣の南半面は伊達氏に屬し、北半面は南部氏に屬す。即ち今の和賀郡鬼柳の關を以てその境域と爲せり。維新の變革に際して伊達南部の兩家は奥羽諸藩の同盟に加はりし爲め南部氏は二十萬石を削られ十三萬石となりて一時白石に轉封せられしも幾ばくもなく盛岡に復歸せられ、舊藩主南部利恭、盛岡藩知事となりしが、夙に國家の大勢を洞察して版籍を奉還せり。こゝに於て即ち郡縣制度となり、盛岡、膽澤、水澤の三縣を置かる。明治八年に至り、水澤、膽澤廢縣と共に所謂舊仙臺領なる五郡も亦岩手縣の管轄に屬せり。是より人文日





は北、青森縣界九戸郡輕米村より、南、宮城縣界氣仙郡氣仙村に至るまで凡そ六十五里十二町餘あり。此等の縦貫線より分岐せる線は漸次山間僻地にまでも及びて殆ど蜘蛛手の如くならんとしつゝあり。

### 岩手縣の産業

縣下農民の大半は農業に従事し、人力に補するに十數萬の牛馬を以てす。米を主産物として大豆、小麥、稗、粟、蔬菜類を産し、價額大凡二千萬圓を算す。特に大豆、小麥の好良なる品質は天下に認識せられ、近年漸次名聲を博するに至れり。然れども縣下の耕地は水田五万一千町歩、畑地八万七千町歩のみにして、之を全面積に比すれば僅に一割〇五毛に過ぎず。加ふるに五穀黄熟せんとする殘暑の中に早くも秋風渡り、寒雨來りて、凶歉頻至すること、古來の文献に徴して明かなり。されば米は上流の農家にあらざれば常食とせざる状態にして山間僻遠の地にありては葛根、蕨根、栗實、柝實、榎實等を以て糧とす。瀕死の病人あれば乃ち米飯を薦めて食養の極致とし、其死するも藥法に於て遺憾なしとする如き痛刻悲慘の生活は恐らく

岩手縣にして始めて見聞し得べき處ならん。されど遠く連る原野は天然の牧場たるに適し、古來より牛馬の産を以て鳴る。其牧畜業の淵源は極めて遠く、藤原秀衡時代、すでに貢馬のことあり。降つて南部公の藩政に移るや、馬政を確立して九ヶ所に牧場を開き、牛馬籍を制定して二歳擧駒法を開始し、良畜の國外輸出を嚴禁する等、劃策するところ極めて多し。農民の多くは牧舎を母屋に連続せしめ、殆ど牛馬と同棲す。之れ藩政時代農民が戸口税を嚴收せらるゝを恐れたるに基因すべく、全く苛斂誅求の形見と稱せらるれど、一面には牛馬を愛護する念慮を深からしめ却りて今日の隆盛を助長したる點あり。現に六七歳の農童にして數匹の馬を御しつゝ、平然市門に來還するを見れば、蓋し思ひ半に過ぎん。馬種の優逸は素より、牧野は至る所に展開せられ、芳草波を打ちて繁り牛馬はこゝを無上の樂地として新鮮なる大氣を呼吸しなから濶歩疾走し身体の發育をして完美ならしむ。縣當局は元より中央政府も亦全力を傾注して牧場を開き、良種を輸入し、これが改善發達を努めつゝあり。今縣内に育養せらるゝ馬

匹は十萬を算し、畜牛は四萬頭と稱せらる。次に山林も山國なるに従ひ、甚だ廣大にして、縣下全地積〇六割以上を占む。唯往時濫伐に委せしを以て、區々錯雜して、今日林相整然たるものを見ざるは遺憾とすべきも、早池峯山、五葉山方面は扁柏の特產地として名高く、古來より南部松として愛稱せられし赤松亦隨所に繁茂し、材質好良にして扁柏の代用品たり。其他檜、樺、栗、桐、胡桃、桂等の有用樹にも乏からず、尤もその多くは官有林に屬するものにして、民有の森林に至りては未だ注目すべきを有せず。縣に於ては明治四拾一年時の 東宮殿下の行啓ありし紀念として模範林の設定を企て現に之を實行しつゝあり。且近來民間の造林思想も著しく啓發せられたれば近き將來に於て一大林業國たるの日あらん。山林の副産なる薪炭、松煙、椎茸の産額も侮るべからず。次に鑛業界を一瞥するに、縣下鑛山饒多なるは『黄金花咲く陸奥』の成句にも證據立てらるゝが如く、黄金は藤原秀衡時代にありて盛に採掘せられ、金碧燦爛たる金色堂を後代に残して四周落寞たる中に一道の餘光を放てり。尙日光東照宮

の建立に用ゐたる黄金も多く氣仙郡に産せしものを用ゐたりと云へば、今日益々鑛山の稼業せらるゝは怪しむに足らず。唯現時金鑛として特筆するに足るは僅に鷲の巢等一二に過ぎずして、寧ろその主要鑛産物は鐵なり。就中、釜石、仙人の二山最も名高く、鑛質の良好、産量の豊富、實に海内第一と稱せらる。銅に於ては水澤其他あり。皆最近の採鑛製鍊方法をとりて盛況を呈す。蠶業も好適にして、唯氣温やゝ低さの憾あれども、育蠶期は空氣乾燥し、且つ山野自生の桑樹に富むを以て、斯業經營上厚き天恵に浴せりとすべし。縣に於ても大に保護奨勵を加へ、今や桑園一万三百町歩、收繭四万八千余石に至り、今後益々發展の氣運に向ひつゝあり。随つて製糸業も近來漸く勃興し來り、就中磐井郡に於て最も盛に行はる。工業は甚だ不振の状態にして殆ど民間に發展の素因を有せざるが如し。南部鐵瓶の名は古來天下に認識せらるるも其産額は云ふに足らず。木綿織物、竹細工及び冬季農閑の期を利用して製作せらるゝ藁細工業等は僅に輸出の名を贏ち得るのみ。縣内、生産の原料は豊富なれど、工場の施設之

に伴はず。充分なる加工によりて工藝品たらしめ得ざるは遺憾なり。然れども近時電氣事業の如きが盛岡の外、各地に或は起り或は起らんとするに徴すれば一般工業の勃興も遠きにあらざるべきか。扱てまた海岸を見るに延長七十里、沿岸の町村三十七、寒暖二潮の流通するに衝路に當りて魚種多く、遠洋は臘肭獸、鯨、鯨、赤魚、鮪等に富み、近海には鮭、鱒、鰻、鱈等の群泳するあり。沿岸の岩礁には鮑、昆布、石花菜、若布等到る處に繁殖し、産額亦尠しとせず。殊に近來遠洋漁業著しく發達し、新式の漁船を艤して萬里の波濤と戦ひ、海洋の寶庫を開拓しつゝあり。水産製品として宮古地方に於ける鯉節、鰯、干鮑は名高く、又氣仙地方に於ては罐詰業盛なり。今縣下の主要物につき、明治四十三年の産額を掲ぐれば左の如し

	數	價
米	六三一、一三二	八、一三七、三九九
麥	三〇一、〇七七	一、八五五、七六二
大豆	一五三、八〇七	一、二四九、七一九

小豆	一八、一七六	一八五、二八七
稗	五三、一九八	一六四、五二六
粟	九六、七六二	五五三、二七六
蕎麥	四九、五七三	二四九、九六五
煙草	一五、三五六	五、一六四
大麻	七五、六六三	九三、六一九
海産物		一、二八八、四二七
水産製造物		九八〇、二七九
蠶糸	二九、〇四〇	一、二五六、六一五
蠶繭	五三、三二八	一、八四八、二七七
薪	三一七、一九三	五一三、八九八
炭	一三、七三二、六一九	六四三、一〇八
鐵	一六、六六二、六八三	二、六四一、二三九
銅	一、九四一、一四三	五七八、九一三

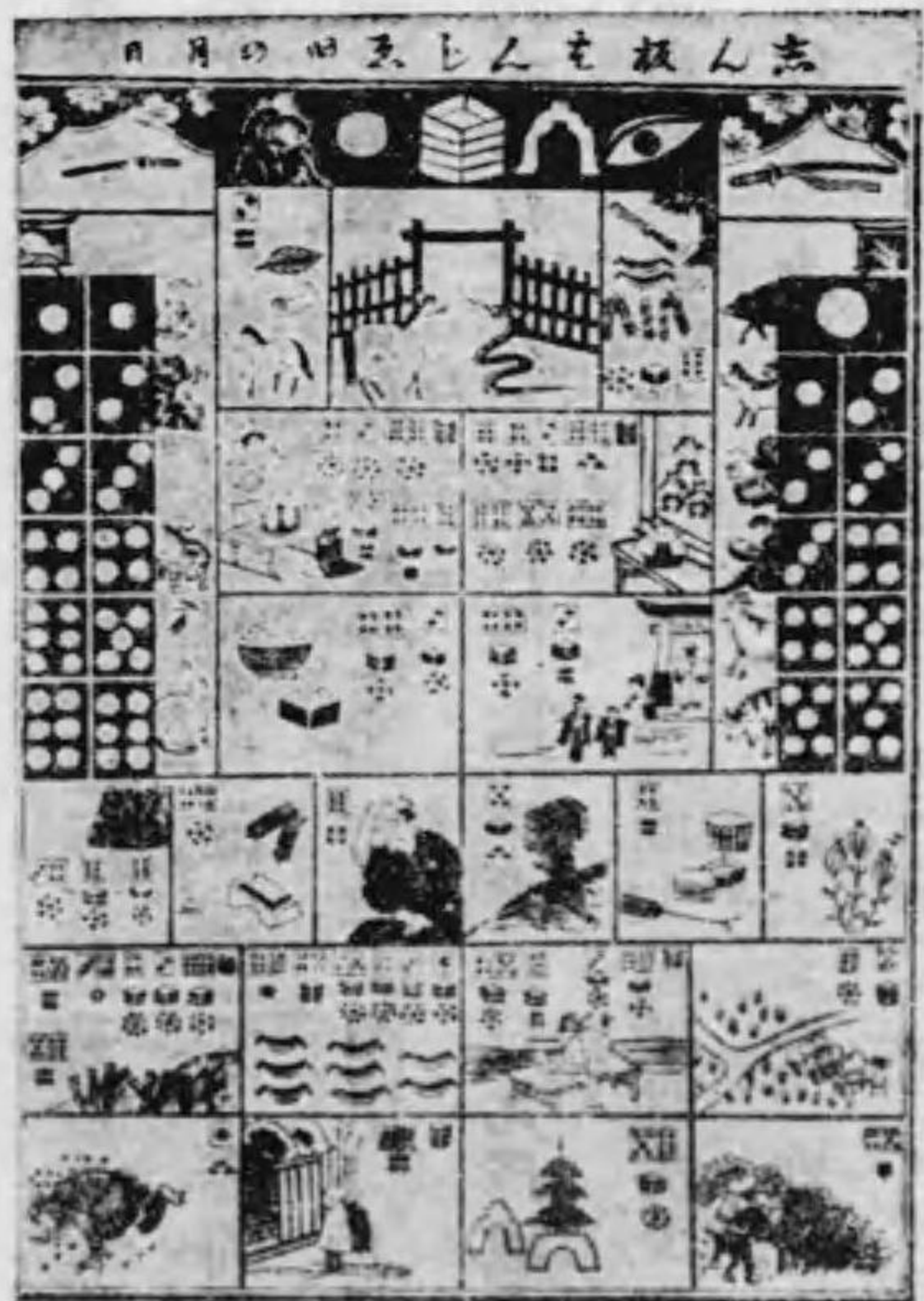
若しそれ縣下重要物産中の随一なる牛馬に至つては、牛は明治四十五年の現在頭數二



モツベと云ふ。又爪籠は冬季草鞋の代用として盛んに用ゐられ、其製造額も少からず。爪籠に似て踵を蔽はざる『新兵衛』も亦其用多し。

●南部曆 一名盲曆めくらこよみとて、寛政の頃

より南部領に於て用ゐられし特殊の曆あり。陰曆を表はすに總て物体を以てして、目に一丁字なき者にも、直ちに了解し得べきやう製作したるものなり。今も縣下僻陬の地に常用せらる。



南部曆

此地(盛岡)に繪曆といふものがある。字を一つもかゝないで総て判じ繪で、農事に關係の深い

季節を現はしたものである。字を讀めなかつた昔の習慣が残つてをるのではない。今日でも約十万余近く刷つて、それが賣りひろめられて居るのぢや。

其の繪曆は衝立を書いて朔日、塔と琴柱こぢぢを書いて冬至、禿げた頭の人間を書いて半夏生をきかせる類ひである。

盗人が荷を昇いでをるのが荷奪ひ(入梅)で、芥子の花に濁りの點を二つ打つて、夏至と讀ますなど就中振つてをる。(河東碧梧桐氏著『三千里』)



### 盛岡及其附近

#### 市盛岡

は巖手縣下の殆ど中央に位し、海拔四百拾六尺、岩手山の聳立せる廣濶なる高原にあり。西南は洋々たる北上川の流れを擁し、四周は波濤の如く起伏せる岳陵に包まる。仙臺以北第一の繁華なる都會なり。もと此の地不來方コツカマと稱せられしが、慶長年間、南部利直城府を築きてより、不來方とは不祥の文字なりとて、森ヶ岡モリケと改め、後又何時の頃よりか「ヶ」の字を省略して森岡と呼ぶに至りぬ。今は荒廢に歸せるが當時、寶珠盛岡山永福寺ホウシュウモリノカミと稱せる南部家歴代の信崇淺からぬ寺院あり。元祿四年、菖蒲花咲く頃、重信城中に連歌の薙を催されし折、住寺の僧已が寺名を下の句に讀み込みて上の句を望みしが、重信、筆とりあへず、

幾春の花の恵みの露やこれ

重信公

寶の玉の盛る岡山

正三位大勳一位内閣総理大臣  
 政友会総裁 一世の大友治家 原敬 出陣の地

とつけぬ。是れより森岡を改めて盛岡としきと云ふ。南部利直、開府以來三百有餘年  
間、巍然たる城壁は長くこの平原に雄峙し、明治四年廢藩置縣の後は更に巖手縣廳の  
所在地として、市況益々隆盛を呈せり。面積百分の廿八方里、東北二十六丁、南北三  
十五丁にして、六十一町の街區を包有し、今や戸數六千六百、三萬九千に近き人口を  
包有するに至れり。

盛岡の風光は特に平安に似たり。而して北上川は鴨川よりも清らかに響き、峻秀なる岩手山は眉に薄まりて寒  
し。眞個東北の一京都なり。(横山健堂氏著『新入國記』)

位置は東徑百四十一度六分、北緯三十九度四十二分にあり。市中の元標より東京及び  
東北五縣の縣廳所在地に至る道程は左の如し。

東 京	百九十二里	福 島	六十九里廿五町
宮 城	四十七里廿六町	山 形	三十七里一町
秋 田	三十一里廿六町	青 森	五十一里八町

盛岡の  
年中行事

(正月)諸官衙學校の松飾美しく雪中に立つ。一日、市役所主催の新年交賀  
會あり。三日各商店初荷。十五日小正月とて餅花を福神に捧ぐ。(二月)  
近寒烈し。氷上運動會催さる。(三月)春雪なほしきり、近在に伊勢詣等を爲すものあ  
り。(四月)福壽草咲く。舊曆三月となれば古イナシ振りに雛祭る家あり。(五月)春鶯一囀  
梅櫻桃李一時に開き、滿天滿地花ならさるなし。五日より招魂社の祭典。舊曆四月八  
日の當日は山見と稱し職人等の山野に遊ぶもの多し。十三日、盛岡中學校創立紀念會  
あり運動會を兼ね催す。其他にも運動會の催し少からず。下旬櫻ちり林檎の花あえか  
に咲く。廿五日より櫻山祭。(六月)新緑燃ゆ。舊曆五月五日となれば鯉職立ち、家々  
粽ちまきを結ぶ。農家は、馬に鈴等を装ひ、黎明、岩手山の南麓なる鬼越オニゴロの蒼前ソウゼンに詣り、神前  
に繪馬を捧げて歸る。子女はまた、早朝近郊に露踏をなす。田植始り、茨島野イラジマわたり  
鈴蘭匂ふ。舊曆五月廿五日岩手山の山開にて市内新山道シンサンドウの岩手山神社に夜祭りあり。  
(七月)高松池タカカマツにボートを浮ぶるもの益々多し。林檎のはしり出づ。(八月)紫波郡乙部オトヘ

名産の金瓜市中に入る。舊曆七月七日七夕祭、兒童等萬燈をかざし太鼓を打ちて街路をめぐる。十四日より十六日迄盂蘭盆會。寺々の寶物縦覽を許す。市中に篝火まき明り。さんさ踊、手踊の群、往來織るが如し。十六日には明治橋メイジハシに舟流しあり。此月商家に藪入あれば子弟慰安會催さる。

盛岡棒火、毎年七月十四日より十六日まで、三夜が間、當城下に於きて、富めるも貧きも、家並毎に檜或は松などを小さく割り、棒の皮を以て之をまき、高さ五尺周り三四尺の積松とし構へ大なる家には二つ或は三つ、小家にては一つ、軒端をつられて、暮六つ時より火を點じ、是を合圖に、國司を始め諸士の面々思ひく／＼花やかに出立て、壹番二番の備を立て、凡二百人計の人数、騎馬にて彼棒火の中を鞭打て、縦横にかけめぐり、四つ頃にも至りて次第に火の消るを限りに城中に引取る也。家々の棧敷、辻々の屯、近郷の人民群參して最も壯觀なり。誠に武門のたしなみにて、駒の恐をとらざる、足かためならん、余所に稀れなる盆會なり。(二十四躰巡拜圖繪)

(九月)家畜市場に於て連日二才駒の擷あり。黄金馬場コガネバに競馬の季節。十四日より十六日まで縣社八幡宮の祭典、其中一日神輿の渡御あり。農學校其他運動會を催す。

(十月)愛宕山アタゴヤマ其他の紅葉美し。芋の子食として秋晴の日津志田或は岩谷温泉に赴きて宴遊を開くものあり。騎兵隊の軍旗祭。(十一月)初雪來る。菊花品評會。御七夜として北山真宗の各寺院賑ふ。(十二月)神社の御年越。裸參りとして白衣一枚を纏ひ雪路を濶歩して神に詣づるものあり。市中各商店歳暮賣出しをなす。

二十二日、雪、午後三時過、表へ出て見て驚いた。往來の人は皆カッ／＼下駄の齒を鳴らす。向ふから眞一字に亘つて來る子供がある。見ると、雪は鏡をあてたかと思ふ程テカ／＼光つて居る。地上は鏡敷いたかとも思はれる。車のない乳母車が數知れず上下する。之を箱雪車と云ふさうな。大きな座取へ斜に柄をつけたものである。頭巾眉深な人が、何やら菰包みの荷と一處に積み込まれて來るのも面白い。炭を乗せたたゞの雪車が少しの坂になつた處を走せ下る。大きな馬雪車が悠々と鈴を鳴らして來る。夕べまでは東京の雪と何處が違ふか、と思ふて居たのに、今突然、寒國の面目が躍然としてをるのに驚喜したのである。(河東碧梧桐著『三千里』)

川中津

市の東北に當る岩手郡藪川村外山方面より清川キヨカハ、濁川ニロリカハ合して中津川となる。流程十二里三十町、深山幽谷の間を奔走して盛岡の市街を横斷し北上川に入る。往時は春は彩霞の中に友呼ぶ千鳥啼き渡り秋さり來れば兩岸の紅葉ひと村雨に色



そへて臙脂や溶かすと見えければ、千鳥川或は赤川とも呼ばれ實に杜陵屈指の名所なりき。河に數橋あれど最も著はるゝるは、上の橋、中の橋、下の橋にして現に上下二橋の欄干に装置せらるゝ擬寶珠は全國稀有のものとする。正平十二年、南部政行、芳野の行宮に詣りし時、春正に闌にして櫻雲満山、御簾吹く風さへ薫れるに、鹿の啼く音の頻りなりしかば、後村上天皇、敷慮にかけられ、とく／＼歌伏せよと宣はる。政行かしくみて、靜に

春霞秋立つ霧にまがはぬば

思ひ忘れて鹿のなくらん

と詠進せしに、鹿鳴忽ちにして止めり。天皇敷感斜ならず、恩賞として、加茂川の擬寶珠を在所に用ふることを勅許し、且從五位に叙せられ、松風の硯と朱塗の弓百挺とを賜ふ。政行歸國し擬寶珠を居城三戸の熊原川に用ひしが、利直、盛岡に移轉の節、更に鑄造して中津川上、中、下三橋の欄頭に飾る。就中下の橋のものは往時洪水に流失

せり。また中の橋のものは上の橋のものに遅るゝこと二年の鑄作にかり、慶長十六年辛亥八月吉日の刻を存す。大正元年十一月下の橋に移せり。鋪華蒼涼として風韻高く堤上の櫻花亂發し月光に薫ずる時宛として我國中古の情調を現前す。中の橋に近く數株の年古りし楊柳あり。一脈の春風之に通へば依々たる翠色を現はして堤上に連る。千朶萬朶の櫻花を誘ひ、繚爛たる盛岡の春は先づこの河岸より發す。その紅翠相滴る間より南に遠く南昌山の影を望む時、誰か萬丈の塵裡這箇の絶勝を豫想するものぞ。

中之橋

石川 鴻 齋

三橋達市關宏途

連立青銅擬寶珠

穀擊肩摩人若織

依然風景似皇都

されど一朝大雨にあふや、洪水氾濫して古來慘害を及ぼせること少からず。明治四十三年九月三日の大洪水に三橋の流亡し、全然河岸の状態を一變せしめしかば、市は翌年より工を起し上の橋其他を復すると共に、中の橋及び下の橋を鐵橋とし、兩岸には

壯麗なる護岸工事を施し、大正元年に至りて漸く竣成せり。此結果、中の橋は其擬寶

珠を撤するに至り

たれども、全長百

五十尺、幅員二十

四尺、二基の石柱、

水上に影を蕪し、

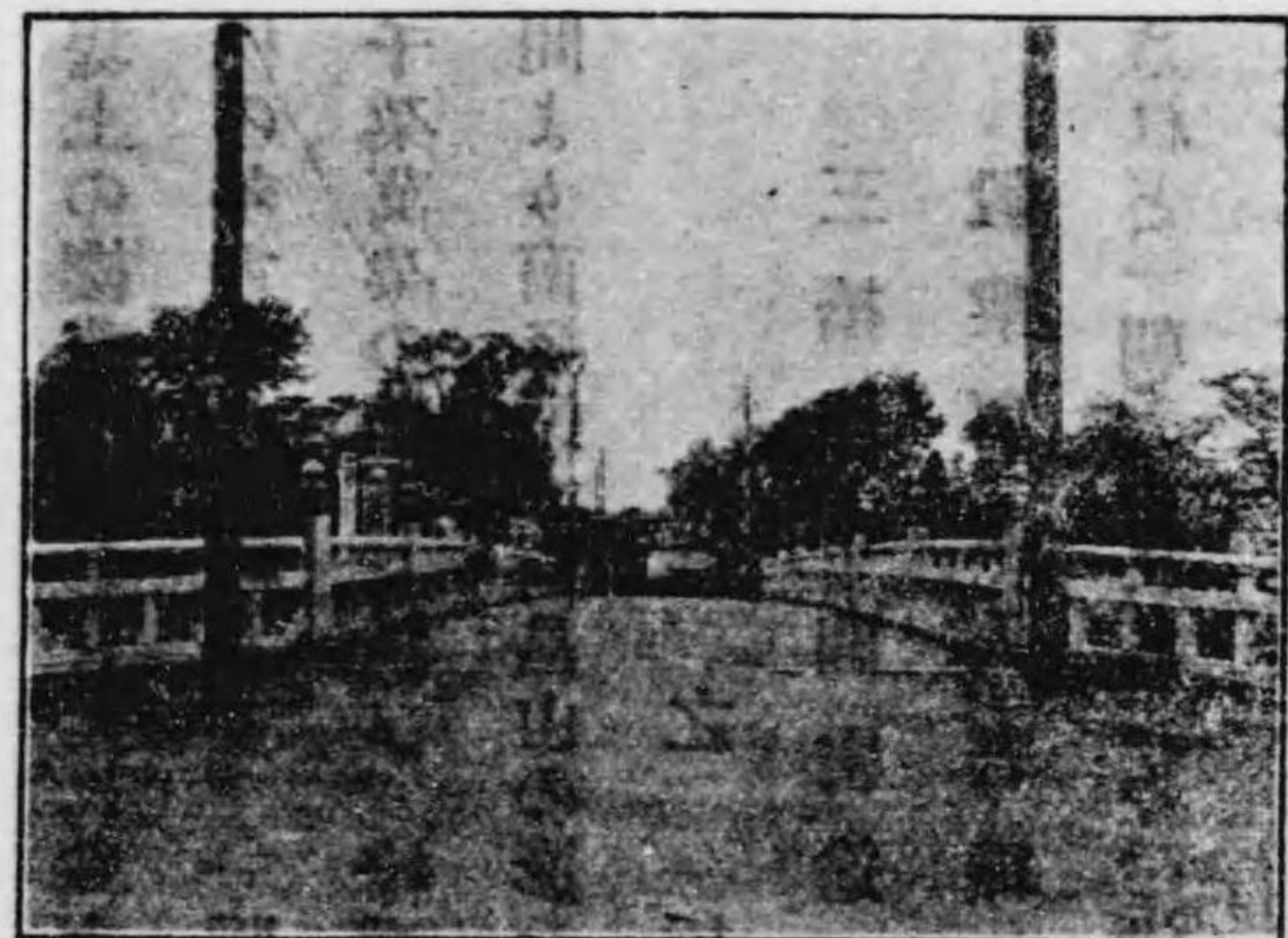
其東畔なる盛岡銀

行の大建築と、其

上流下流に連る花

崗石の岸壁と、総

て相俟つて新しき



橋の中(舊)



橋の中(新)

盛岡市の代表的景観を現出せり。下の橋の南畔には盛岡及城南の兩小學校を見る。

**盛岡  
舊城址**

市の中央にあり。廣袤縦三町四十六間、横二町十六間、城は往昔、清原武則、鎮守府將軍たりし時、其甥不來方貞頼の居りし處なるを以て、即ち名づけて不來方城と云ふ。天正十九年蒲生氏郷、九戸の兵乱を鎮めて歸陣の節、南部信直送りてこゝに來りしが、氏郷其地形の優勝なるを看取し、信直に通むるに、築城の事を以てし、且つ手づから設計して之に與ふ。信直、征韓の役に豊臣秀吉に従ひ、名護屋に滞陣中途に築城の允許を得、慶長二年、其子利直の代に至り、盛大なる工事を起せしが、元和五年に至り、城殆と成りこゝに始めて三戸城より諸臣を率ゐる移轉す。其後中津川氾濫のため一時三戸に歸還し、重直の時更に祝融の災ありて郡山に在城せる事ありしも寛永十年、全城竣成するに及び遂に累代不易の居城となせり。此城、壘塹高く峙ち、中津川の水は其東麓を流れて自然の濠溝をなす。王政維新、さしにも花やぎし樓閣破毀せられ、城畔の老杉いつしか伐採せられては、夕陽斜に殘壘を照して、晚鶉空しく愁に啼くのみ。不來方城の廢墟はかくして一時唯蘿蔓の茂るに任せたる事

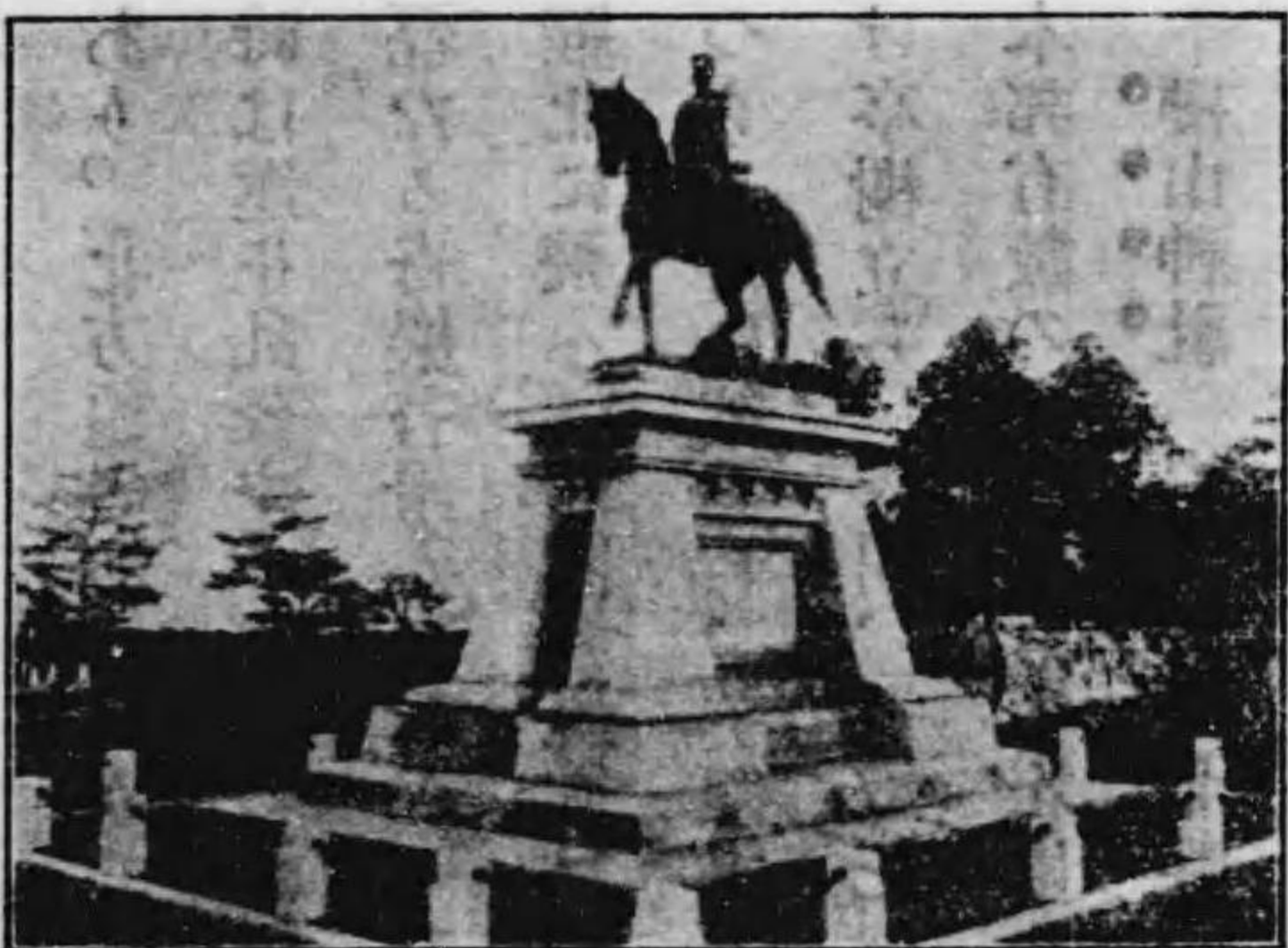
あり。

双鶴の紋章の由来 應永年中南部守行、秋田征討に赴くや、陣中宴を張りしにたまく、双鶴、飛翔してその影  
盃中に落ちぬ。將士祥瑞に感奮し戦ふて勝たざるなかりき。爾來甲斐源氏正系標章たる祖先以來の武田菱を改  
めて双鶴とせり。『鶴の羽風に扇はしほむ、津輕社  
丹は散りかゝる』とは、實に往昔南部人が紋章に托  
して其雄風を讚美せしに外ならず。

岩手公園 城趾は叙上の如く一時荒廢  
の極に達したりしが明治三十九年に至り  
岩手縣は其廢壘殘濠に依り新に岩手公園  
を造れり。東より登臨すれば、時雨の松  
天風に嘯いて積翠雨と煙るほとり、巨人  
の如き烏帽子岩の屹立するを見るべし。更に二の丸の趾に至れば廣濶なる芝生に紅花  
綠葉其の影を點せり。その一角に立つて西北を望めば、滿眸壯豁にして、市街數千の



松の雨時 (國公手岩)



像銅伯部南 (國公手岩)

瓦甍を隔て、岩手山千古に聳え、雫石川、北上川其裾野に隱現しての燦として日に輝  
く。皇太子殿下御手植の松を柵外より拜し、渡雲  
橋を渡りて本丸に至れば、その中央に伯爵南部中尉  
の銅像あり。新海竹太郎氏の彫塑に成る颯爽の英姿  
は、人をして景仰の情に堪へざらしめむ。  
南部中尉 名は利祥明治十五年生る。幼にして聰明恭謙。六才の  
時學習院に入るや、東宮殿下の御學友に擢拔せられ、十三才に  
して 東宮職出仕を命せらる。素志に依り軍職に就き三十六年近  
衛師團に配屬せられ、騎兵少尉に任ぜらる。全年父利恭伯薨じ、  
繼承して南部家四十二代の主となり襲爵仰せ付らる。日露戰役に  
當り第一軍に従ひ、各地に轉戦せしが、三十八年三月、井口嶺の  
戰に當り遂に悲壯なる戦死を遂げぬ。行年僅かに二十四。華胄の  
模範として今尙人の痛惜する所たり。

銅像前を南に過ぎ數十の石段を下れば櫻樹林をなせり。それより西側に歩を轉すれば



るや、甲斐源氏の一族、舉りて之に應じ信州小田切の城を抜き、黄瀬川に頼朝に謁す。文治五年頼朝、藤原泰衡を陸奥に伐つや、光行先鋒となり阿津樫山國見峠の戦に功あり。因りて糠部五郡を賜る。泰衡誅滅の後、殘黨所々に蜂起し國土平安ならず。光行、兇徒追討の命を受け承久二年、三戸平良崎に居城を築き、土民を服す。建保三年鎌倉に於て薨せり。年六十九。

南部信直 南部氏廿六代の英主、天文十五年岩手郡一方井村に生る。母と共に召されて三戸田子の城に居りしに因り、田子九郎と稱す。その治世は最も多事の時代に遭遇し、大浦爲信の津輕横領あり。九戸政實の叛亂あり。伊達政宗また隙を窺ひ、内外實に多端なりしも、公、北信愛を信任して豊臣氏と款好を通じ、前田利家、淺野長政等と交誼を結び、居城を盛岡に築き、遂に南部氏建國の基礎を鞏固ならしむ。世、稱して中興の英主と云ふ。慶長四年卒す。年五十四、在職十八年也。

南部利直 信直の長子にして天正四年生る。慶長五年上杉景勝、會津に依りて叛す。徳川家康諸將を率ゐて之れを伐つや、公、兵五千を率ゐて之に會し、戦功あり、同三年三戸舊城下の土民を盛岡に移す。寛永三年、秀忠に隨ひて入京し従四位下に叙せらる。その翌年一族南部彌六郎直義を八戸より遠野に移らしめて地方を鎮せしむ。同九年、五十三歳にして卒す。

南部利敬 利直九世の孫にして幼時封を襲ぐ。寛政文化の頃津輕藩と共に北邊を警固して功あり。文政三年三十七歳を以て薨す。明治四十一年従三位を追賜せらる。

●●●●● 時鐘樓 境内の東隅に當り群立つ古杉に隠見して物寂びし時鐘樓あり。この巨鐘は

延寶七年、鑪山に於て鑄造せられたるものにして、音響鏗鏘遠く二里以外に亘る。造設以來殆と三百年、市民座して漏刻を知り非常の警告をうく。今尙毎時点鐘を爲す。

●●●●● 御田屋清水 公園北廓の龜ヶ池の畔、老樹蒼たる下に一區の石室あり。清水滾々として湧出す。清冷澄徹比なし。往時藩侯の御用泉たりしものにして、屋舎を設け、土民の出入を嚴禁し、數羽の鶴を飼養せしより、今尙鶴泉の名を存す。此近傍に見ゆる華麗なる建築物は武徳殿なり。

### 市中の概観

盛岡市は不來方城を中心として、自然のまゝ四周に發達せるものなれば、街區従つて整はず。田浦點綴し、河流交錯し、樹林屋臺を遮りて、やゝ散漫の觀あり。南部公開府以來、一回も戦歴を蒙りし事なく、全体の空氣何となく靜穩を極む。市街は中津川を以て兩分せられ、其南北自ら別趣の發達を遂げたり。概言すれば河南は富有なる村落に接續せるため、人家稠密し商舖軒を並べ、百貨輻輳するに反し、河北は諸官衙、學校多く、其のいづれも廣濶なる敷地を占め居るため、やゝ

閑静の傾あり。但し近年は其西北端より漸次新生面を開き來れるを以て、或は其雜踏  
河南を壓する時代なしと云ふべからず。

●●●●●●  
中津川以北 所謂河北に屬する重なる街衢には、  
内丸、本町、八日町、花屋町、油町、下小路、仁王  
小路、材木町、茅町、大澤川原小路等を擧ぐべし。

西風に内丸大路の櫻の葉  
かさこそ散るを  
踏みて遊びき

石川啄木

内丸は舊城趾外廓の街區にして大道坦砥の如く、左  
右に巖手縣廳、盛岡地方裁判所、區裁判所、盛岡聯隊區司令部、盛岡警察署、盛岡市  
役所、縣立染織講習所、岩手縣物産館、岩手郡役所、赤十字社岩手支部、帝室林野管



岩手縣廳

理局盛岡出張所、岩手縣立師範學校、全女子部、縣立盛岡中學校、同工業學校、私立

盛岡圖書館、私立岩手病院、岩手日報社、浸禮教會  
仁王小學校等の諸建築層々として并立し、櫻松相參  
差して、誠に一市の中心たるに耻ぢず。殊に岩手縣  
廳舎はもと盛岡藩主の別邸廣小路御殿を襲用せしが  
明治三十七年新に工を起し翌年に至りて成れるもの  
工費十四万圓、建坪總計九百三十七坪、東北稀有の  
大建築と稱せる。これに隣接せる裁判所構内には有  
名なる石割櫻あり、

石割櫻



●●●●●●  
石割櫻 一に櫻雲石とも云ふ、老櫻一株、巨大なる花崗石の中心を  
劈開して挺出し、花時紅雲を吐いて奇觀を極む。「松生絶壁不知土」の句あるも櫻に至つては珍奇なりとし、詩  
歌に賦詠するもの多く、觀賞の人絶えず。近來大半枯衰して舊態なく、南枝纔に花を綴るを見る。

櫻山神社祠前より内丸を横りて一直線に進む路を大手先と稱し、内丸座、盛岡新聞社等あり。この街路及びこの街路と丁字形を爲す本町通りには瀟洒なる旗亭紅燈を列ね、絃歌の聲絶えず。資金六十万圓と稱する農工銀行も此町内にあり。其東南端は上の橋に至るべく、橋畔なる紙町には盛岡病院を存す。上の橋より更に上流に沿ひて連る下小路には、南部伯爵の別邸あり。舊藩時代には御藥園たりし所とす。また内丸より西方に日影門外小路及び四ツ家町には盛岡稅務署、私立東北女學校、天主教教會堂等を見るべく、また仁王小路に進めば、古川端に原敬氏の別邸あり。弘前憲兵隊盛岡分隊、櫻城小學校等の前を過ぎて、材木町、茅町の般賑地に入る。こゝは國道及び秋田街道の出口に當り且つ盛岡高等農林學校、盛岡停車場、兵營等を遠からざる近傍に扣ふるを以て、近時頗る繁榮を來し、車馬絡繹貨物集散頗る敏活なり。蓋し新興の商業地區にして其西は北上川に限らる。大澤川原小路は内丸仁王小路等の南西に當り縣立盛岡高等女學校、縣立農學校、メソヂスト教會等あり。日本基督教會及び作人館中學

部等は其漸く下の橋に近ける内丸の地區内にあり。

●●●●●  
中津川以南 中の橋より南に連る街衢は中の橋通りにして其略中央なる十字街頭にルネッサンス式の隆穹、天を摩する盛岡銀行の大建築を見る。此銀行は資本金百五十万圓、盛岡本金庫及び日本銀行、勸業銀行の代理店を兼ね、日詰、花巻、黒澤尻、水澤岩谷堂、一關、千蔵、盛、遠野、久慈、福岡等の要所に各支店を置き縣下金融界の全局を支配す。こゝより東北、紺屋町には盛岡電氣株式會社、岩手公論社、劇場藤澤座等あり。電氣會社は市の東郊築川に發電所を置き、市内に電燈、動力を供給し來れるが近年其業務を擴張し、資本金を三十万圓に増し、更に第二の發電所を岩手山の西南葛根田に設けんとしつゝあり。扱て盛岡銀行より西南吳服町には盛岡郵便局、電話交換局、安田銀行支店、九十銀行(資本金三十万圓)、岩手銀行(資本金五十万圓)等を存す。就中九十銀行の建築は其雄大壯麗、盛岡銀行に及ばずと雖も、セセッション式の閑雅なる結構、市街の面目を添ふること少からず。六日町に事務所を置く信用組合は全國

の摸範組合として表彰せられし事あるもの、其貢献する所また大なり。吳服町と腹背相接する肴町は蓋し盛岡市中第一の繁華地區たるべく、街路修潔にして行人絶えず。巨商店舗を連ね、裝飾相競ふ。町内に岩手毎日新聞社あり。見馴松を以て有名なる菊池氏邸の賜松園は之と相遠からざる餌差小路の一隅に存す。肴町より東南に入れば遊里八幡町ありて、紅樓青燈、絃聲歌吹、真に一廓の不夜城を爲す。柳糸煙る夕、勾欄に美人を擁して、鑪山に對すれば、そゝろに京洛東山の春色を偲ばしむと云ふ。此町の南裏は新馬町と云ひ、其東端に唐濶なる家畜市場を擁せり。明治四十五年、盛岡土地建物會社が市場擁護の旨を兼ねて修築せしものにかゝり、未だ屋舎の並列を見るに至らずと雖、地域宏大にして、將來の繁盛を想見せしむ。元來盛岡の馬市は、往古より此南方馬町に開設せらるゝ習ひなりしが、家畜市場法設定の結果、遂に此地に新設を餘儀なくせられたる也。市場の面積四千六百坪、厩舎三棟、事務所、馬檢場各一棟（總建坪三百余坪）。場内よく駿馬逸足を集むるに足れり。以上諸街の外河南に屬する

ものは、鍛冶町、加賀野小路、生姜町、十三日町、穀町、新穀町、鉈屋町、川原町、大清水小路、上衆小路等にして、上衆小路の海産物市場は馬町の青物市場と共に全市に食料を供給する重要な箇所たり。西南端は北上川を以て限られ、杉土手スギドテと稱する堤塘を以て之を防げり。堤上巨杉天に參し、白日尙暗さを覺ゆ。舊藩時代水防上造營せられしものにして所謂大名工事の雄偉驚嘆に値するものあり。對岸を仙北町と云ふ。

見馴松 明治九年車駕東巡し、岩手縣盛岡に駐まる。縣七菊池金吾の家を以て行宮に充つ。庭に古松あり。鐵幹輪困、翠は蓋うて日を遮る。上愛撫已むなし。今茲に北巡し重ねて蹕を駐む。此時炎熱に方り御榻を樹蔭に移す。清風稷々涼氣水上の如し。觀みて左右に謂つて曰く、朕は老耄を忘れず。老耄寧ろ朕を忘ると。乃ち名を賜つて見馴松と曰ふ。待從西四辻公業きんごうに勅し詠するに國詩を以てせしむ。

菊池金吾が家の庭の松にみなれて御名を賜はりて  
その心をよめと仰せありければ

あらたなる色にも千代をさしげけり

君が見なれのやとの松が枝

明治十四年八月二十日

侍從 從四位 藤原公業





の神威應あり、白髪童顔の姿となつて、現れ出てきとかや。又往時此のわたりに悪鬼あり、頻りに里人を惱ましけるが、三ツ石の神之を退治し、再び來り冒さざる誓ひにとて、岩石に手型を印せしめ、爾來この邑を岩手と稱したりてふ傳説もあり。

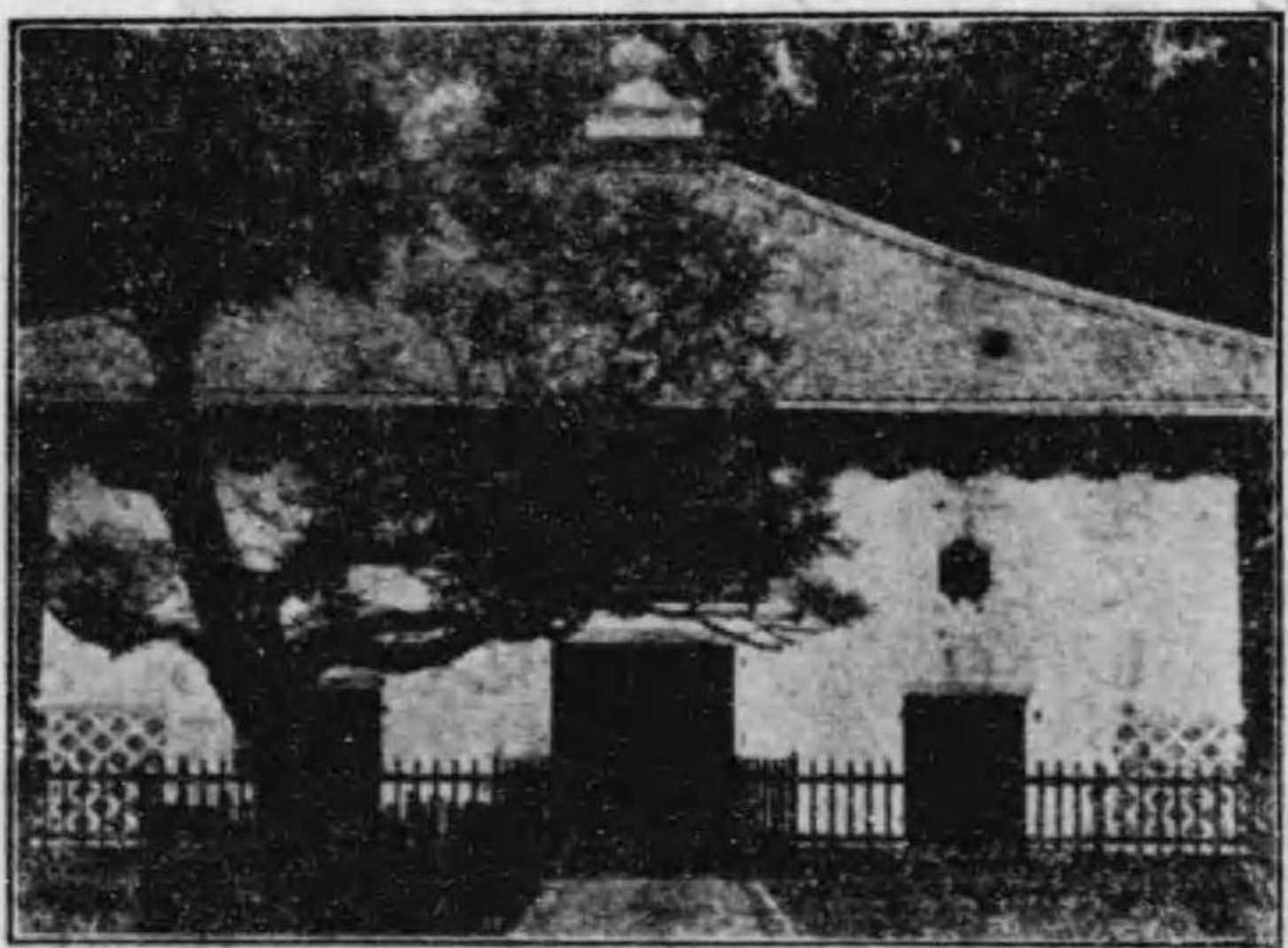
**本誓寺** 三ツ割にあり。石森山と號し眞宗大谷派に屬す。親鸞聖人十弟子の高足吉田是心、建保三年、師命により、聖人自作の木像を奉し、奥羽に布教し、紫波郡彦部村字石ノ森に一寺を創建したるもの即ち本寺也。天正十八年、十六世賢勝に至り、同郡二日町新田に於て更に一寺を建立し自ら住職となり、彦部村の舊跡は正養院と改稱し、次男教勝に譲りぬ。後、寶永十二年に至り二日町の本寺を今の地に移轉せるなり。明治二十九年回祿の災にかゝり、舊時の盛觀を失へるも、東北有數の名刹として其名高し。本尊阿彌陀如來の立像は惠心僧都の作と傳へられ、姿体優美端嚴微好の相を湛ふ。尙世に黒佛と稱するは即ち親鸞聖人の作にして、同寺唯一の寶物として金色の厨子に奉安せられ、眞宗門徒の禮拜するもの遠近より頻至す。其他寶物に聖人作聖德太子像、頓阿法師作人丸木像及び安倍貞任の陳太刀等あり。

**片葉の蘆** 本誓寺等の北方を流る、櫻川と稱する小川の岸に叢生す。其葉の一方にのび伸ぶるを以て此名あれど、今漸く稀觀となれり。この邊は昔、松坂と呼ばれしところにして、『盛岡土産』と稱する書中に曰く、『松坂路畔、綠樹暗きところに草賊横行し、白晝も猶行人稀れなりしが、一夕觀世音を負ひし行脚ありて、此地に泊せしが、賊は其の睡眠を窺ひ、一刀の下に斫らんとす。僧驚き目覺めて觀世音を見れば何んぞ圖らん、佛体路傍に横り、手、腕、所を異にし、其手河岸に漂ひ、ふるゝ所の蘆悉く片葉となれり』と。荒誕、信ずべからずと雖、また一場の談柄たるべし。

**報恩寺** 山號は鳩峯山。曹洞宗なり。寺域は米内村關口に屬し五千五百坪と云ふ。貞治年中、通山長徹和尚の開基にかゝり、南部守行之を三戸城下に建てしが、慶長六年現在の地域に移せり。藩政の時、二十九の末寺を有し二百八個寺の總祿にして、二百石を領せり。堂宇莊嚴を極む。維新の際、國老檜山佐渡、南部藩が奥州同盟に加は

りし責を一身に負ひ、從容として自刃せしは實に此寺也。佐渡、殉國の血痕今尚鯉魚の小襖に印して腥膻の氣、人に迫るの慨あり。

境内に七間四面の堂宇ありて、大佛師駒野丹下が傑作にかゝる五百羅漢像を安置す。一時堂壁頽破、佛体また落剝し、眼底の珠玉逸散するもの多かりしが、今や堂宇の修理完全し、巨匠、神鑿のあと、更に生采を滯び來りぬ。天井の龍圖は狩野林泉の筆にして嘗て米人フェノローサ氏の鑑賞を博したり。平生は閉扉するも、些少の觀覽料を以てして容易に一見するを得。堂前に一老菩提樹あり。枝葉の繁茂、寒地にあつては確に稀有とすべしと云ふ。外に寺寶として後柏原院の小倉山莊の色紙、弘法大師不動尊の幅等あり。



漢羅百五 (寺恩報)

●●●●● 檜山佐渡 緯は隆吉。南部利濟の時廿二歳にして其國老となる。後、海内尊攘説行はれ、幕府政權を奉還して會津征討となり、奥羽同盟となるや、佐渡京師より東歸して仙臺の藩老但木土佐と會し、直ちに盛岡に入りて藩論を佐幕に決す。既にして秋田藩まづ奥羽同盟を脱するに及び、自ら兵を率ゐて大館を破り兵威を示せしが既にして官軍米澤、仙臺を降し、南部藩また次で屈す。佐渡乃ち天なりとなし、自ら背逆の罪を一身に負ふ。明治二年六月、三十九歳にして刑に就けり。明治二十二年朝廷戊辰の役藩事に死するものを許さるゝに及び有志相はかりて碑を城北櫻山に建て、以て佐渡の靈を慰む。

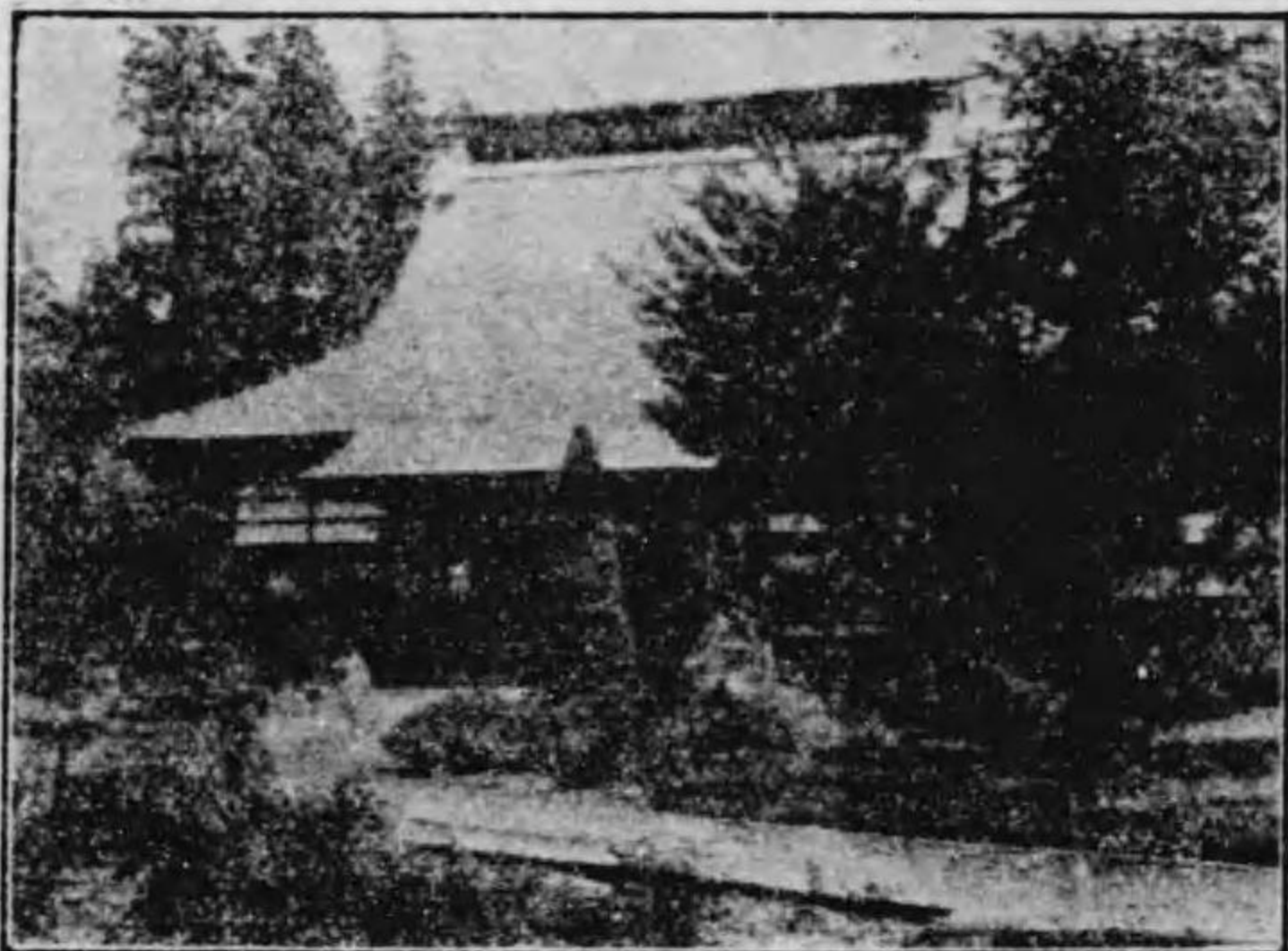
●●●●● 愛宕山 報恩寺の背後に峙てる丘陵を愛宕山とす。往時、法輪山廣福寺と稱する輪奐美麗の寺塔ありしも、今全く荒廢して斷礎唯乱草に埋る。此山盛岡全市を下瞰して風光の佳絶なるのみならず、晩秋の交、満山の紅葉灼焉として燃え、さながら錦帳を翻すに似たり。其東麓には岩屋稻荷あり。岩谷温泉ありて、遊客の吟杖絶えず。黒田騒動に有名なる栗山大膳の碑、及南部藩隨一の畫傑川口月嶺の墓は南麓なる盛岡山永福寺の廢趾にあり。大膳碑は今恩流寺の境内に入る。永福寺につきては、和漢三才圖會に記事あり。曰く「永福寺は南部盛岡にあり。寺領七百石。古、坂上田村麿東夷征

伐の時、祈願所として之を建立す」と。舊藩時代また南部氏の祈願所たりしが、後遂に廢滅せり。

川口月嶺 名は七之助、幼名榮七、字有度。月嶺と號す。文化九年十二月、陸中鹿角郡花輪町に生る。歳十八都門に入りて南嶺の門に遊び精勵すること十余年。當時の幕老關宿侯賜ふに食祿を以てせしも、辭して劍を伊藤一心齋に、易を堀川無明に學ぶ。後陸中に歸るや南部利濟食祿を給し、以て仕へしむ。文久年間京に上り諸名家を訪ひ、攝津、河内、大和、播磨等の名所舊跡を寫生し技益々進めり。月嶺の畫は南宗より四條に入れるもの、その鳥獸に至つては殊に飛動の態あり。曾て侯命を奉じ金屏二双を畫き、三年にして成る。一は春秋の花鳥、一は蘭亭にして頗る鮮麗を極む。今猶南部家の珍藏たり。故郷大日堂の牛の巨額(豎一丈横二尺)も人の噴々するところ。明治四年七月廿一日、六十一を以て没す。

願教寺 米内村北山にあり。眞宗本派に屬す。開基は是心十五世の孫たる淨信にして寺號は寛永十九年本願寺良如上人より與へられたるものなり。本堂は弘化二年南部信濃守の造營にかゝり、縣下屈指の大伽藍なり、明治宗教界の偉人島津默雷師の住持せしところ。古松颯々として清陰甃石の上に散落す。

聖壽寺 京都妙心寺の末寺にして臨濟宗に屬し、大光山又は萬年山と號す。開山は



願教寺

三光國齊國師にして盛岡五ヶ寺の第一に位す。南部家の菩提所にして累代の墳墓あり。藩時は南部氏の扶助を得て殿堂莊麗、頗る繁榮せしが、維新後全く頽廢し、曾て其跡に縣社櫻山神社を奉遷せしことありしも、今僅かに五重塔の一階のみ寒葉隕露の間に餘哀を残す。山上櫻花多く香雲簇るを以て俗に櫻山と呼ぶ。

移されし社のあとや梅寒し 素茗

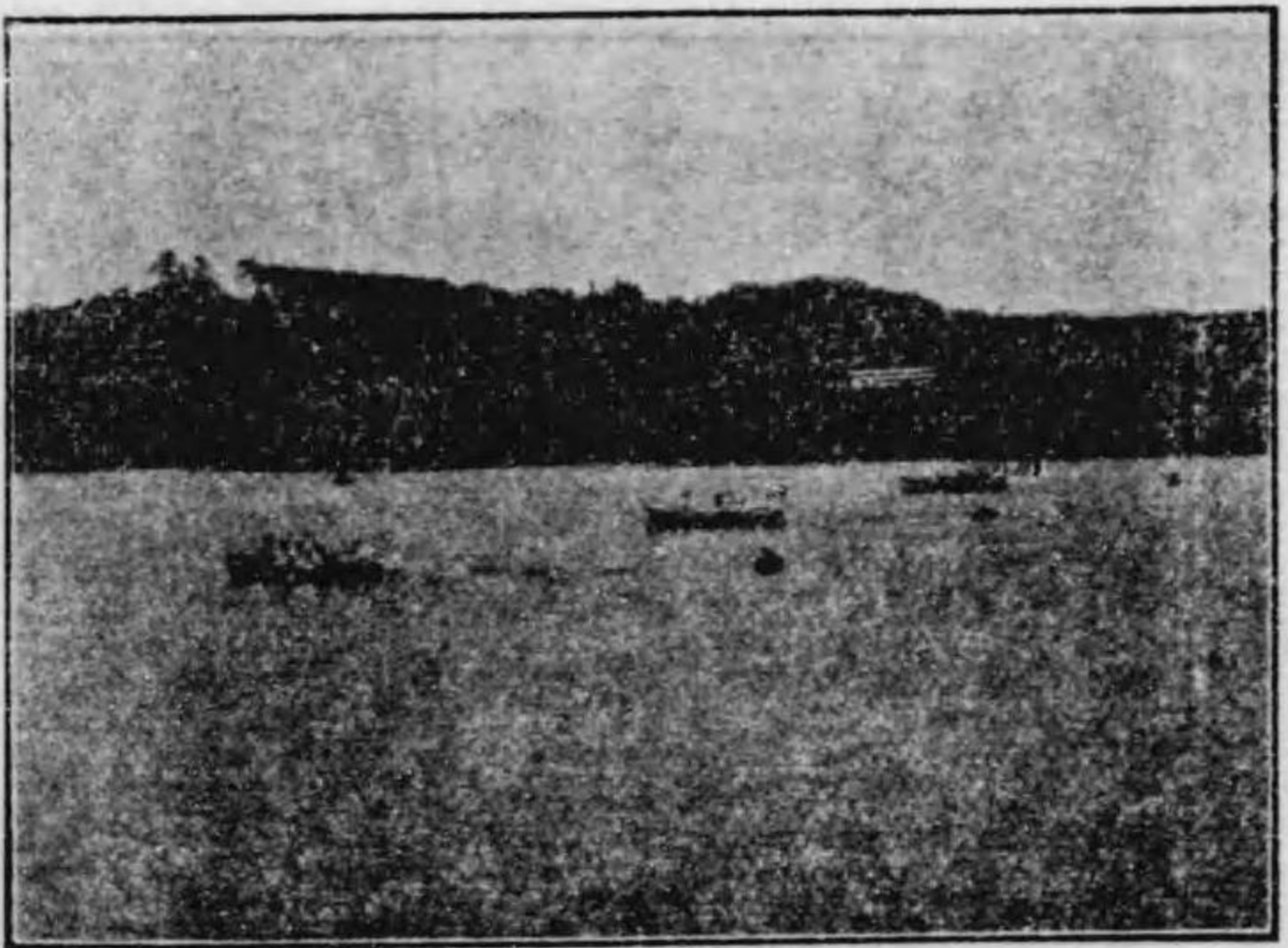
高松池 附

櫻山の山頂、更に數十級の石階を數へて登り、松柏の下、南部家歴代の墳墓の間を縫ひて北方、上田の地に向へば一面の明鏡に似たる高松の池を望

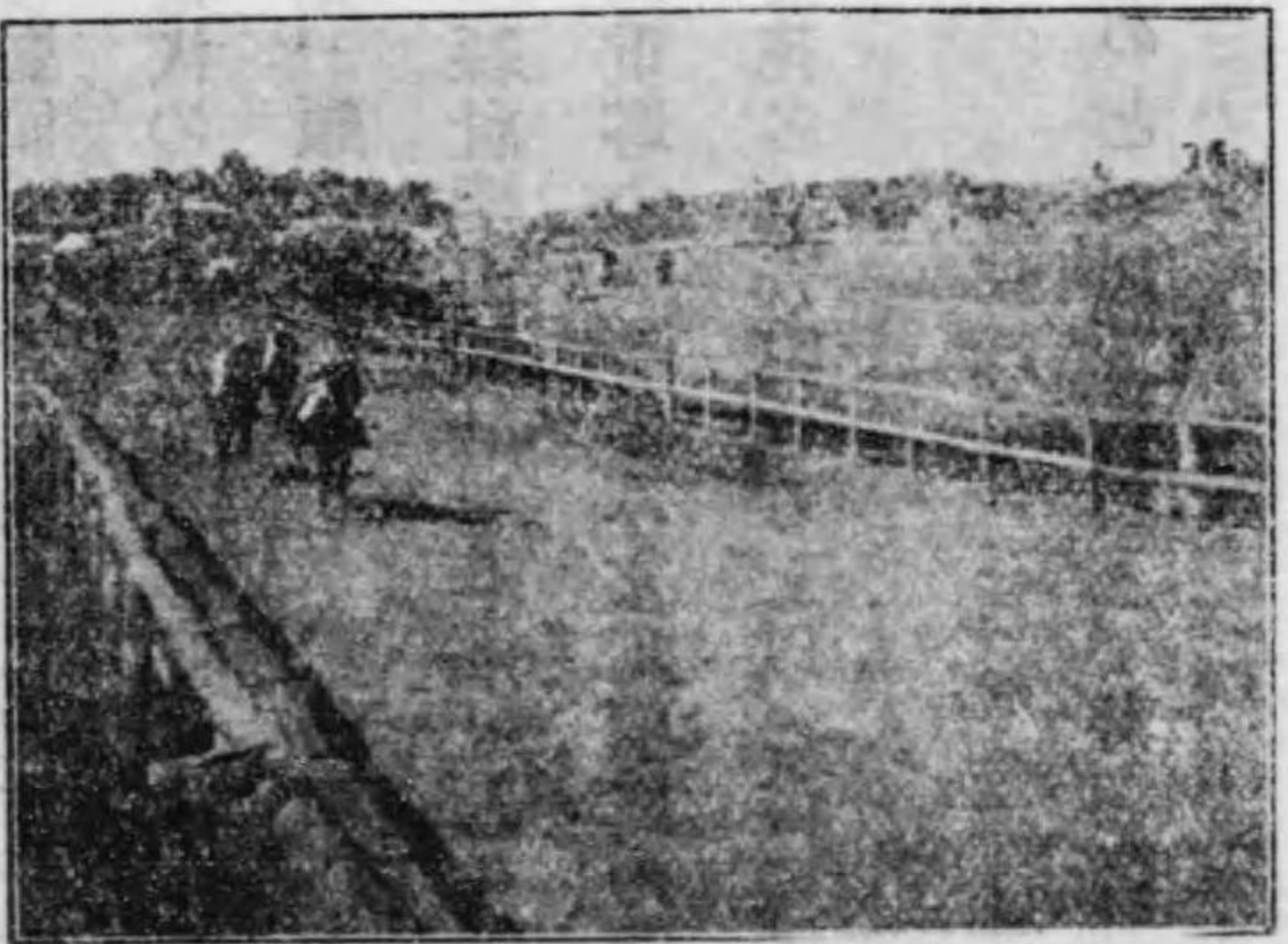
むべし。周回一里に満たざるも激艶たる波光、巒影樹色を蘸し、風光明媚なり。近年堤上に櫻樹紅楓を移植したれば、春は櫻雲池を埋め、秋は錦鋪波に輝く、名づけて五

秀園と云ふ。池畔

に茶亭ありて數隻の短艇を有し市人の來遊を待つ。又嚴寒の候は水面一帶堅氷を結び、屢屢諸學校の盛大なる水上運動會催さる。



高松の池



黄金競馬場

●●●●●黄金馬場 高松の池より西に五丁、明治三十六年の創設にして、巖手縣産馬組合主

催となりて、毎年盛大なる競馬會を舉行し來れり。偶々、閑院宮殿下東北御巡視の際臺臨あり、此地、往年 聖上行幸の折、御料に供したる黄金水の附近なるに因み、黄金馬場と命名せらる。明治四十五年奥羽六縣聯合競馬會開催せらるゝに際し、一哩に擴大せられたり。地勢高燥にして、北上川の水聲近く響き、茨島の松林遙に連り、風光掬すべきものあり。

●●●●●盛岡高等農林學校 高松池の南方なる盛岡市上田にあり。地積八万九千八百余坪を有し、本校、農場、家畜病院、寄宿舎等遠く連る。科を分ちて農科、林科、獸醫科となし、明治三十五年の創設にかゝる。現在收容する生徒は二百二十餘名なり。現時の校長を佐藤義長氏とす。



盛岡高等農林學校

八幡山

盛岡東南一帯に連続せる岡陵を讀み込みし俗謡あり。蓋し維新當初唄はれしものならん。曰く

此處は八幡山、松尾の茶畑の、三王山越えて、御崎、住吉、天神様の鹿島山、こゝらて一杯飲むが善い。ジャ／＼ナヂヨスベナ

(註) 『御母さんどうしたら善いでせう』と云ふ意

八幡山は北山地方と共に盛岡の名勝として稱せらるれど、彼と此とは景趣に於て全く相異なれり。北山には老杉に包まれたる佛堂多く、八幡山には著名なる社殿多し。子規の句に所謂『岡あれば宮宮あれば梅白し』の趣きなきに非ず。惜しいかな、明治十七年

盛岡大火の節社祠の大半は焼失したれど尙一巡に値する所多し。



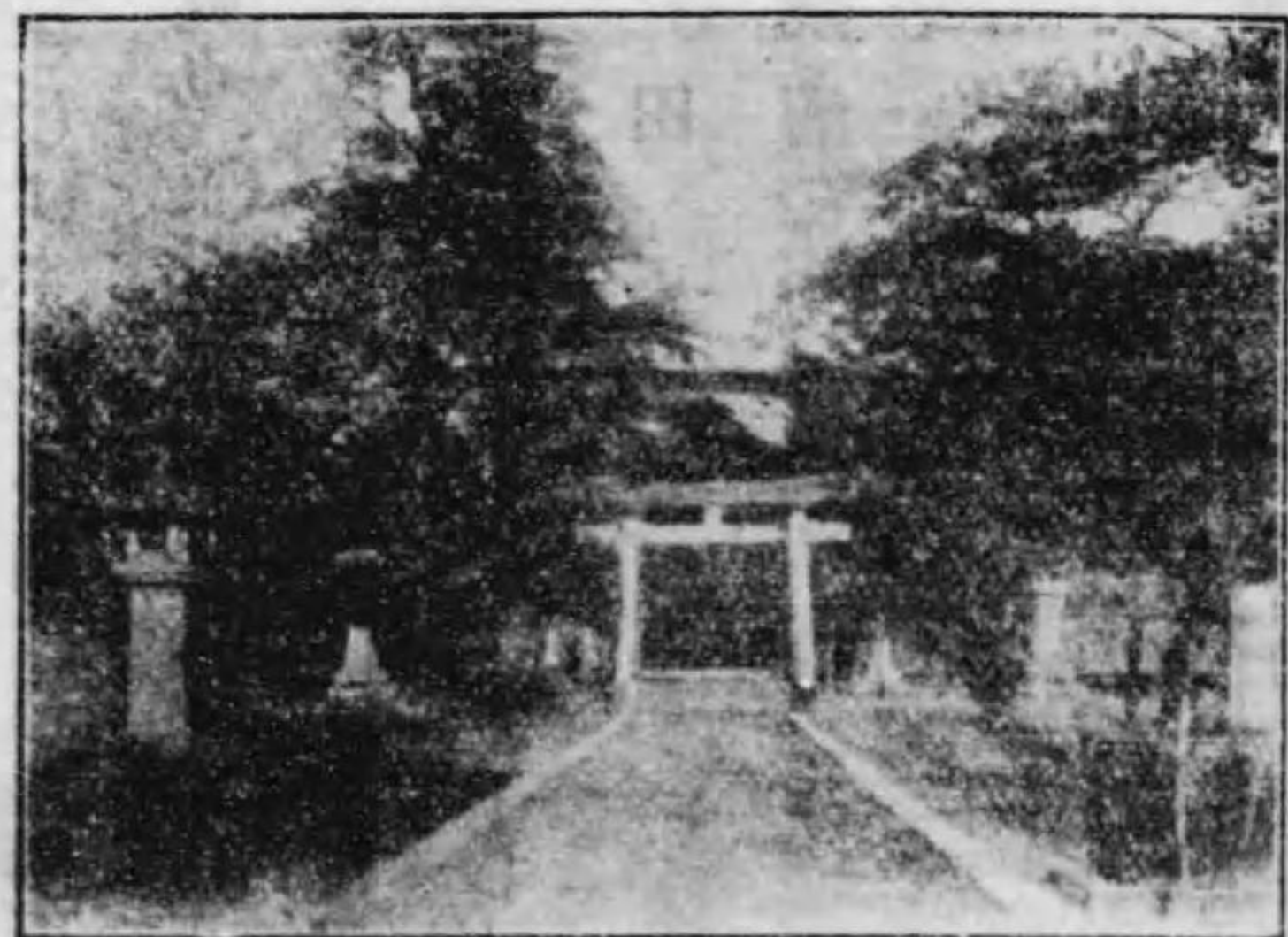
盛岡高等農林學校農藝化學實驗室

●●●松尾山 八幡山の南端オホシシケ字志家に位し、南部信直、斯波氏征討のために備へし館の趾なりと云ふ。山上に大山オホヤマ昨命を祭れる松尾神社あり。寛永年中藩命を國中の酒造家に

下して勸請せしものなり。新馬町なる家畜市場を俯瞰すべし。その麓の廣地に五頭如來、拾六羅漢の巨大なる石像並立す。飯岡山より搬出せし花崗石にて彫刻せしものにして佛身皆丈餘。頗る偉觀なり。

●●●縣社八幡宮 盛岡市八幡町の盡頭志家にあり。譽はん田別尊たわけのみことを祭る。もと盛岡城内三社の一なりしを延寶七年南部行信此地に建立せりと云ひ、或は康平五年源頼義東征の凱旋に際し此地を過ぎ、一社をこゝに勸請せるを、行信に至りて成就せるなりとも云ふ。

明治十七年の災に本殿、拜殿、神樂殿、能樂殿等を焼失し、後再建したるも舊觀の壯



縣社八幡宮

麗に及び難し。例祭は毎年九月十四日より三日間に亘りて行はれ、神輿の渡御あり。時に或は山車等の催しを爲し、満都の子女をして熱狂せしむ。境内廣濶にして樹下東西に亘り、もと一條の馬場あり。往時流鏑馬を行ひし處也。又社前大華表の堅額は正二位藤原資孝が弘法大師の書を集成せしものにして其名著はる。神苑春至れば櫻花、古松の間に乱發し、紅露綠露繽紛として滴る所、白鳩の目覺めて啼くもすがくし。

安田泰堂

柳壘花笑兩相宜。

卷畫樓臺翻酒旗。

一隊紅粧時樣好。

黃昏來賽二鳩祠。

石川鴻齋

齋廟陰森綠覆天。

雙鳩常對護階前。

一條細水纒分界。

兩々鴛鴦接首眠。

招魂社 八幡社の傍にあり。始め中津河畔なる内丸舊公園に奉賽せられしが、岩手

公園の設置と共に舊公園の廢せらるゝや、即ち此地に遷座せしもの。社殿淨閑よして境内に二碑あり。一は舊盛岡藩士目時隆之進、中島源三二氏の碑、一は西南役殉死者の碑、即ちこれ。祭典は毎年五月五、六の兩日行はる。官衙、學校殊に軍隊の參拜あり。

目時隆之進 南部侯に仕へて參政たり。人となり温厚勤儉。戊辰の役國老槍山佐渡等仙臺會津と同盟して佐幕の説を主張せしに、隆之進中島源三と共に勤王を勤むれども聞かず。故に一二同志と長州に奔り其の藩邸に潛む。同盟の破るゝに及隆之進重用せられて國事を整理す。已にして朝廷利剛父子を江戸に召す。隆之進隨從し周旋尤も勤む。されど一藩、隆之進を目して國を賣るの姦臣となし、國に還らしめて之を罰せんとす。隆之進乃ち國に歸る。途に其子貞次郎の京に行くに逢ひ諭して曰く、人生朝露の如し、誰れか百年を期せん、汝我が志を繼ぎ、利害を以て志を動かすこと勿れと。和賀郡黒澤尻に到り、旅舎に於て屠腹し「報國」の二字を粉壁に血書して死す。時に年四十七。朝廷その忠節を賞し、祭祀金二百圓を賜ひ、明治二十四年正五位を贈らる。(『岩手縣郷土史』)

中島源三 性剛直、南部侯に仕へて目付となる。戊辰の役目時氏と共に勤王の説を唱へたれども藩論佐幕に決して動かすべからず。源三憂憤して病を發す。時に源三槍山佐渡等と京都にありて天下の形勢を視察し、進み

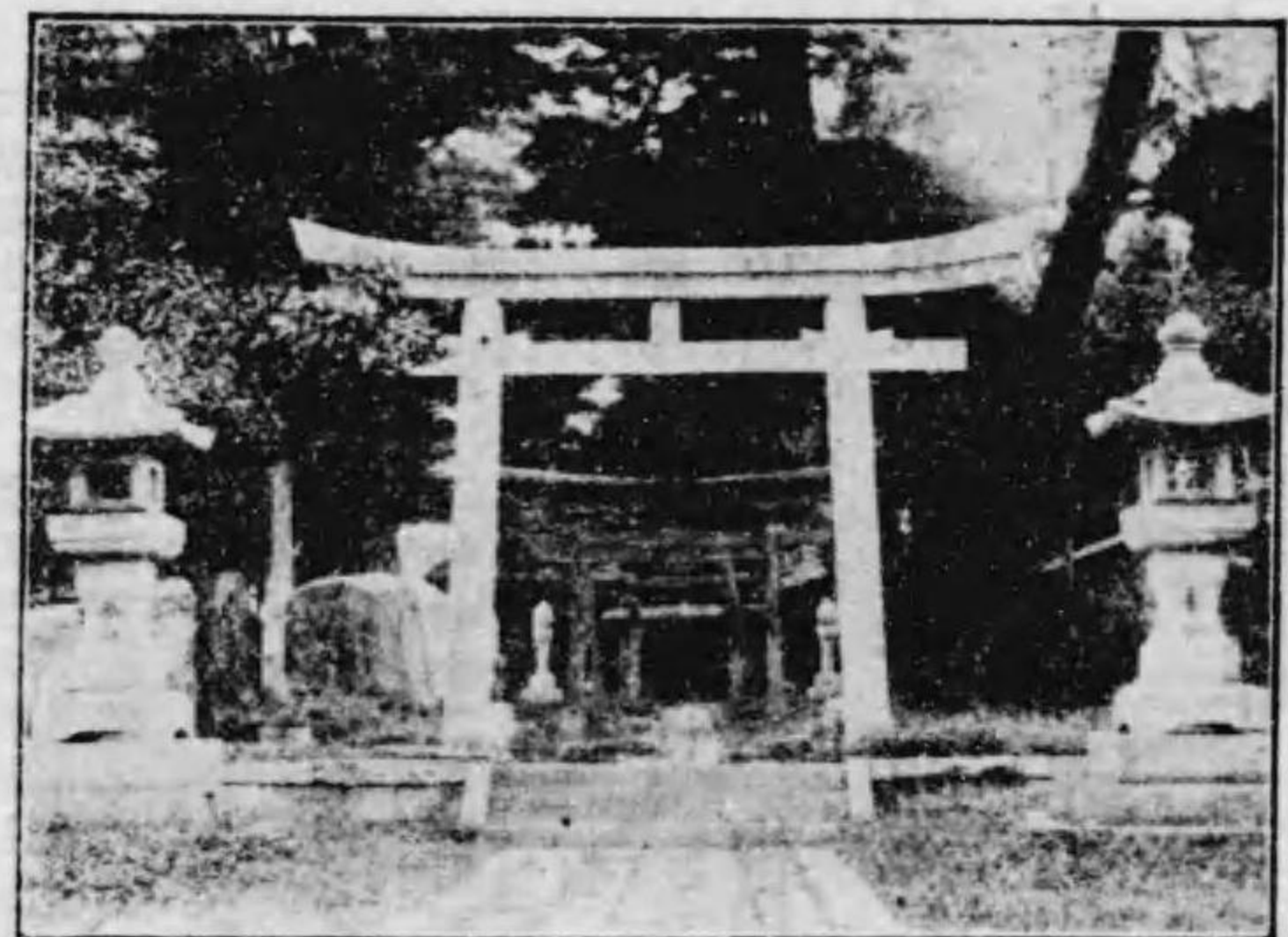
て浪華に至る。一夜憤慨惜く能はず。遺書を作りて旅舎に自殺し、指を血に染めて「奸臣殺忠臣」の五字を紙燈に大書し同僚佐々木直作をよびて遺書を託し、又檜山佐渡に見えんことを求む。佐渡至る。源三容を整へて曰く、君は正にして生き、我は邪にして死す。唯君心を國事に用ゐよと。其弟某を召して曰く生きて家國の亡ぶるを見んよりは死して義鬼となるに如かず。汝我に代りて能く父母に仕へよと。言終りて死す。年四十。朝廷より目時氏と同じき追賞を賜ふ。(全上)

●●●三王山 招魂社の北方にあり。浅岸村大字新庄字藤ヶ森に屬す。貞享四年南部行信の建立せし山王祠ありたる所なりしが、今や地人の私有に屬し、散策の客をして來り登臨するに任ず。岩手公園開設以前は茶亭酒旗翻り男女絡繹として來集したりしも、以後甚た振はず。唯一望豁然として天地開け、草風匂ひ虫聲咽び、趣致頗る掬すべきものあり。且つ新緑杜鵑を聞くの候藤花、老杉に懸りて一朶の紫雲を漲す。また市東の景勝と云ふべし。

●●●住吉神社 三王山の下、老槻天に矗立せる所、其奥に住吉神社の古雅なる社殿あり。祭神は上筒男命、中筒男命、底筒男命の三神にして、古來より海士其他の尊崇を受け

華表の兩側に並立する八基の石燈籠皆風韻を湛ふ。

●●●天神山 同じく浅岸村字新庄に屬し、八幡山連岡の北端に位す。盛岡市を東に距る



天 滿 宮

十二町なり。丘上の天滿宮は寛永二年まで市内四ツ家町にありしが、再三遷座の後、延寶七年現在の地に安置す。神体は筑前太宰府安樂院の飛梅を以て作れるものなり。境内に芭蕉碑、筆塚、松濤舍素郷の碑、菅廟植梅記の碑等あり。素郷の碑、自筆の句を刻して曰く、『思無邪、梅開き柳青めは夢もなし』と。梅樹數百株鐵幹瑳瑳として早春一時に芳芬の氣を放つ。近時盛岡市の有志市内紙町より一直線に此岡の麓に至る道路を開鑿し以て登拜に便せり。

●●●小野素郷 盛岡の人。松濤舍素郷と號す。人となり謹厚母に事へて至孝なり。嘗て京師に上り僑居年あり。翁



俳諧を嗜み贅を夢幻庵蝶夢に執り、孜々として自ら勉め、大に其蘊奥を極む。明和九年、芭蕉翁の七十九忌辰に當るを以て、翁蝶夢と相議し別に幻住庵の記を撰び、自ら一片の板に書し、之を義仲寺に繋げ以て不朽に傳ふ。是を以て俳名四方に鳴る。且、京師にある日屢々禁門に出入し、仙洞に上謁し、御印を賜はりたる事あり。世人以て榮とす。翁、天明三年五月、郷に歸り、居を盛岡城東志家村に卜し、自ら望春亭と稱す。翁の俳道大に行はれ、門人日に進む。翁傍ら書をよくし、又觀世流の謠曲に通じ、且、屢々公命をうけて祝詞を作る。文政三年四月卒す。年七十二。〔岩手縣史談〕

白露やよき匂ひする草の中 素郷

尙近傍に新庄不動尊、梅屋敷、牛頭天王社、小山觀世音、八雲社等の名勝名跡星羅の如く散在す。又近く東方に聳ゆる高巒あり。頂上峨々たる巖石に蔽はるゝを以て俗に岩山と名つく。盛岡東方の鎮なり。

明治橋

盛岡市川原町より南方仙北町へ赴く途中、北上川に架せる長橋を明治橋と云ふ。國道に當る要路にして長さ八十間半、幅凡そ四間、往昔は霖雨の候に及べば年々横流汎濫し未だ之に堪ふるだけの工事を能くせざりしを以て舟橋とし、事あ

れば舟を引きて其流失に備へたり。古松軒の東遊雜記にも『北上川の渡りには船橋かゝる。船數三十艘を鐵の大なる鎖を以てつなぎ合せ船の上には厚板を幅二間にも並べしきて、是も鎖にてつなく。いかなる洪水にても流れざるやうに丈夫に巧みし橋にして、他國未だ見ざる橋なり』とある、即ちこれなり。明治六年に至り、時の縣令島惟精工しまこれきよを起し翌年五月工を終ふ。橋上の中央に一碑を建て刻して明治橋と云ふ。北上川は此橋の少し上流に於て中津川、雫石川を合せ、其下流に於て築川を容る。橋上に立ちて望めは、蒼々たる煙波の間に東の方鐘かどかね山峠やまのたけち、西に南昌山聳え、風光明媚、人をして轉々『舟橋八景』の名の偶然ならざるを思はしむ。尙孟蘭盆には市人橋畔に集ひ俗に『舟流し』と稱する流燈の供養を行ふ。以前



明治橋

は頗る賑ひしが近年舊曆廢止と共に漸次衰退し行くものゝ如し。

六十

●●●●●●●●●●  
圓光寺の晩鐘 明治橋の北、川原町に淨土宗の名刹圓光寺あり。元祿の頃南部領内に切支丹宗の流布せし頃此町の材木商菊池與一郎と云へる者斬首の上臈首せられしが、當時大奥の女中たりし其女蓮子之を聞いて悲慟に堪へず、夜竊かに刑場に至り、父の首級を盗みて之を此寺に齎し寺に其埋葬を乞ふ。翌朝蓮子城に歸り自首して罪を待ちしに、藩主行信其孝心に感じ遂に之を側室とせり。後鐘山に圓光寺の梵鐘鑄初式あり。蓮子、寺僧が曩日の厚意に酬みんとして、懷中の小判を投じて釜中に納む。梵鐘の音響爲に高朗にして永く橋畔の征夫を悲ましむと云ふ。

●●●●●●●●●●  
縣立農事試験場

仙北町の西郊にあり。普通作物、果樹、園藝等各種の試験を行ひ縣下に範を示し且つ優良種苗の配付を行ふ。本場に附屬する青酸瓦斯燻煙室は構造完備し、苹果其他苗木に附著する害虫を燻殺して當業者を裨益しつゝあり。

●●●●●  
感恩寺

仙北町の南端小高にあり。日蓮宗に屬す。開山は日淳即ち下斗米大作の長男勝之助なり。文政五年大作、南部家のため怨を津輕氏に報ぜんとして成らず、刑に就くや、官、糾明、遺族に及ぶ恐れあり。是に於て勝之助匿れて駿州大石寺に入りて

僧となり、日淳と稱し、僅に免るゝを得たり。寺畔、大作の碑あり。文學博士三島中州の撰文にかゝる。又近傍俗に殺生場と唱ふる重罪刑の執行場の跡あり。今畑地となり菜花麥浪に舊時の倂を止めずと雖も、三面松樹圍繞して容易に摸索し得べし。側に流るゝ小川を罪川と云ふ。此の地は天正の頃、斯波勢と不來方勢と激戦したる處。今尙腥風血雨の當時を想はしむ。

●●●●●  
津志田

これより松並木の路、十五町にして紫波郡見前村津志田に至る。文化七年妓樓を盛岡八幡町より移せしところ、吉田松陰をして其東國巡遊中『北上川の舟橋を渡り、津志田村を過ぐ。方に道樹を仆し良田を廢し、新に妓樓十家を起せり。南部の國事實に悼むべき哉』と痛嘆せしめしもの即ちこゝなり。今、里芋の産多し。

●●●●●  
鐘山

盛岡の東南に當り南部小富士の稱あり。明和年中の郷村志に『吾田多良山、在城府南一里、續赤前山、邦内名勝第一也』と云へるもの、これにして全山翠黛濃く、風姿頗る超凡、王秋萩花瞭乱として虫聲明月を籠むる時、又天下得難き奇景

六十一

とす。

鐘山秋月

館文恭

雲晴露冷桂花清

忽見鐘山孤月明

夜座江樓人盡望

流光遍照杜陵城

東方の山麓を流る、築川は、岩手郡の最東端兜明神岳の南方に發源し周流三里、清明なる水流、赭岩蒼石參差する間に涓々の響きをあげ來る。此邊古より名勝の地として知られ、俚語に「一に金勢(即ち智和伎神社)、二に疊石、石割明神、三に藁田松」と云ふ。盛岡電氣株式會社の發電所は鐘山の北涯に装置せられ其や、上流に天狗森、福名湯等の勝あり。又宮古街道は上小路より築川に沿うて、東に走る。

發電所に遊びて

一廊の灯や谿の雪發電所

碧梧桐

技師と社長工夫と我と炭火かな

同

鐘山の南方北上川に面する傾斜地は、よく林檎栽培地として好適す。春は淡紅の花、水光に映じ、秋は累々たる紅果、枝頭に簇る。又躑躅田屋とて藩侯の花時屢々宴遊を催せし、躑躅に名高き山莊も此附近にあり。大迫街道は盛岡の市外神子田よりこの山下を通じて紫波郡乙部の小驛に至る。

厨方面

岩手山の廣茫たる裾野を背とし、北上川を隔て、盛岡市街に接續する地域を岩手郡厨川村とす。この地は今尙岩手郡に屬する部落にして、單に安倍氏の廢墟を連想せしむる傾あれとも近來の發展頗る目覺ましく、盛岡全般の勢況を支配する状あるを以て、其人家櫛比せる地區を盛岡市に合併すべしと議屢々起れり。尾澤組製糸場は字木伏キブンにあり。此地方に於ける大工場とす。

盛岡停車場

明治二十三年創設、旅客の乗降、貨物の集散繁劇にして晝夜雜踏を極

む。此驛及び此驛以北は青森運輸事務所に屬し、以南は仙臺運輸事務所に屬す。構内には埼玉縣大宮驛のそれに次ぐ一大工場あり。驛前は廣濶なる道路、東に走り、專賣

局仙臺製造所盛岡支所の前を過ぎて、北上川に架せる開運橋を越え、新築地より順次大澤川原小路に入る。

開運橋 長さ五十一間、幅四間半、東北鐵道の開通と共に新設せられたるものにして、最初は一私人の手に成りしが、明治二十四年市費五千圓を投じて之を買収せり。後、兩三回、墜落に遇ひ改修を重ねて今日に至れり。

夕顔瀨橋 開運橋の上流なる夕顔瀨橋は國道に當り、盛岡市茅町と厨川村字新田町との間にあり。長さ五十四間半、幅三間半の土橋也。此邊水流急激にして、霖雨毎に落橋の虞ありしが、明和年中盛岡藩側役頭大向伊織考案を積み、河の中央に石を疊みて橋臺を築造せしより流失の患を減ずるに至れり。此地を夕顔瀨と云ふは安倍貞任厨川に據りて源頼義と對陣せし時、貞任夕顔を以て頭顱となし人形を作り、北上川の煙靄中に立たしめて、大に擬勢を張りしに起ると云ふ。遙に上流を望めば、厨川柵上の鬱林、蒼々として黒く、北上の清流、水明かにして橋下に馳突し來り、奔湍花と碎く

るの状、また得易からざる好風景なり。

夕 顔 瀨

島 地 黙 雷

急湍水激閩聲轟。

父老相傳說擬兵。

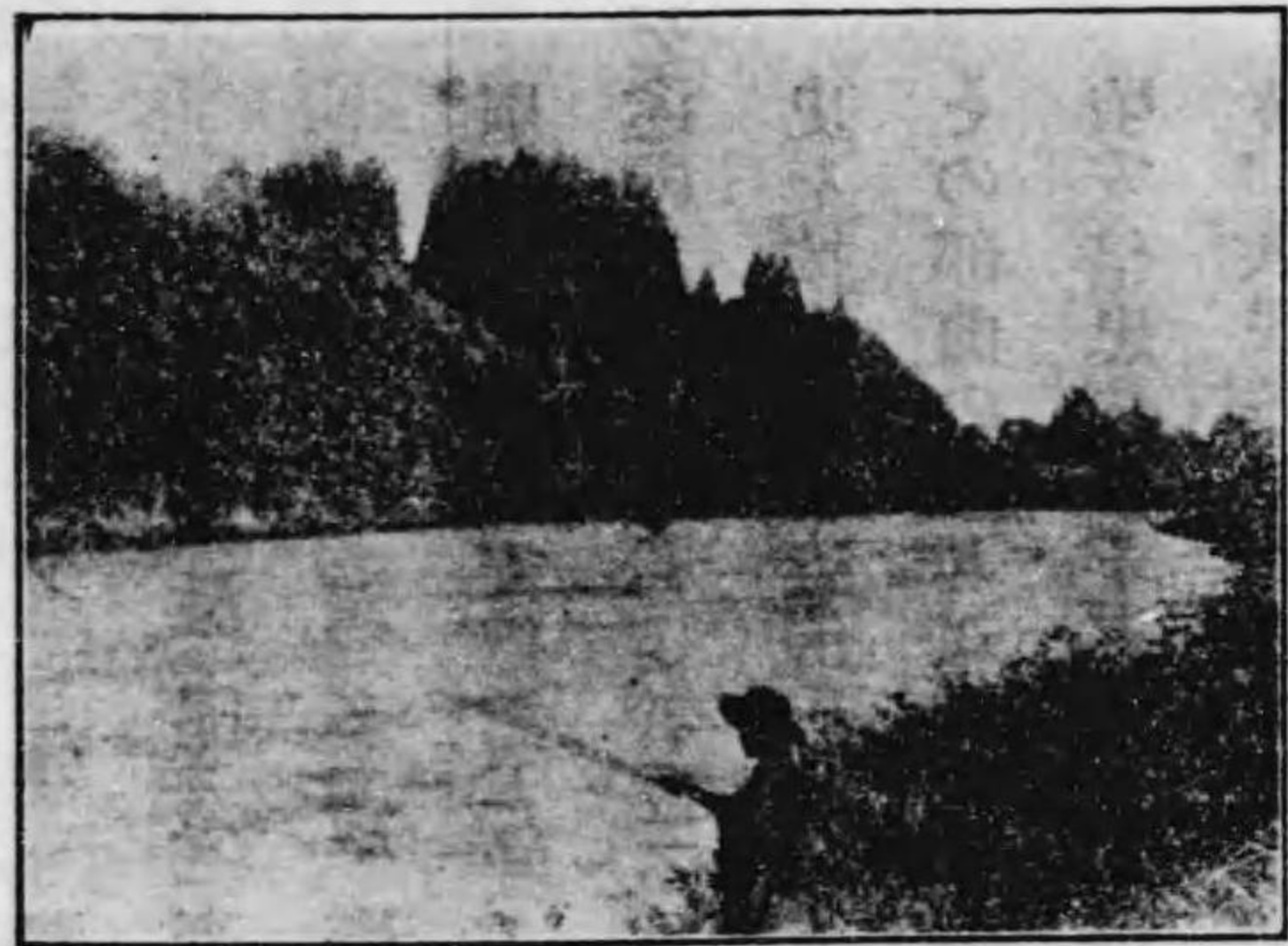
夕顔橋頭多感慨。

滿川煙雨古今情。

厨川柵 俗に安倍館と呼ぶ。前九年の役富強一世を蓋ひし安倍氏の一族は詩的終焉を遂げし地、奥羽に於ける重要な史蹟なり。

史を按ずるに安倍氏の祖先安東なるものは津輕そとがは九十度濱ひらに住し、安倍比羅夫ひらふに従ひその部曲の民となり、安倍氏と稱せるものなりと云ふ。世々陸奥國に住し、天曆の頃安倍忠頼の子忠良、陸奥太椽となり威を振ふ。その子時頼に至り祖父の積威を藉り、人民を劫略し、膽澤、和賀、江刺、稗拔、志波、岩手六郡を押領し、豪悍にして貢賦を輸せず。後冷泉天皇の朝、永承六年、陸奥守藤原登任、出羽秋田城介平、重成等頼朝を伐つて敗績す。依て源頼義を陸奥守兼鎮守府將軍として之を討たしむ。

州人素より頼義の武勇を知り惶れて悉く従ふ。頼時亦先非を悔ゆ。會々大赦に遭ひ  
 麾下に詣り罪を謝し事一旦平ぐを得たり。天喜二年頼時の子貞任罪あり、頼義之を



厨 川 柵

罰せんとす。即ち擧族衣川關に據て反す。關は衣川  
 の流に近く、頼義兵を進めて之を圍み、攻戰數年に及  
 ぶも固守して降らず。頼時が女婿亙理權太夫經清、  
 伊貝十郎永衡官軍に従ひて頼義の陣にありしが、事  
 に因りて永衡誅せらる。經清即ち去りて頼時に投ず。  
 五年、頼義、頼時が一族安倍富忠を誘うて頼時に反  
 せしむ。頼時即ち行て富忠を諭さんとす。富忠兵を  
 嶮岨に伏せて之を撃つ。大戰二日に亘り頼時流矢に  
 中り鳥海柵に還りて死す。殘兵遁れて亦柵に入る。

貞任川崎柵を保ち黃海に會戰す。時初冬に際し風雪に遭ひ、官軍飢乏人馬ともに疲

れ攻むる能はずして國府に還る。貞任彌々逆威を振ふ。康平五年七月、頼義出羽仙  
 北郡の豪族清原武則を召す。武則即ち子姪及び一萬の兵を率ゐ來りて栗原郡營岡に  
 會す。頼義大に悦び兵を分つて七軍とし磐井郡萩馬場に至り、貞任が弟宗任等の守  
 れる小松柵を攻めて陥り、九月、官軍兵食乏し、貞任之に乗じて來り撃つ。頼時力  
 戰して之を退け、遁るゝを追ふて磐井川に至る。賊溺死するもの多し。即ち勝に乗  
 じ貞任が營を襲ふ。貞任支ふる能はず、高梨宿、石板柵を棄て、衣川柵に入る。頼  
 義攻めて又之を落し白鳥村に至り、次て大麻生野及び瀬原の二柵を抜き鳥海柵を破  
 る。正任が守れる黒澤尻柵、鶴脛、比與鳥の諸柵風を望んで下る。貞任退いて厨川  
 堀戸の二柵を固守す。厨川柵は西北に大澤あり、二面は河を阻み河と柵との間に渚  
 を穿ち、守備堅固なり。官軍民戸を壊ちて渚を埋め枯草を積み火を放つて攻め、終  
 りに之を陥れ、貞任を殺し弟重任、家任及藤原經清を誅し、弟宗任、則任、正任及伯  
 父爲元を降す。此に於て陸奥始めて平ぐを得たり。世に之を前九年役と云ふ。(理學

後年、藤原泰衡源頼朝に敗らるゝや亦此所に隠伏し、其討たるゝに及び、頼朝、頼義の故事に倣ひ首級を此地に實檢せんとせり。泰衡滅後は、工藤行光之を有し、城廓を修めて居館とせり。後南部茂時の屬城となりしが、文祿年間これを毀ち今尙荒廢のまに委せらる。城趾は洋々たる北上川に臨み、斷崖數仞、深潭藍色を湛ふ所は所謂鏡ヶ淵にして、當年阿倍則任の妻、節義の爲其一子を携へて投身せりと云ふ。殘濠頽壘老杉鬱蒼として千年春再び至らず、夏に入り始めて血の如き杜鵑花を見る。

厨川 柵

大槻 磐 溪

蕩盡厨川鐵蒺藜。

漲天神火卷風狸。

可憐長狄專車骨。

六軍山河無處理。

同

頼 鴨 涯

落日秋風過厨川。

當時形勢自依然。

乱山四面成城壘。

始信糜糧十二年。

觀武ヶ原 厨川柵より西に十町、狐森に盛岡監獄の嚴重なる長壁を見て進めば、工兵第八大隊及び第廿三、四の兩聯隊より成る騎兵第三旅團の各營舎、堂々として廓を爲し、曠大なる練兵場、其北に連る。此練兵場はもと古馬頭と稱し茨島野に續く荒野なりしが、明治四十一年十月、特別工兵大演習こゝに行はるゝや、時恰も 時の東宮盛岡市に巡啓あり。演習地に臺臨、親しく御觀戰あらせらる。依つて觀武ヶ原と名く。その中央に山縣公の撰文なる碑表、屹立す。

茨島野 茨島野は又厨川野と稱し、岩手山麓の大平原にして、岩手郡瀧澤村に屬す。東西二里三十町、南北五里六町、青松一帶に叢生



騎 兵 隊

し、展望、更に目を遮るものあるなし。朝暾東天に上る時、滿眸露華きらめきて海洋の大觀にまざる。土性は第四紀古層の埴土及び壤質埴土なるも、岩手山噴出の火山灰を雜へ、且つ腐植物を含みて頗る暗黒色を呈し、その重量甚だ輕し。古來より牧場を置かれし地なり。

**岩手種馬所** 茨島野の一部に當り畜産界の重要な諸機關點在す。就中、岩手種馬所は馬政局の所管にして地域岩手郡厨川村に屬す。明治二十九年五月農商務省が、岩手郡瀧澤村に設置したるものにして、後年種馬育成所の設置せらるるに及び、全所と敷地建物を共用したりしが、明治四十年十二月遂に現在の地に移轉せり。面積二百六十九町歩、五十五頭の種牡馬を繋留し、毎年春季に際し、管内二十九箇所に出張して民有の優良牡馬に交配す。

**種馬育成所** 明治四十一年一月馬政局の創設する所にかゝり瀧澤村なる元岩手種馬所の敷地建物を襲用す。面積一千四百六町歩外に二戸郡荒澤村に於て一千五百町歩の

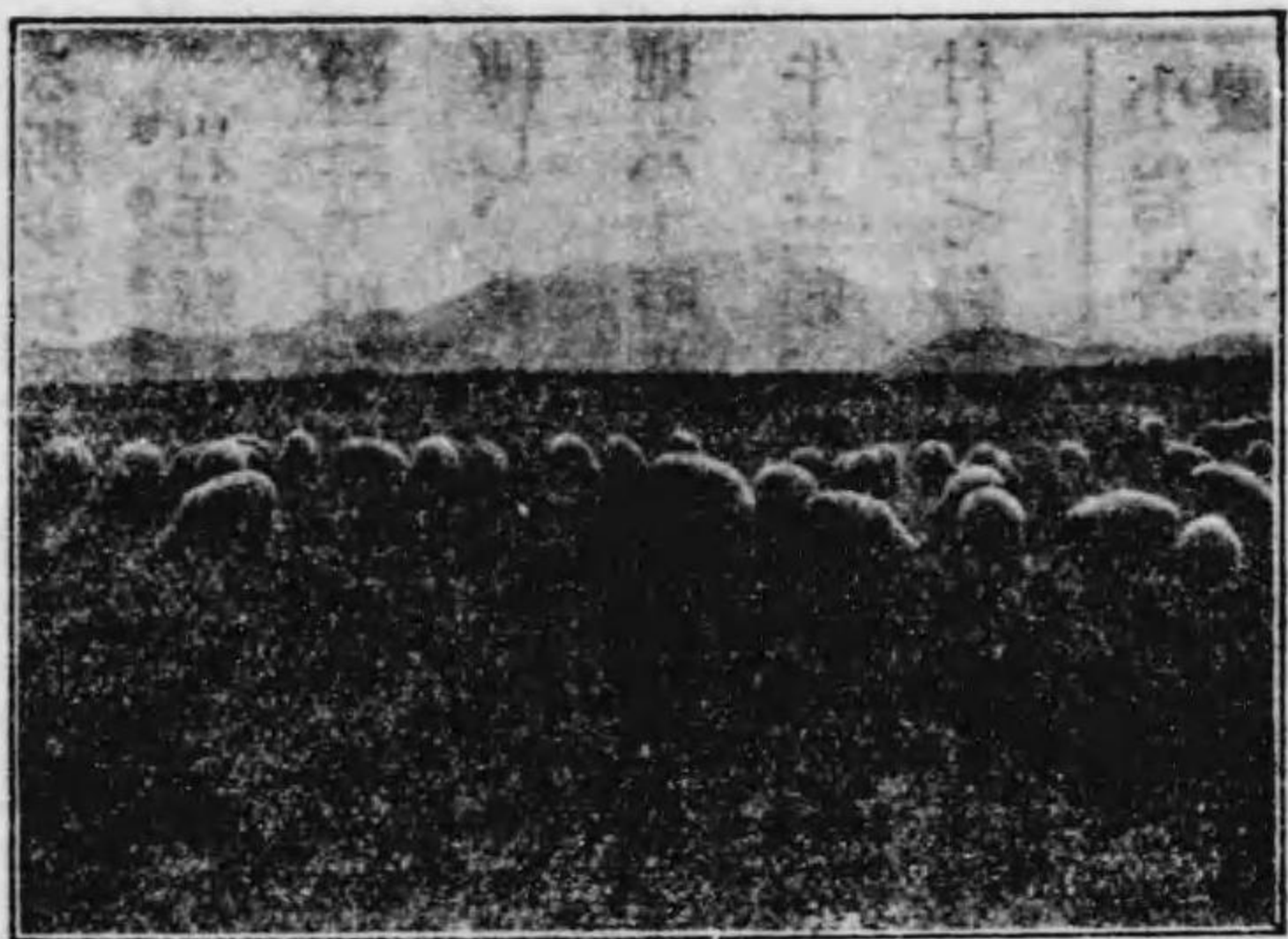
附屬地あり。種牡馬數百三十餘頭を有し、盛んに其育成に努め、本邦産馬界に貢獻する所少からず。

**岩手縣種畜場** もと種馬廐と稱し、明治三十一年盛岡市内丸に設置せられしが、明治三十四年今の名に改め、同三十五年、盛岡の北西三里なる岩手郡瀧澤村加賀内に移轉し、専ら畜産の改良を圖れり、區域は瀧澤澁民二村に跨り、面積五百四十九町歩（耕地六十町歩、放牧地四百七十町歩）洋種に屬する種牡馬十五頭、繁殖牝馬十八頭、種牡牛十三頭、繁殖牝牛十五頭を有し、外に幼駒、犢各九頭あり。耕地には西洋農具を備付けて穀藁の栽植を行ふ。

### 小岩井農場

岩手山の南西麓にあり。雫石街道より右に分岐する道路を進みて、之に達す。岩手郡雫石、瀧澤、西山の三村に跨り、面積三千五百十二町歩を算す。建物總數百二十六棟あり。明治二十四年、井上勝、官地を假用して開墾、牧畜及び殖林の業を企畫し、岩崎彌之助、小野義真之を賛く。因つて農場に小岩井と命名し、機

械を使用して大農法を行ひしが、その土性は第三紀層の埴土に屬し噴火灰を被りたる腐埴土にして往々焼石を混じ、且、降霜早く融雪晩く、耕作に適せざりしかば、始め栽植したる桑樹を伐採して専ら牧畜を目的とするに至りしが、明治三十二年岩崎家の獨有に歸してより仮用せる官地を拂ひ下げ、私有地を購買し、且つ外國種の牛、馬、羊を輸入し、其收益にかゝはらずして設備を整へ、こゝに日本第一の大農場たるに至りぬ。今や牛馬羊を蓄殖販賣するを以て主眼とし、其放牧舍飼の各時季に應じて之を選び、牛よりは特に副産として牛酪を製造す。其質純美なるを以て小岩井牛酪の名天下に聞ゆ。本場の畜産は牛馬とも總て純粹種なるを以て、聲價高く、其畜牛販賣の時の如き、遠近より來場するもの頗る多



小岩井農場の羊群

し。育羊もまた盛んに行はれ、數百の羊、一團となつて落葉松の林中に隱顯し、野草の間に彷徨する狀、宛として油繪の風情あり。此等牧畜の飼料は凡て自作の穀菜及び牧草を以て之か供給に充つるが故に、開墾地の面積も漸次増大し來り、其耕作は馬耕大農法に據り、洋式農具を使用し、收穀の脱稗脱粒及び飼料調製は瀛力又は水力に頼る。又牧地耕地等を保護する爲め樹木の増殖に勗め、地況によりては純然たる經濟的林業法を執れり。かくの如き大規模の農場なれば、場内に使用せられて生計を立つるもの數百戸に及び、巡查駐在所、郵便局、小學校、商店、旅館等備はり。恰も一村落の狀を爲す。尙盛岡へは場用の馬車を運轉し、電話を架設して用務に便せり。

### 山岩手

一に岩鷲山ガシユサンに作り、また奥オクの富士フジ、南部富士、南部の片富士、霧山嶽等の稱あり。盛岡市を西北に距る約六里、岩手郡瀧澤、西山、田頭、松尾の四村に跨り、八面玲瓏、殆ど完全なる圓錐形をなして雲表に聳立す。其最高峰は藥師嶽にして海拔六千八百三十一尺。其成立より云ふ時は複火山即ち一種の倍肩火山 (Overlap)



ping Volcano)にして東西の火山相寄りて成れり。東岩手火山は東方に於ける圓錐形を爲すものにして其火口壁を御鉢と稱し周圍大凡一里、其西北方の最高點は即ち藥師嶽なり。陸地測量部の建設せる三角櫓を存す。此噴火口の内部には更に一部の中央火口丘を有し、之を妙高山と云ふ。又其頂に一の噴火口あり。御室是なり。扱てまた西岩手火山は前者の西方にありて噴出の年代は一層古く、其火口壁の南方にあるを鬼ヶ城と稱し斷崖峭絶、眞に神斧鬼鑿と云ふべし。北方にあるは屏風ヶ嶽にして、鬼ヶ城と相對し、所謂大地獄の噴火口跡を抱擁す。此火口跡は其周圍の頗る大なるだけ、御釜、御苗代の二火口湖を始め俗塵全く至らざる底の奇勝に富めり。火口壁の西北部は破れて火口瀬を爲し、大地獄谷を流るゝ水勢漸く北に折れ、七瀧となり赤川となり、遂に松川に注ぐ。西岩手火山の外輪山中第一の高點は西方なる姥倉ヶ嶽にして海拔五千六百五十餘尺なり。大地獄谷及び姥倉ヶ嶽には硫氣噴孔ありて成立當時の名残を止む。岩手火山の山体を構成する火山岩は全く輝石富士岩及び橄欖石富士岩の二種に大

別するを得べし。絶嶺に近づくに従ひ數多の珍奇なる高山植物を發見し得べく、殊に南方の肩に當れる不動平近傍及び大地獄の濕原には季節に應じて各々特殊の景觀を有する御花畑を現じ溶岩と砂礫の蕭索たる間にも駒草(仙人掌)、高根菫菜、岩手旗竿、岩袋等の美花を點す。就中駒草の淡紅花、澄明なる大氣に目醒めつつ、そゞろに大自然の粉黛を想はしむるも、近年採集者の乱採に逢ひやゝ稀少となれるは惜むべし。左に全山に於ける主要植物を掲げん。

薄雪草、みやまかう、そそな、岩桔梗、虫取菫菜、岩袋、西葉鹽釜、雜櫻、雪割小櫻、岩鏡、  
岩梅、磯躑躅、苔桃、梅櫻、白根人參、岩手富歸、高根菫菜、岩高蘭、御山金梅、岩手旗竿、  
駒草、白山千鳥、瓦上蘭、千鳥石菖、がんにゆすげ、偃松、

『岩手山炎上記』貞享三丙寅年三月巳の刻より當山御炎燒被成。依之、見届のため上下十四人、西の下刻盛岡出立。暗夜にて灰降る。風はなし。夕顏瀨の橋より御天を見渡せば、東平焼け見ゆ。古館を通り國見峠に着。灰積ること一尺餘。御天は稻妻ごとくして火柱二本立ち、青雲白雲、赤雲雷電、以ての外なり。大石に火つき、諸木大小によらず、皆角掛へ飛落つるさま、凄しとも申す許りなし。四日朝、長込坂へ着、相見えず。

山の端より下見れば、土水火と交り、さんく流る。御廐屋場の民家四軒埋れ、死亡四人。其後十餘日、御山鳴り渡り、焼石飛び降る。五月廿七日御天へ掛り候者あり。御不動平の長根に一問程割れ、御室に煙上り、拜し不申、と申す事に候。云々。

ふじ見ても富士とや云はん陸奥のいはでの山の雪のあけぼの 藤原定家

夕日影入りての後も岩手山ひかりはえある嶺のしら雪 本堂親知

●●●●●●●●●●  
岩手山の登路 岩手山は陽春五月より氷雪漸く流れ去り、盛暑八月には全く残暑を見ず。登山期節は六月より九月に至る四ヶ月間にして十月山麓の樹々枯れんとする頃早く既に白雪を蒙る。七八の兩月は登山者頗る多く殊に近年岩手山一万講社の設立せられし以來、団体登山等をさへ生じたり。其登路は柳澤口、雫石口、網張口、平笠口の四條なるが就中柳澤口を以て最も普通の登路とす。柳澤は盛岡より四里許り、即ち岩手山の東麓にして岩手山神社遙拜所、全社務所及び二三の宿舎あり。これより裾野を緩やかに上り行くこと一里にして馬止に達す。それより下胎坂を下り谷間に入りて

改所(柳澤より一里二十丁)に至れば『時しらぬこゝも雪あり奥の不二』の句を刻せる一基の碑あり。これより急坂山頂に向つて續くこと二里、一合目又は五勺目毎に石標を立て、一舛目に至る。一合目の上手なる笠注連にて一本木より來る道と合すべし。林間を立て、大ナメリの泥坂に出て、一合半、二合目を過ぎて又小叢林に入り更に三合目に出づ。こゝに小舎あり。これより道は益々急峻を加へ六合目を過ぎ御倉石の石溶岩直下に至れば藏石神社あり。岩上には鐵鎖を設け登攀の便とせり。七合目なる立神社祠前、下向道と相合する邊に至れば、急峻漸く緩やぎ坦道容易に入合目に達するを得。八合目には小屋あり。右側を上げれば晶玉滾々として進る一所の清泉に出づべし。九合目は即ち不動平にして岩根神社の附近二棟の小屋あり。山上夜泊りの人を宿す。之より急峻なる火口壁の溶岩礫を登れば御鉢の椽なる一舛目に達する得べき也。御鉢巡りは小徑、幅二尺に満たざる所ありて一方は岩壁に妨げられ、一方は斷崖千仞。頗る危険なり。然れども山上に立ちて日出を拜し四方の高山を願望するは極めて爽快

にして、殊に秋季の登山、眺望最も佳也。噴火坑中の御室には岩手山神社あり。石造の祠三箇。大己貴命、稻倉魂命、日本武尊を祀る。桓武天皇の延暦二十年坂上田村麿東征の創立と傳へ、後文治年間、工藤行光この社の大宮司となれりと云ふ。祭日は舊曆五月廿五日より廿八日迄にして、其初日に山開きを行ふ。遙拜所は瀧澤村字柳澤にあり。

●●●●● 平石口 岩手山の他の登路なる平石口は御神坂と云ふ。平石方面の登山者は此道を取る。盛岡より此道を登らんとするには鬼越峠を越えて姥屋敷に至り西山の裾野に出て山麓に至るべし。盛岡より四里、登路は近けれども割合に峻峻なり。合毎の石標なし。外輪山を越えて不動平に達すべし。  
●●●●● 網張口 は網張新湯即ち帝釋温泉より登山する間道なり。頂上に至る三里。潤葉樹林を上りて三千尺に至れば青森椴松の針葉樹林となり、根曲り竹の間を縫うて西岩手火山の外輪山を越え、大地獄に下り、地獄谷を上りて不動平に出づべし。地獄谷の硫氣噴孔、七瀧、御釜、御苗代及びハツ眼の濕原を見るを得。他の登路を取りて、之を見んと欲せば不動平より半里を上下せざるべからず。  
●●●●● 平笠口 は平笠御神地と云ふ。北方よりするものは此道による。平笠より一里許り上り、二千尺許りの上なる上坊と稱する所に達す。小社殿あり。やゝ廣き小屋あり。是より頂上まで二里。渡屋長根を傳うて上る。傾斜

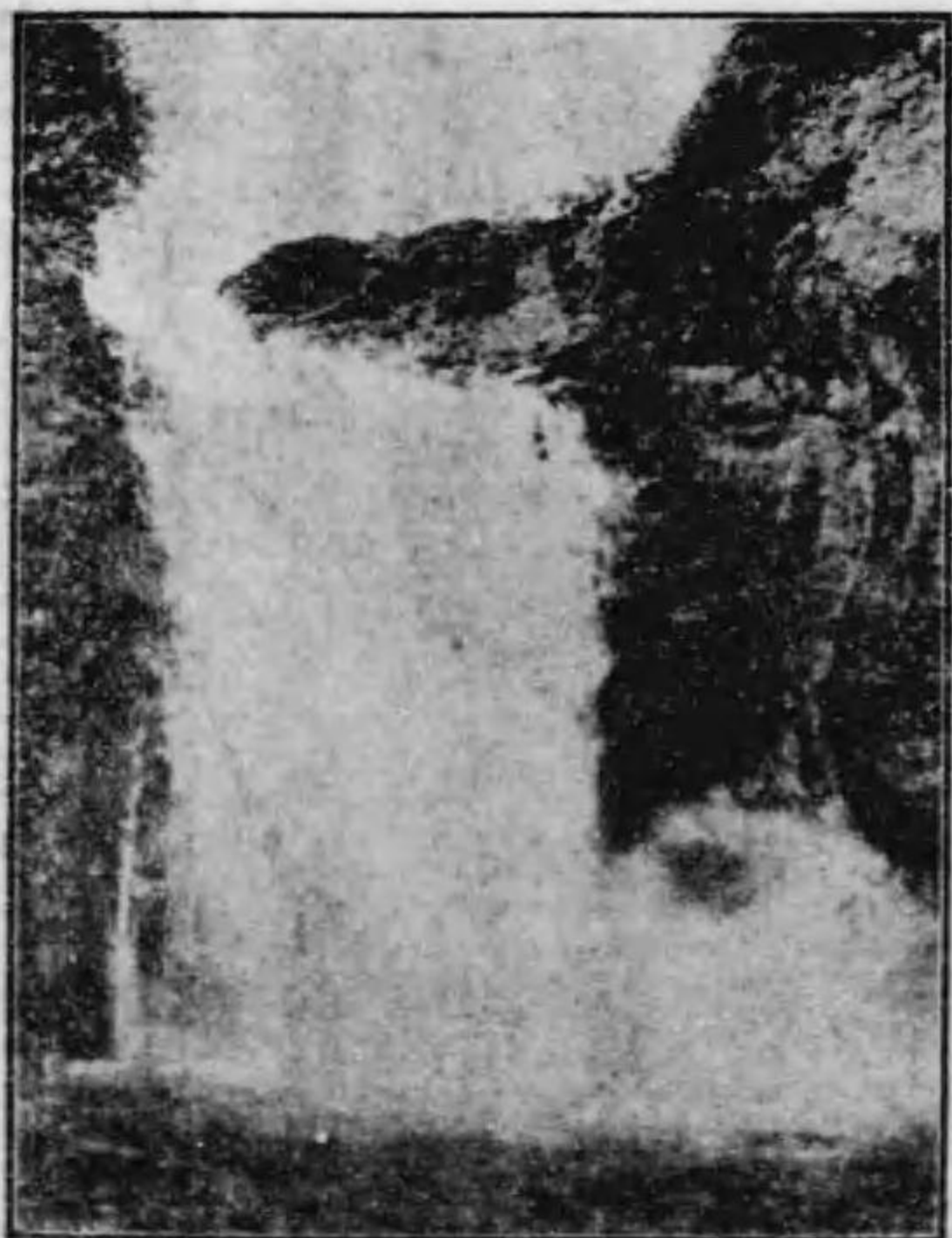
割合に急なり。潤葉樹林と青森椴松及び米梅の林を登りて四千六百餘尺に至れば左に下向道あり。林を出て、四岩手火山の火口壁の一端なる茶臼ヶ嶽に達すれば小屋あり。東岩手火山を登りて御針の熊野神社に出づ。石標ありて各合目を示せども其距離甚だ不齊なり。

片そぎの片富士や雪の岩手山

碧梧桐

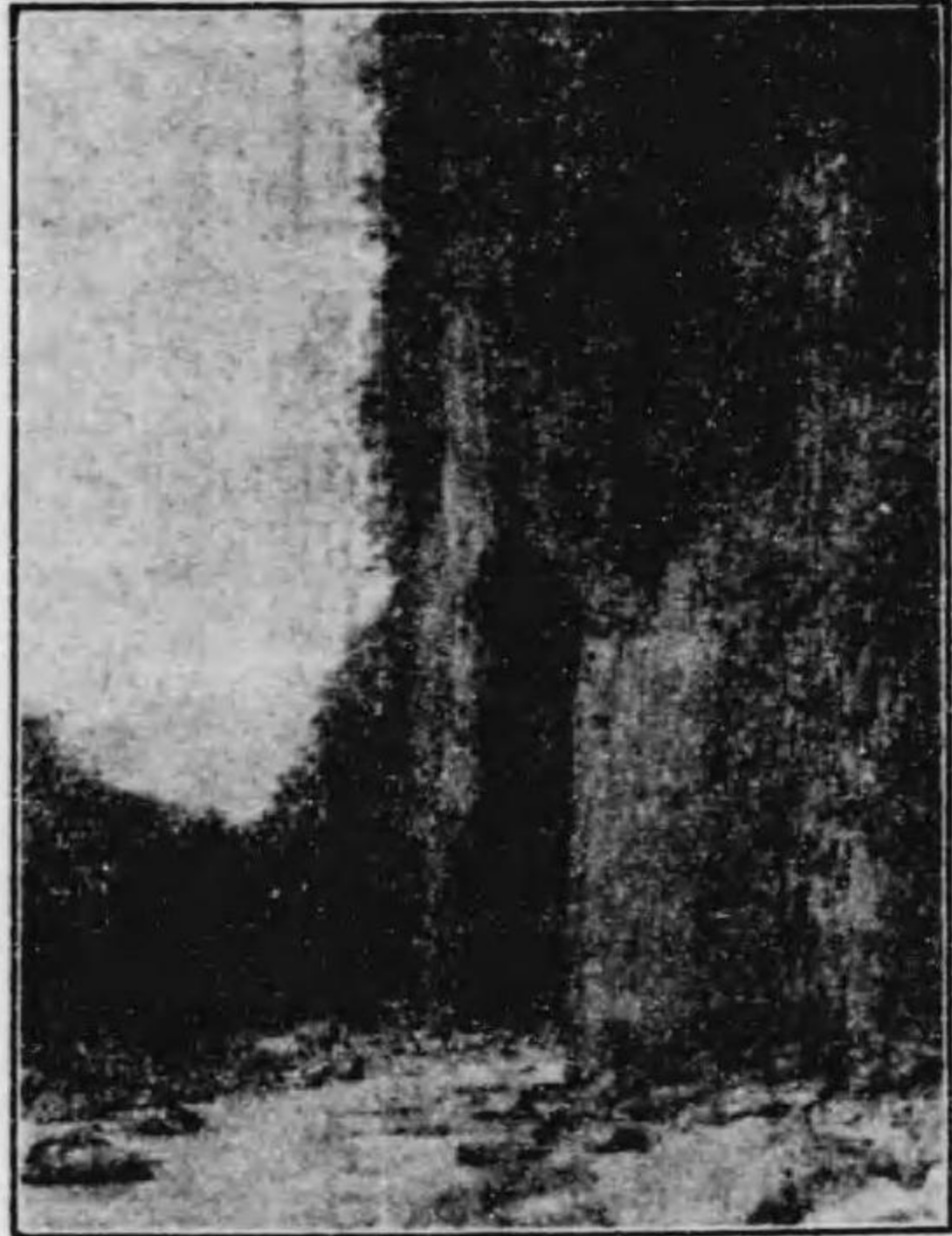
**葛根田川**

葛根田川は源を巖手山の西方岩手郡西山村なる大深岳の南崖に發し、岩手火山横列の南、駒ヶ岳火山縦列の東を走る。第三紀層凝灰岩及び流紋岩より成り、河水の浸蝕作用頗る著しく河岸多く絶壁を爲せり。其瀧ノ上温泉附近に於て溪勢俄に盛り英閃粉岩の岩脈、流を横りて露はれ、流水奔下して鳥越瀧を作る。



鳥越の瀧

●●●鳥越瀧 鳥越瀧は葛根田川の流路にかゝる大瀑布にして、水勢漲り落つること百六十二尺。幅十八尺乃至四十尺。鞆鞆の聲、山谷に震ひ盛夏尙肌の寒きを覺ゆ。この附近には上の湯を始め、温泉の湧出するもの無數。土人士を割して浴池を設け、地獄、



葛根田玄武洞

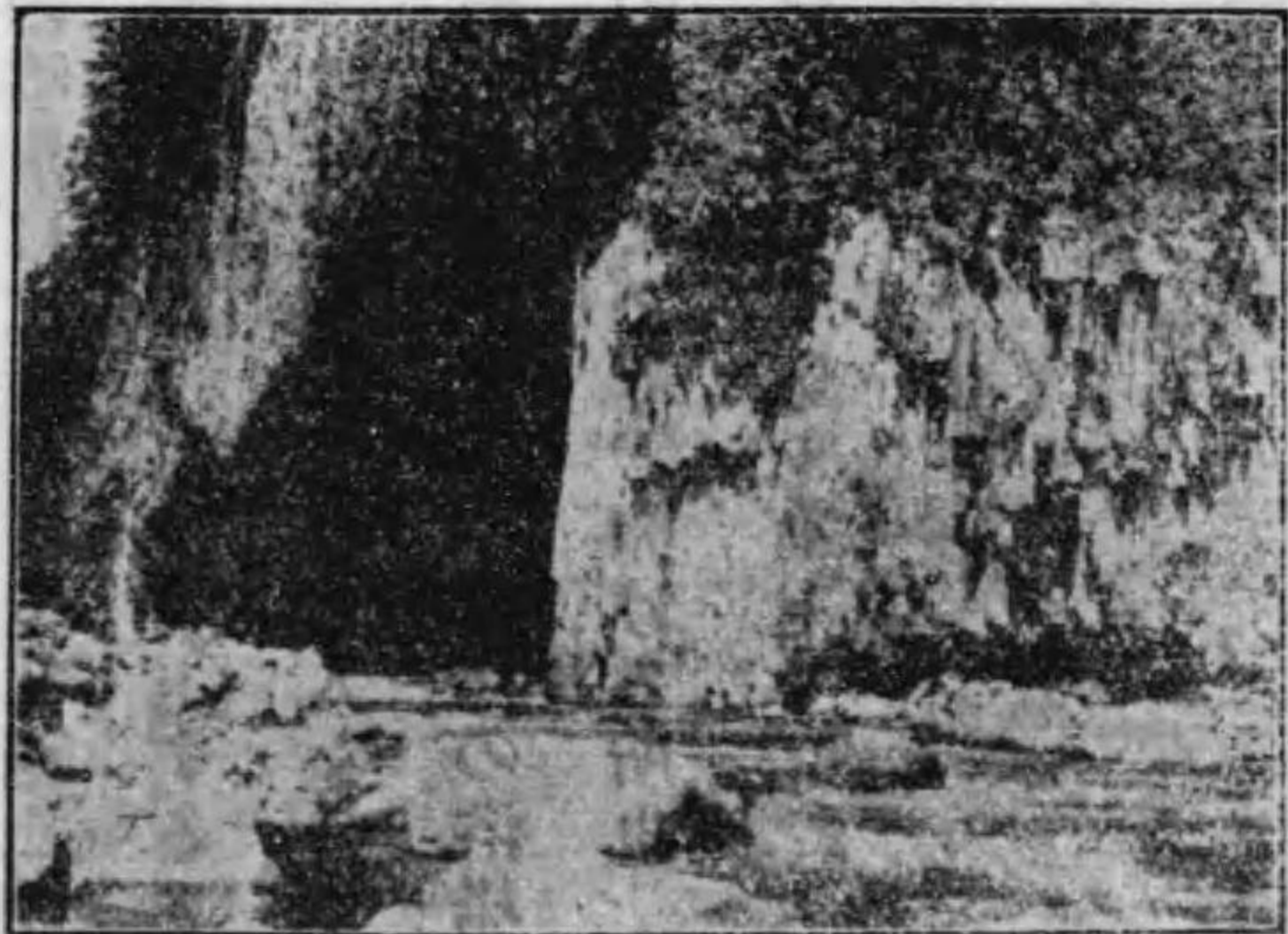
極樂等の名を附し、以て青森縣田名部の恐山に擬す。北方十町餘の山中には、滴石神社と稱する小祠あり。其後林より溪水流れ來りて點滴を石上に落し、音響、山間に應じて一種幽妙の韻を爲す。俚俗之を「滴石タン〜」と呼ぶ。この附近より採取せらるゝ盆石は頗る雅致に富み、京

都鞍馬山のそれに優ると云へり。

●●●玄武洞窟 葛根田川は鳥越瀧より下流高倉山の東北麓を遶り、字松倉に至るや一大

●●●玄武洞に逢着す。所謂葛根田の窟にして、山阪の路程、瀧より約一里なり。柱狀の節理を有する富士岩の斷崖、川に沿ひて聳立し、水の其裂罅に從ひて浸蝕せるもの、洞内高さ五六尋、幅凡そ三十間、奥行八間許り。岩上の樹木蒼然として夏尙寒く、窟内には數千の岩燕棲息して、飛往飛來する狀、其壯景遙に但馬の玄武洞の上に出づ。下流に蟹澤橋あり。長さ十六間、岩石に據りて木材を交叉し、隻柱を用ゐず、西磐井郡五串の天工橋に似て、それよりも奇なり。

●●●帝釋温泉 葛根田の窟より東南一里餘に西山村字帝釋あり。岩手山脈なる小松倉山の網張と云へる所に湧出する鑛泉を一千二百八十間土管を以て此地に引下げ浴槽を存する地にして、其源泉に因みて網張温泉とも云ふ。盛岡を距る七里也



葛根田玄武洞

土地高燥、風景佳絶、盛夏と雖、寒暖計三十度を昇らず。爽涼の氣に満ち、秋晴に乗  
ぜば、盛岡の市街を東方模糊の間に望むべし。小松倉の噴泉口はこれより北西二十町  
の處にして和銅年間の發見にかゝり、四辯を搖がす、鳴轟と共に、白煙騰上すること  
濛々。一面硫氣充積して、これまた稀有の奇觀をなす。危険にして久しく人を舍くべ  
からざるを以て舊時網を張り入浴を禁ぜしにより網張の名ありと傳ふ。帝釋の浴場は  
明治十九年里人澤村龜之助氏當時の知事石井省一郎氏の誘掖により、開ける所也。泉  
質は鹽類泉にして弱酸性の反應を有し、白濁ありて硫化水素の臭氣を有せり。

帝釋溫泉

山崎鯢山

山淨山靈地自閑。

羨同諷詠寄仙關。

不知一枕午憲夢。

猶在珍禽異樹間。

帝釋より西南三十町ばかりの地に一丘陵の斷崖あり。盛岡電氣株式會社は其第二發電  
所の設置地として近年此地を選び、大正二年を以て竣成せしむべき豫定也。

川礫石

葛根田川は玄武洞より熔岩壁の間を過ぎて、更に岩手山の裾野を流れ極樂野  
駒木野等を経て、雫石町の近傍に至り、西方、國見峠附近より來る龍川に合  
し、之より流路を東方に轉し、雲石川と呼ぶ。遂に盛岡に至り北上川に合す。周流  
八里十町なり。秋田街道はこの雫石川に沿ひて、厨川より雫石町に達し、更に中央分  
水山脈の一隘路、仙岩峠の峻峻を越えて西降二里秋田縣仙北郡生保内村に到る。雫石  
町は麻布の名産地にして盛岡より馬車通ず。

仙岩峠

大窪詩佛

纜下峯來便澗隈。

澗流激雪響如雷。

兩山壁立無行路。

一水經過十八回。

大鹿妻溝

雫石川の沿岸なる岩手郡太田村にあり。往時紫波郡飯岡村の農。釜津田甚六  
なる人、岩手郡の南より紫波郡に亘り水田少きを慨し、灌漑の法を講じて民  
利を興さんと計り、一日、太田村に往きて雫石川を觀る。川に枕して山あり。嶋岩峠

をなし、墜して水を通ずべきを察し、之を藩主に白して允許を得たり。應安二年自ら  
有司監督の下に土功を興し、同四年成る。之を大鹿妻溝と稱し、水は分派して岩手、  
紫波の一圓を灌ぎ、其利養する處頗る廣大なり。近年有志この巉岩の上に記念碑を建  
立し以て甚六の功績を表はせり。

### 繫と 鶯宿

繫温泉は盛岡市を去ること四里十二町、岩手郡御所村にあり。承平三年の發  
見にして、曾て源義家安倍貞任を追撃して此處に至るや、乘馬を繫留して沐  
浴したるに依り此の名ありと云ふ。地は雫石川に近く、前後に峯巒は迫りて綠雨を湛  
ふるが如き密林中に旅舎あり。泉質は硫黄にして亞兒加里反應を呈し、溫度七十七度  
疥癬、諸惡瘡に効驗ありと云ふ。附近の藤倉神社は由緒ある古社にして、清泉老杉の  
根幹より湧き出て、晩春には藤花咲き乱れて美觀を呈す。尙之より西に進むこと二里  
にして、同村に鶯宿温泉あり。盛岡より六里餘。往昔偶々一羽の黃鳥傷きて立ち能は  
ざりしが、瀧水に沐浴すること數日にして遂に全癒して飛び去れり。因りて鶯宿と名

く。また天正年間加賀の農民の發見する所とも云ふ。頗る幽僻の山間にありて、點々  
散在する旅舎の前に、溪流浚々として流れ、河鹿晝夜に亘りて鳴く。打撲、切傷、及  
び中風症に効ありと云ふ。泉質は鹽類泉にして弱亞兒加里反應を呈す。溫度五十五度  
附近より忍石と稱する一種の化石を産す。之を割れば其中に忍草の形狀を現出するを  
以て此名あり。

### 山 姫神

盛岡市より北に六里、岩手郡澁民、玉山、卷堀の三村に跨り、北上川を隔て  
て岩手山に對す。標高四千九百尺。花崗石より成るを以て諸山に特異の相を  
具へ、遠望すれば畧々三角形を成せり。山姿頗る優秀なるより一名玉東山と云ふ。姫  
神嘗て岩手神に嫁し、伉儷不諧、姫神山恨をつゝみて去るや、山谷震動せりてふ有名  
なる神話あり。

外山牧場 姫神山の南麓に當り、岩手郡藪川、淺岸の兩村に跨りて下總御料外山支  
場あり。盛岡を距ること東々北に七里餘。宮内省に屬し、現に主馬寮の管理する所也。

四圍丘陵起伏すれども平坦の地には水草多く、林地處々に存して樹木に富み、中津川及び北上川を涵養する所の一大森林を包有す。現時面積一万一千三百五十町歩餘に亘れり。明治九年中、縣令島惟精一千四百十四町餘の地を卜し、茲に牧場を創設して洋式の牧畜法を施し、牛馬を飼養し、水田を開くこと約六十町に及べり。全十四年該事業を擧げて岩手縣組合産馬會社に拂下げ、民業に移せしが、同廿四年中宮内省の買上となれるもの。爾來事業漸次擴張し官舎、廐舎、倉庫等を宇蛇塚に増設し事務所を移轉する等、基礎こゝに確定し、經濟も相償ふに至りぬ。近時牡馬約二百頭、牝馬約四十頭あり。

陸奥の馬の多さよ萩の花 子規

此地の氣候沍寒にして霜雪早く降り、農作物の發生充分ならず。但し稗及び燕麥は主作物にして甘藍、馬鈴薯、蘿蔔等は頗る地味に適し、馬牛に給する野草も能く生長せり。

●●●●● 中部模範林 中津川の水原より西南に下ること一里半、岩手郡淺岸村字淺岸に至れば縣有中部模範林あり。盛岡市を距る約四里。面積約千五百町歩の廣大なる面積を有し、山水の景に富めり。

盛岡地方の踊

盛岡地方には參差踊、獅子踊、金山踊、駒牽唄等の舞踊並に歌謠あり。其中獅子踊の如きはやゝ其形式を異にして比較的廣汎に行はれ居り、金山踊の如きは花柳界者流の媒介によりて青森縣地方等にも移されたれど、實は盛岡地方に於て醗釀せられたるものと覺しく、之を外にして縣中、異色あるものは紫波郡水分村の田植踊及び早池峯神樂、岳神樂等あるに過ぎず。岩手縣の風俗を觀察する上に於て興味尠からざるものなれば、左に其起原並に形式を説くべし。以上の外、狂言に似てやゝ卑俗なる七軒丁と云へるもの市内仙北町に傳はれど、漸次衰滅に近づくの傾きあり。

●●●●● 參差踊 往古岩手郡米内村に鬼あり。里人之れを恐れて三ツ石の神に祈願せしかば神、一夜鬼を捕縛して再び來り犯さざるを誓はしむ。是より里人安穩なることを得、

歎極つてさんざめき踊れりと云ふ。今、盛岡附近の各村落に於て盂蘭盆の月冴ゆる時、老幼夜もすがら相擁して舞ふ。

盆の十六日正月から待ちた

待ちた十六日今夜ばかり。

末の松山波越しとても

變るまいぞや我が心。

奥の三月淡雪淡く

花は咲くやら咲かぬやら。

獅子踊 前九年の役、安部貞任、厨川柵に籠りし時、戰勞を慰め、士氣を鼓舞せんがため部下の子弟をして常に舞はしめたるに始まると云ふ。今種々に扮装するも、多くは獅子の如き嚴しき面に鹿角を着け、其後にササラを併立し、身には金鋪、軍袴を纏ひ、袖を長く地に垂れて其の上部に「行山」の二字を大書す。十數人打ち揃ひ各々腹部に陣大鼓を帯び、且つ鳴らし且つ唄ひて舞ふ。勇壯の裡に雅趣あり。當初廷臣にも

また之を愛するものあり。今日祈年の舞として現存すと云ふ。其歌優婉にして餘韻あり。左に其數節を掲ぐ。

「奥山に雌獅子尋ねに

行かんとすれア

奥の御山

霧かゝるなく。

「雨無薬師尋ぬる妻に

逢はせてたもれ

錦の扉帳をかけて

まゐらしよ〜

「有難や霧や霞や

吹き拂ふて

今こそ雌獅子

逢ふぞ嬉しや〜



獅子踊

金山踊 元和寛永の頃、盛岡藩主金子の調達を家臣某に命ず。時に領内疲弊甚しく



また如何ともする能はざりしが、今の秋田縣鹿角郡に至り、新鑛脈を發見し之を採掘して獻ぜり。藩主大に喜び、一さし舞へと命ず。某乃ち自ら唄ひ自ら舞ふ。今又至り

金山踊、一にカラメ踊の名天下に聞ゆ。橋北橋南の妓輩、紅の袴甲斐々々しく赤前垂に手拭を被り、嬌音につれ手箒を振りつゝ踊るもの即ちこれなり。

「からめくと親父がせめる、なんぼからめても

からめだてアならぬ、アからめてくからめて千貫、

親父の借金年賦ですませ。

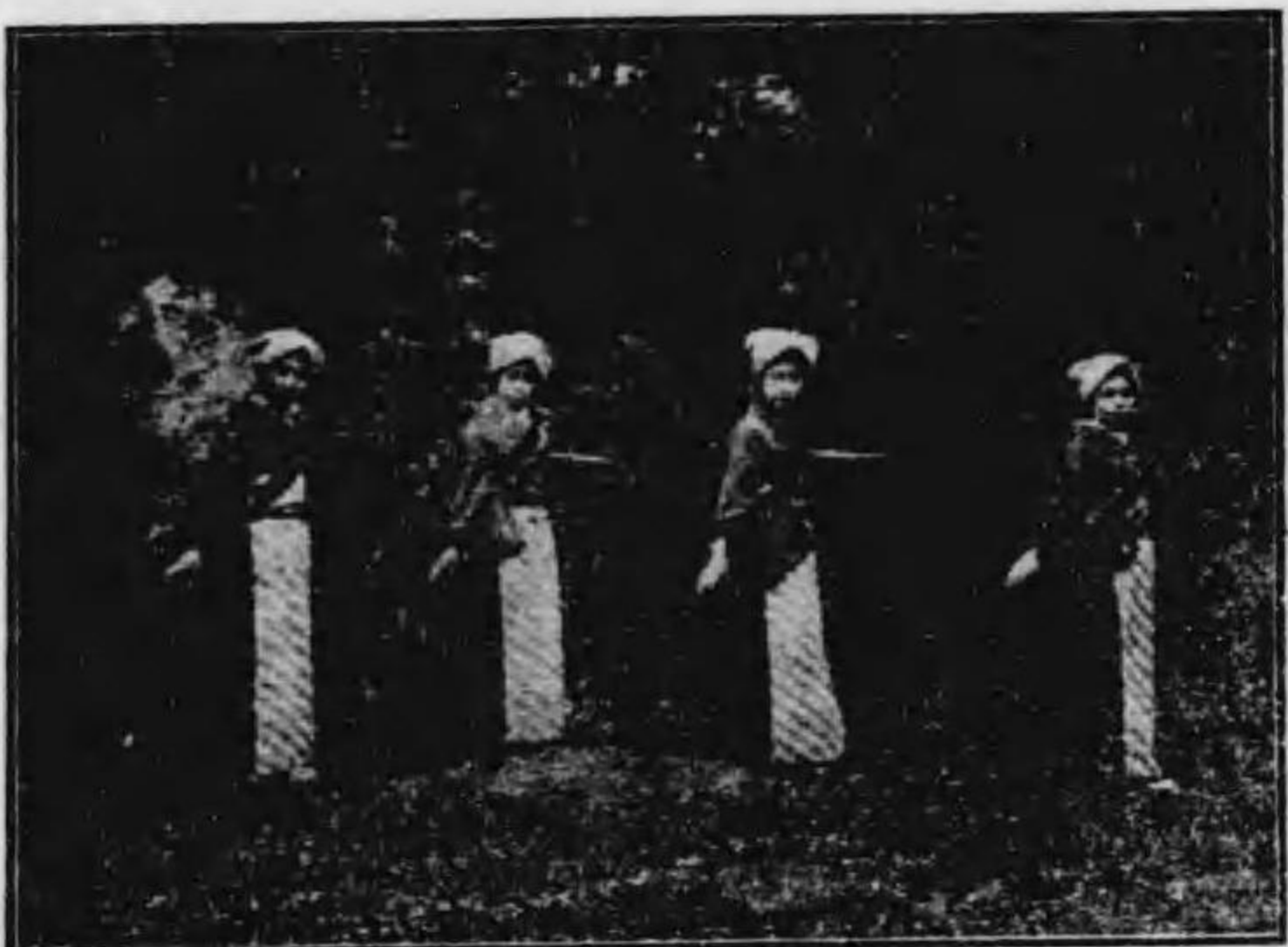
「金のべこくに錦の手綱、おらも引たい引かせたい

アからめてくしつかりからめて、

握つた手綱をうつかり放すな。

「鳥アなくくとこやの屋根で、御山繁昌となくからす、

アどつこい〜どつこい千兩どつこい萬兩。



金 山 踊

「金がてる〜白銀黄金、鐵も鉛も銅も、アどつこい〜どつしり掘り出せ御國の名物。

「目出度くの若松様よ、枝も榮えて葉も茂る、

アどつこも繁昌、どつこも繁昌。

「なをりや出てくる御山が盛る、かみもこまいも皆さかる、

アどつこも繁昌、どつこも繁昌。

「いなかなれども南部の里は、西も東も金の山、

アからめてく、からめた黄金は岩手の花だ、どんどふき出せ。

「花は咲く〜御國の山は、北もみなみも黄金花、

アからめてく、からめた黄金は岩手の花だ、どんどふき出せ。

「からめくと御山の唄は、御家繁昌となりひびく、

アからめてく、からめた黄金は岩手の花だ、どんどふき出せ。

駒牽唄

舊藩時代盛岡より幕府へ献上の名馬を東上せしめし頃、道中に於て唄ひし

唄也。登蘇双紙に曰はく『元祿四年十月十二日、例年の如く幕府より馬買御用として、御使番御厩御用掛御役人諏訪部喜右衛門、上下三十三人、中山勘兵衛、上下二十六人の兩士、馬町會所に下り居たるが、公、中の丸へ招き給ひて、飯膳を饗し玉ひ、終り

て後、公も出座し給ひ、酒宴酣なる頃、彼の兩士申しけるは御國風流行の唄有るべし唄うて聞かば又興深かるべし。と衆人に好みけれども、國風の田舎唄、彼の兩士に笑はれんことを厭ひて唄ふ人もなし。彼の兩士、頗りよ請ひ、公も亦唄ふべしと命ぜられけれ共、誰も唄ふものなかりしが、興さめたるけに、近習、波々はせき伯部喜太郎、御酌に參り居たりしが、銚子を別人に譲り彼の兩士の前に進み寄り、肘を張りて高らかに唄を三べん唄ふて退さける。酒宴終りて馬町の旅宿に歸り、會所村馳走役人に申しけるは今日は大興得て樂しかりし。偕て某等酔ひに乗じて御國風の流行唄を好みしに、何れも我等を憚りてや請へども唄ふものなかりしに、年の頃十七八歳なる若者某兩人の前近く進み寄りて、國風の流行唄を三遍高らかに唄ひし其眼ざし、尋常のものに非ず。成人の後善か悪か何れにも強かるべし。怖しき男なりと。語りしとぞ。」と見ゆ。

「めでたく、コヤ、若松様よ、ホーイ、枝も榮える、コハ、葉もしげる、ヤ、榮える枝も枝も榮える、

コハ、葉もしげる。ハア、とも春はらつてどんどと追ひ込め、三十五兩千疋、ホーイく

「いふな語るな、コヤ、雄駒の池の、ホーイ、底の清水の、コハ、あることを、ヤ、しみづの、そこに底に清水の

コハ、あることを、ハア、荒菰蹴立てて、ぢみちに乗リだせ、天下の御用だ、ホーイく

### 日詰地方

**矢幅** 瀛車、盛岡驛を發し、北上河畔の平野を南走すること二里十七町、西方よ鋒ゆる南昌山の翠光を仰ぎつゝ、矢幅驛に至る。蒼茫たる田甫の間に介在する少

驛に過ぎざれども紫波郡煙山、徳田、古館等の富有なる村落を控へ、尙二十餘町にして國道に達すれば人貨の出入見るべきものあり。この附近、製氷業頗る盛にして、停車場に近く見ゆる宏壯なる貯氷庫より是より南方福島、茨城諸縣まで搬出さる。此地方は早くより史上に顯はれし。弘仁年中文室綿曆、賊夷と奮闘し、これが鎮撫のため徳丹城を築きし所。城趾は今明ならずと雖、或は停車場の東方徳田村の中ならんかと云ふ。安倍氏の戦乱後、康保に至り藤原氏領有たりしが、文治五年、頼朝軍陣をこの

地に進め、樋爪俊衡の老齡を憫れみて舊居志波城に置き、本領を安堵せしむ。後、足利尊氏の覇業を建つるや、族黨斯波家長を置き、以て奥州邊疆の控制を計る。天正の末年、斯波足利氏滅亡し、此地方一帯皆南部氏の封内となる。かゝる遼遠なる歴史を有し、加ふるに一帯の風光畫かくが如し。一山一水、測々として何事をか語る。

**日詰町**

矢幅驛より南すれば二里餘にして日詰驛に達す。日詰町は停車場を距る二十入町にあり。蓋し日詰とは、今の日詰町、赤石村、古館村を含む。古の斯波城下の汎名なりしならん。この町、以前は郡山町と呼ばれ、紫波全郷の中心として、國道の要路にあたる。大迫街道もこれより分岐せり。人口二千餘を有し、街區を櫻町向町、新田町、中町に分ち、更に鍛冶町、習町等を分出す。中町に紫波郡役所あり。人家は多く茅葺にして名物の久間ひさまれこしを賣る店舗等見え、昔日の驛次の面影を保留す。官衙には尙日詰警察署、盛岡區裁判所郡山出張所等あり。附近田野廣くして稻穀よく實り、秋は最も人馬の出入盛にして般賑を極む。又紫波表しほかみと愛用せらるゝ疊表も

此の地方より産す。

コホリヤマ 固山、此宿、東路には人の情も深し。旅人をとまれとて、小手招の女姿、さのみ卑しからず。髪も兵庫まげに物かたく、白粉は雪の曙を敷き、口紅は夕日に移りて、さりとををかし。後帯見よき所からの風俗、これも一慰みと、かり枕おもしろし。(井原西鶴「一目玉鉾」)

志賀理和氣神社 日詰町の南端、赤石村櫻町にありてまた赤石明神と云ふ。延喜式神名帳に載する所の奥州百座の一にして、文徳帝仁壽二年正五位下を授かりし名社なり。祭神を猿田彦命とす。社前に老櫻多く並び立ち、花時は嬋娟たる花香、春風に乱れ、古雅清嚴なる社堂を蔽ふ。堂後は北上川滔々として流れ、古木亭々、數仞の青崖をなす。北を望めば蒼然たる煙波の間に平井橋横り、寸馬豆人畫くが如く、附近を徘徊する舟は鷗の遊ぶに似て、風光の佳絶なること日詰第一とす。往古河底に赤石ありために水色紫氣を呈して匂ふ。領主斯波詮直イリナホ之れを見て吉兆となし

けふよりは紫波と名つけん此川の

と一首の和歌を詠じ、是より斯波を改めて紫波と稱せりと云ふ。この社の祭日は陰曆八月廿日を以て行はれ、神輿の渡御あり。

**志波城趾** 日詰町の東方、半天に聳ゆる一岡阜あり。是れ有名なる志波の古城趾にして、延曆二十二年坂上田村麿、造營して夷賊の來寇に備へしものなり。康保以後、藤原清衡が四男泉十郎清綱の子樋爪太郎俊衡の居城たりしが、文治五年、平泉没落の際、頼朝の追討をうけ、俊衡一族城を燒きて奥地に逃れ、同年九月十五日俊衡弟季衡及びその三子を引具して厨川の營所に赴き降服す、頼朝その年老ひて口に法華經を誦じ、未來の佛果を願ふ外、更に餘念なきを憫れみ、再び樋爪の舊居に居ることを許しぬ。後、斯波家長、是を領有せしが、七世の孫經直に至り南部氏と戦ひて敗滅せり。慶長三年、南部利直、之を改修して移り住みしが、寛永十二年再び盛岡に移りて本城を廢す。今、一帯の菜圃麥隴となり、唯頂上に立つ二本の大杉のみ靜かに天風に鳴り

つゝ、有爲變轉のことわりを示し顔なり。近年北上川に面せる廓腹に瀟洒なる亭を設けて、多くの櫻樹を植ゑたれば花時遊覽の人多し。殊に一逕の路をたどりて頂上に登臨すれば、北上川白龍を逸する如く、綠野の末盛岡を髣髴すべく、風景甚だ佳なり。

志波郡郡山の舊墟より、南のかた十四五丁ばかりに、五郎沼と云ふあり。そこに比爪五郎季衡の墓あり。碑石あれど文字消えて見えず。さて、延曆の時造れる志波城は今の郡山城なりと云傳ふ。東鑑に比爪の館と云へるはこの志波の城あとに構へしものならん。〔舊蹟遺聞〕

**吉兵衛館趾** 天正年中、九戸政實、宗家南部氏に異圖あり。其弟彌五郎を斯波氏の聲とし、その援助を受けて南部氏を謀る。斯波經直、彌五郎を高田に封じ、高田吉兵衛と稱し、志波城の附近に築き居らしむ。經直事を以て吉兵衛を疑ひ、之を殺さんとするに及び、吉兵衛逃れて南部氏に歸す。南部侯乃ち之を中野館に居らしむ。經直日に驕恣を極め、政道を怠りしかば、老臣梁田大學、岩清水右京等吉兵衛に因りて南部家に通じ、斯波氏の内情を告げ、遂に信直を導き斯波氏の城を攻陥するに至れり。

今、志波城の北に近く、その館趾と傳へらるゝ草原あり。

九十八

高水寺趾 日詰町の北、古館町二日町、舊街道の傍にあり。稱徳天皇の勅願にて、神護景雲二年、諸國に一丈六尺の觀音像を安置せられし時建立せし寺なり。大同二年阪上將軍、一字の塔及び鐘樓、大鼓堂、鰐口等を寄進し、天喜五年、源賴義、護摩堂を建立し十六坊を興せり。源賴朝、陣ヶ岡に陣宿せし時、雜兵この寺に乱入して、金銀を奪ひ、金堂の金箔を剥き取りしが衆僧の哀訴により之を罪科<sup>コウシケン</sup>處せりと云ふ。かかる由緒を有し隆盛を極めしも、後天正中、兵燹にかゝりて廢頽し、纔かに觀世音の古堂と、藤原清衡の勸請せし走湯社<sup>ヘシリユシヤ</sup>とを残す。しかも觀音堂は後、日詰館麓片山に移され、今存するもの、かくて走湯社のみ。社前に大なる槻木あり。昔賴朝奉納の鏑矢二筋を射立てしを以て、俗に之を矢立の槻と云へりしが、今残れるは繼木とぞ。尙ここは斯波足利氏の居館なる斯波御所の遺趾と推せられ、土俗、高清水と稱す。

櫛の奇木 日詰町の北端、勝源院の庭園にあり。蒼古なる樹幹、小池に臨んで繁茂

し、地積凡八十坪を蔽ふ。安倍氏遺愛の古木として名高し。

陣ヶ岡 勝源院の背後に當り古館村に屬す。地面一帯に隆起して青松の叢生するところ、即ち源義家の陣營を張りし遺跡なり。藤原清衡この地に八幡の社を造建せしが里人八の社、或は蜂の社と云ひき、八の音は蜂の訓と同一なれば後世相混じて云へるならん。源賴朝、亦こゝに逗留し藤原泰衡の臣河田次郎が舊主の首を齎し來るや、その不臣を責めて之を誅戮しき。賴朝、已に平氏を西海の波に沈め、更に、泰衡を討つて天下の功業定りぬ。時や秋、星斗蘭干として篝火影薄らく處、彼れ粟を横へて畢竟何をか感じけん。蕭殺たる陣ヶ岡の松柏悲風千里より來つて、今尙餘響を傳ふるの感あり。此外、この附近、王師遠征の遺跡頗る多く、源義家が日月の錦旗を洗ひして月の輪形と稱する小池も亦現に存せり。

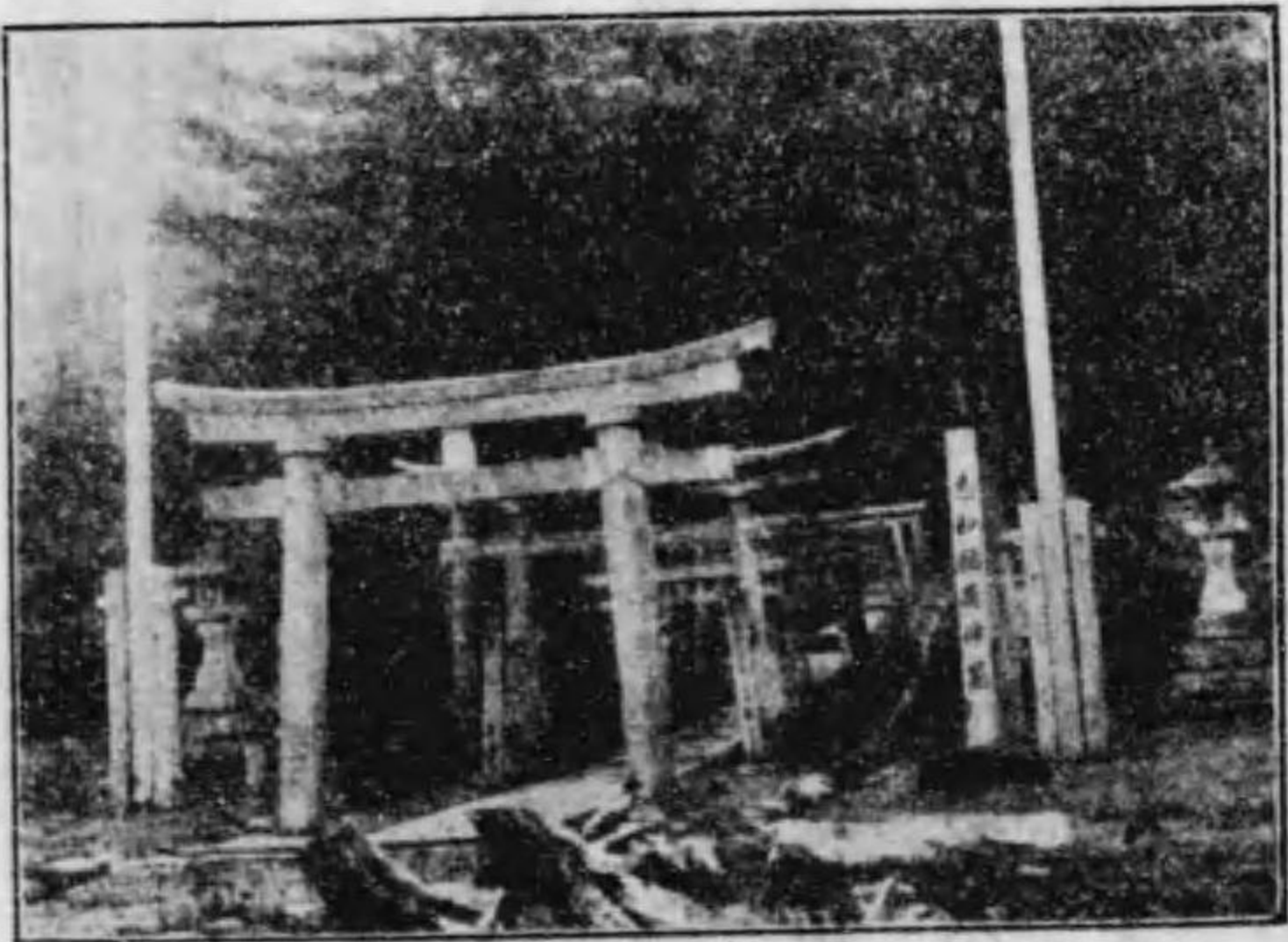
五郎沼 今、日詰の西方に五郎沼と云ふあり『増見遊覽記』に曰く志波郡郡山の人云ふ。五郎沼は、比爪五郎俊衡、宮古濱にやきたる鹽をもてはこぼせ、人をなみたゝせて築きたる塘なり。はた「旭さし夕日輝くそのも

九十九

とに、漆まんばい黄金おくおく」など、平泉にて聞きし物語の、こゝにもせりけり。云々

**志和稻荷神社**

日詰町を距ること西北に二里、水分村升澤にありて、倉稻魂命を祭れる村社なり。天喜五年、源頼義安倍頼時を伐ち、陣ヶ岡に滞在中の建立にかゝり、後、頼朝之を再建せりと傳へらる。斯波足利氏の所領となるに及び其加護を受けしもの、如し。後世、南部氏も亦篤く之を尊崇し、社領三十五石を給ひ、諸費皆藩より支辨し、特に盛岡よりこの地に松並木を植ゑて平坦なる道路を拓き、祭時には藩侯親ら群臣を率ゐて奉賽しき。今、盛岡小高より分岐する御成街道と稱するは當時の道路なり。此社の祠堂は巍然として尙舊時の壯觀を止め、背後に巒峯あり。周圍數丈の老杉、轟然として天に參し、數多の朱



志和稻荷神社

の鳥居、其間に隠見して一段の色彩を加ふ。近年神苑を開きて盛に櫻樹を植ゑたれば陽春の花、初夏の葉櫻いづれもよし。殊に祠堂に緑の陰漸く暗き時、満山の躑躅、紅を發すれば杜鵑晝ながら鳴き、人をしてそゞろ天外にあこがれしむ。日詰町より馬車を通ずるを以て遊覽に便なり。

廻廊の暗さに燃ゆるつゝ、じ哉 抱 琴

尙、近傍瀧名川の流路に赤瀧と稱する景勝あり。一條の瀑布、磊々たる赭巖の間にかゝり、高さ五丈、鞆々たる響、幽寂の境地をふるはす。

瀧名川 志和村の奥なる東根山に出て、東流、赤石村に至りて北上川に注ぐ。長五里、紫波郡に於ける最長の川なり。

**南昌山**

志和稻荷の北に南昌山あり。日詰より西二里許に位す。標高一千一百尺。第三紀層に角出せる火成岩より成る。元、徳ヶ森と呼びしが、其音の相近きより毒氣ありと稱し、之を忌むもの多きを以て、南部信恩の時、南昌山と改めたり。嘗

て書人谷文晁の寫す所となり、其著『名山圖會』に收めらる。山中、白糸の瀧等名勝少からずと雖、路險惡にして登攀頗る困難なり。秋に至れば野生の葡萄多く實る。

**是信御坊の墓**

日詰中町より北上河畔に出づれば、平井橋あり。こゝはもと赤石船場と稱せられ、輕舸に棹して人馬を渡せしが、土豪平井六右衛門氏その不便を慨し自費を抛ちて此橋を作れり。對岸は即ち彦部村にして、路傍なる石ヶ森山に是信坊信明の墓あり。眞宗の靈地として參詣するもの多し。建保三年、奥羽和賀の人吉田是信、其師親鸞の聖托を承け、橋本作内、千原長左衛門を從へて東北弘教のため下向し錫を此地の豪農彦太夫の家に留む。彦太夫深く歸敬し、草庵を造りて献じ、是信また埋骨を期して衆生濟度に従事す。天正十八年、第十六世賢勝房に至り盛岡に移れり。親鸞袂別の際、この世の形見として附與せられし上人自作の彌陀、嘗て石ヶ森の草庵出火せし時、自ら蓮池に遁れしてふ奇蹟を傳ふ。池、尙是信の墓側にあり。靈像は盛岡本誓寺に安置せらる。

**寺正音**

彦部村の東隣なる赤澤村に正音寺あり。開山は北畠顯家の庶腹たぐらふ顯元の子大應玄徹ないうちなり。顯元故ありて母と共に家臣高橋某に伴はれ、江刺郡黒石村に落ち來り民家の女を娶りて一子を産む。名を大太郎と稱す。其六歳の時、顯元夫妻病みて歿せしかば、大太郎其冥福を祈らんとため、空地正法寺第二世月泉和尚の徒弟となりぬ。後出て、此寺の開祖となる。寺寶多かりしが、元和年中、回祿の災あり。悉く焼失せりと云ふ。

**町大迫**

彦部村より佐比内村を経て、稗貫郡内に入り、一坂路を越ゆれば遂に大迫町に入る。日詰町より東南三里餘。乗合馬車の往復あり。大迫町は遠野日詰間の通路を扼する要邑にして、人口二千、三春專賣支局大迫出張所、花巻區裁判所出張所及び郵便局、學校等を有し、此地方に於ける最も繁榮の地とす。早池峯山より發する嶽川はこの附近に於て、其東南より來る中居川と合し、稗貫川となる。町は南北に連り、上町、中町、下町に分たる。四周、青巒を以て圍まれ、殊に前面なる向山には

躑躅の花多く、初夏の候丹花灼然として發映す。此地製糸業極めて盛にして、七折製絲場外二ヶ所の工場は常に煤煙を空中に吐き上げ、町内何となく活氣に満ちり。附近煙草の栽培また盛んにして、古來大迫煙草の名を存す。往時、上閉伊郡釜石港に黒船漂着し、其種を漁民に傳へたる事ありしが、此地の人之を移植せしに始まると云ふ。耕地は第四紀新層礫質壤土にして、煙草栽培上必要なる加里分に富む。蓋しその良質を得る所以にして、南部葉の名世に高し。また近在の佐比内、龜ヶ森は全村殆んと石灰山にして、その好良なる品質廣く認識せらるゝを以て、其採取逐年盛況を呈す。大迫町より遠野へは七里。道路、人煙落漠たる山地に通じて峻惡なり。

大迫町の舊町場は、今の町の北に當り、桂林寺の北側より良の方へ、舊館の路をわりて、稗貫川の西岸までなるべし。元和三年、大守達曾部遊獵の時、大迫町場割直さる。(稗貫郷村志)

**大迫城跡** 大迫城は、もと稗貫氏の屬城なりき。天正十九年大迫右京、遙かに九戸政實の叛乱に應じ、南部氏に抗せしが、政實亡びて後、江刺郡人首村に匿る。慶長五

年秋、右京の子又三郎、伊達政宗に因りて大迫を復せんとす。政宗、葛西の舊臣猪倉伯耆等に命じ、兵二百を率ゐて又三郎を援けしめ、南部氏の臣田中藤四郎と激戦の末遂にこの地を復したるも、遂によく之を保つこと能はず、逃れて岩崎城に入り戦死せり。今町の北方にありて、その廢墟を認めべく、陰々たる草間の虫聲頻りに遊子の腸を斷つ。

**桂林寺** 町を離るゝこと五町餘、背後は連巒を負ひ、蒼々たる密林の中に山門の嚴然と現はゝるを見る。白鳳山と號し、武州川越蓮光寺六世慶守和尚の開創にして、大迫氏を旦那とせし有名なる禪刹なり。陰森たる寺堂今も舊時の面影を残す。

**早池峰山** 大迫町の東方七里、重疊せる諸山の煙雲浮動する間に巍然として天表に聳ゆる一座の雄峯あり。これ即ち北上山脈中の最高峰たる早池峰山にして、古生層間に迸出せる火成岩より成り、標高六千六百尺。直に遠野の盆地に南面して立つ。其北には中嶽、其西には毛無森、東に躑躅山、西南に藥師岳等雄峻層々として環侍せ





瀑と云ふ。

山姫の中空なく引きさらす妙のもすそを折合の瀧

小原實風

●●●●●  
山上の偉観 早池峯神社に禮拜し、折合の奇瀑を一覽せし後、嶽の宿に一泊し、登山の用意を整ふ。道案内者等を雇ひ得べし。早池峯は、標高、岩手山より低きも、登攀却つて困難と傳へらる。然れども途上の變化の多様にして趣味あること、岩手山以上にして、里俗「木立三十里、萱野七里、石跳十五里、御坂三里」の稱あり。之れ登路の状態を、最も適切簡明に説明せしものと云ふべし。但しこゝに云ふ一里とは、所謂小道にして六町なり。かくて嶽の宿を出づれば、白日尙暗き木立の中にさしかゝり茫々たる草萊を踏み分け、百花瞭亂たる曠原を横斷す。山木こゝに影を絶ちて、四望廣濶、一小丘の眼を遮ざるものなし。これより山路にかゝれば、突兀たる巖巖行路を閉ぢ、白雲徂徠して幽禽の聲だに聞えず。潺々たる流れ、琉璃の如き水色を湛へて落ち來り、その間に裸出する岩石を超えて登れば、前面に一巨石の聳立する事二丈餘。

斑石權現と呼はるゝもの即ちこれにして、態々岩上に緣攀し奉養する人多し。これより溪澗を出づれば、路俄に急峻となり、或は岩石に攀ぢ、或は岩崖に縋り漸くにしてその絶巔に達す。東には大平洋の森々として極りなきあり、北には岩手山の呼べは答へんず如きあり。北奥の山河一として眼中に入らざるなく、實に天下の大觀なり。山頂に、四面石に圍まれし社殿あり。尙廣大なる巖穴ありて、俗に阿部貞任の隱匿したる所と云ひ傳ふ。この窟、優に數十人を容るゝに足るゝを以て、こゝに一泊し、東雲を排して朝暾の上るを拜するも壯快なり。この山は頗る高山植物に富み、南部イヌ、南部シドケ等本山特殊の珍花奇草生ず。登山には凡そ四時間、下山には二時間を要すべし。

## 花巻地方

### 石鳥谷

日詰驛より鐵路を南に進むこと一里餘にして石鳥谷驛あり。稗貫郡好地村の驛市にして商賈軒を並べ、近郷より人馬の出入繁し。川田鑿江の隨鑿紀程に

曰く「車駕石鳥谷驛に頓す。河漏麵を頒ち賜ふ。味甚だ美也。蓋し土産也。驛を離るれば少婦數十、紺衣紅袴、高歌して麥を舂く。其曲鄙しと雖、亦太平の音なる哉。」と。此地の子安地藏尊は地方有名の流行佛にして、毎年八月廿三日の縁日には遠近より参詣するもの頗る多し。

### 光林寺

石鳥谷驛の西南なる八幡村字中寺林にあり。林長山蓮花院と云ふ。創建は弘安三年にして、開基は寺林城主河野伊豫守通重の子左近通次なり。通次、京都に在る時、時宗遊行派の開祖上人一遍に歸依し、遂に出家隨身して、名を宿阿遵道と改め、翌年還り來つて此寺を建つ。境内は曾て河野氏の居館趾たり。地域廣濶にして且つ高燥清閑。眼下に葛丸川の支流を繞らし、所藏の寶物尠からず。近世は寺田百十五石を有し、志和赤石明神の別當を兼ねき。

### 大興寺

石鳥谷を距つ約一里、光林寺より更に西方に當る。好地村大字大興寺にあり。松林寺、長谷寺と共に閑寂なる山中に相並び、所謂北寺林の一域を爲す。曹

洞禪の古跡にして、今は越前國坂井郡御簾尾村龍澤寺の末派に屬すれども、もと道元禪師七世の法孫梅山の開山にかゝり、有名なる土佛觀音のある所なり。土佛の觀音は往昔奇瑞の傳へられたるもの、最初龍澤寺の本尊たりしを、永徳三年梅山禪師、之を大興寺に齎らして安置す。其縁日は毎年九月十七日なり。禪師、應永二十四年を以て此山に入寂し、四種の遺物(杖、拂子、珠數、佛像)は其儘本寺に傳へたり。

### 花卷町

石鳥谷驛より鐵道により南行すること約三里にして花卷驛あり。此驛の西には四五の浴泉場あり、各馬車を通ずるを以て、夏時避暑客の麁集する頃に至れば數十の車馬、驛前に群り、頗る雜沓を極む。花卷町は、人口八千餘、花卷及び花卷川口町の二ヶ町に分れ、各獨立の町政を行へり。就中隆盛なるは、花卷川口町にして釜石街道、山中街道及び盛岡街道等を交錯し、貨物の集散、旅客の旁午、縣下にあつて有數の地歩を占む。されば町況年々振張し、米穀、木材其他の産出も年々増大の傾あり。近くは電氣事業等起され、其將來最も多望とす。

**岩手輕便鐵道** 此地の殷賑は略右の如くなるが、殊に此地を繁盛ならしめんとしつ  
つあるものは此地より、東、釜石へ連絡すべき岩手輕便鐵道敷設の計畫これなり。岩  
手輕便鐵道はもと岩手縣知事笠井信一氏の立案にかゝり、明治四十四年創設の岩手輕  
便鐵道株式會社により經營せらる。全社の資本金は百萬圓、其路線は此地より上閉伊  
郡甲子村大橋に至る四十餘哩の間とす。但し實際軌道を敷き、車輛の運轉せらるゝは  
仙人峠の西麓全郡上郷村沓掛までの間に止まり、沓掛大橋間は更に索道によりて貨物  
の運搬を掌る。全線に亘り停車場の設置せらるべきは花卷、矢澤、土澤、晴山、宮守  
鱒澤、綾織、遠野、上郷、沓掛、大橋の十一ヶ所。北上川は鐵橋を以て之に架す。此  
工事は目下進行中にて、其完成せらるゝ曉は大橋より釜石に至る釜石鑛山の輕便鐵道  
と相連絡することを得べく、今まで海陸相隔絶しつゝありし縣内の交通運輸、こゝに  
一新面目を現はし、隨つて花卷は其盛運を倍蓰すべしと思惟せらる。岩手輕便鐵道會  
社は現に事務所を此地に置けり。

**花卷町** 花卷停車場前より約三町の泥坂を下れば南北に通ぜる國道に出づべし。右  
すれば花卷川口町にして、左すれば花卷町に入る。花卷の地名に就きては二種の古傳  
あり。其一に曰く、往古此邊一帶を花の牧と稱し、名馬を産出する牧場たり。里人そ  
の馬を牽き出羽の尾花澤に至りて鬻ぎしにより、花牧と名づけたりと。又他の一説に  
よるに、昔北上川筋は瀬川元館の附近より西に折れて瑞興寺の北を過ぎ鳥谷ヶ崎城下  
を廻りて南に流れ、水深く渦卷を爲し、暮春落花の候、百花瞭乱として水上に散じ、  
流れに従つて旋回する状、頗る美觀なるを以て乃ち花卷と號すと云ふ。孰れか真なる  
を知らず。此傳説中に見えたる瑞興寺は曹洞宗の名藍にして、即ち停車場道の花卷町  
に入らんとする角にあり。此地の舊領主稗貫氏の建立にして黒石正法寺三世虎溪の開  
く所。往時は鳥谷ヶ崎城の一部に屬しき。此寺門の前を過ぐれば愈よ花卷の街道にし  
て一日市町、四日町、川原町等相連る。此地舊藩時代は隆盛の地たりしも鐵道開通と  
共に次第に衰運に傾き、今や外觀の甚だ見るべきなく、官公衙學校等も僅かに花卷町

役場、花巻尋常高等小學校を有するに過ぎず。湯本村臺温泉の道路は此町の北端より發せり。此町の東を流る、瀬川を渉り、北上河畔なる宮野目村字小舟渡コフナトに赴く途中、左手ひだりに當りて一大梨園あり。創設者は花巻川口町の人高橋文太郎氏。明治初年來神奈川、埼玉縣地方を遍歴して梨園の開設に志し、同十四年之を創設し漸次擴張して面積五町歩に達しぬ。培養懇篤、管理周到蓋し稀に見る所。本縣梨果の改良せられたる第一歩は實に此梨園に發せりと云ふべし。

小舟渡 小舟渡より、北上川の對岸を望めば一大丘陵の悠然として横はれるを見る。稗貫郡矢澤村胡四王山コシロウヤマこれ也。

稗貫郡石川其西南を繞り、北上は其西北を廻行して二水丘西に相合ふ。山上に胡四王堂あり。本地佛は藥師如來なりと傳ふ。丘上より展望すれば、平野高原相起伏してまた一場の佳景たり。

雄山寺は瑞興寺の西にあたり、僅に一禪寺たるに過ぎざれども、藩政の際齋田六十九石を附せられ、花巻城代北氏父子及び南部政直の廟墓を守る。坂上田村麿の持佛と稱せられし延壽寺觀世音(黄金佛像)を勸請し、東國二十九番札所の一たり。

### 花巻川口町

花巻停車場道より南に折れ長き切通しを辿れば縣立花巻高等女學校の宏壯なる建築を其崖上に望み得べし。全校は明治四十四年の創設にかゝり、設備頗る完全せるを以て開校以來日尙淺きにかゝらず、校運隆盛なり。其南隣は稗貫郡役所にして、更に進めば吹張町フキバより漸く花巻川口町に入る。吹張町の南端は坂路となり花巻警察署前に至るべく、其中途に花巻郵便局あり。警察署前より左に折れ一直線に東に向へば、上町、下町、御田屋小路等花巻川口町を形成する主要の街衢を過ぐ。上町の北側には花巻銀行あり。此大通りより南に分岐するは豊澤町、裏町等にして、就中豊澤町は豊澤橋を隔て、根子村字下根子に接し、國道遠く黒澤尻方面に至るべく。裏町は此地遊廓のある所にして其南端に劇場あり。上町、下町等の大通りを行き盡して北上河畔に出づれば、朝日橋長虹の如く對岸矢澤村に架せられ、所謂釜石街道を通ず。此街道には馬車の便あり。朝日橋はもと船橋なりしが近年洪水の爲に破壊せられしを以て乃ち木橋に改めたるもの、脚柱高く水流に擡んで。大河森漫、遠山模糊の好風景

を占む。甚だ壯觀なり。此町より湯口村の諸温泉に至る山中街道は警察署附近より西に連れる鍛冶町に發するものにして坦々たる一路、根子村字上根子を過ぐ。鍛冶町の盡頭、根子村に接する邊には此地の一景勝たる西公園あり。城地廣濶ならずと雖、高燥なる丘陵上に位し菅公祠あり。崖畔の梅林、茶亭を圍んで疎影斜めに地に印す。若しそれ春四月、北地の風漸く緑を吹く頃、來つて樹下に徘徊すれば衣袂悉く薫じて、黄昏の微月また馨しからんとす。根子村なる郷社イダチベイ融幣稻荷神社は殆ど此公園に隣り、玉垣苔古り、祠殿神寂び、殊に綠蔭の節、神泉の水聲を聞かば蓋し塵界遠く去れるの感なき能はざらん。

鳥谷崎城趾 一名花卷城又は旭城と云ひ、花卷兩町間を撃ぐ切通し路の東方、北上川の西岸にあり。始め安倍頼時の創設にかゝり、源頼朝が平泉討滅の時伊達氏の一族稗貫爲重、封せられて之を領し、以降數十世相繼ぎしが、天正十八年、豊臣氏東征の際に至り使聘を通ぜざるの故を以て沒收の厄に遭ひ、領邑悉く南部氏に歸せり。九戸

の亂平ぎ淺野長政の上國に歸らんとする時、長政、南部信直に勸めて曰く、此城頗る要害なり。宜しく衆臣の重望ある者をして之に居らしむべしと。信直之に聞きその宿將、北主馬秀愛に采地八千石を賜ひ、城代たらしむ。居ること幾ならずして秀愛卒せしかば、尋て其父北松齋信愛をして之に居らしむ。慶長中、和賀氏の遺裔和賀忠親、其舊臣を糾合し、仙臺の領主伊達政宗の後援を仰いて此城を攻めしも、松齋驍勇にして能く戦ひ、忠親等、再興の謀遂に成らず、大敗して遁亡せり。慶長十八年松齋卒す。南部利直、乃ち庶長子彦九郎政直をして主たらしむ。政直卒して子なきを以て更に城代を置きて歴世相繼ぎしが、維新後明治六年に至り遂に廢城に歸しぬ。今や幾年の風雨に斷壁苔青み、陵圃菜花黄にして、僅に當時太平の餘韻を鎗踊唄の一曲に残すのみ。地瘤の、天邊から、星の親父が、づぼ抜けて、火事の卵を、くわぢやり、ふんぐした。

(註) 南部家領有時代花卷城下の走卒の唄ひ且つ踊れるもの。今や僅に古老の記憶に存するに過ぎず。唄の

意は月山上に出て提灯を踏み破れりと云ふにあり。

然れども城趾東西三町、南北三町半に及び、東に北上川、南に豊澤川、北に瀬川を帯び、外濠深くして今尙水を湛へたるあり。實に往時の偉觀を想見せしむるに足る。其東南端は東公園にして、鶴陰碑等を有する外何等の設備あらざるが、朝日橋、川口町等眼下に横はり、東は北上川を隔て、遙かに早池峯山の雄姿を望むべし。此公園より西に歩を轉ずれば、花巻區裁判所と花巻尋常高等小學校との間を過ぎ、鐘樓の邊より舊城の廓外に出て深濠の上に鳥谷ヶ崎神社の社殿を見む。此社は北氏父子及び南部政直を奉祀せる所にして近時東公園西側に遷座の議あり。其祭典には神輿の渡御あり。全町の子女を熱狂せしむ。南北に連れる通りは花巻小學校附近と共に館小路の名の下に總稱せられ、花巻稅務署、花巻電氣會社、小林區署、土木管區、郡立蠶業講習所等を存し、切通しに面せる高等女學校、郡役所等の所在地と連れり。

新渡戸傳 花巻の人物中最も世に聞ゆるを新渡戸傳とす。傳、嘗て花巻城警備の事を論じて用みられず。陸奥

國北部に移さる。一旦三本木野を過ぎ開拓の志を起し、遂に上國に學びし後、歸りて先づ紫波、稗貫、和賀等の諸地を試み、良績を得たり。こゝに於て三本木野開墾の志愈々堅く、安政二年全志百二十餘人を糾合し、六戸川の上流を引きて稻生川を作り、以て三本木野に放つ。荒蕪の地忽ち開け、漸く聚落を形かたちづくるに至りぬ。此間年所を閱くみすること前後十年、財を費すこと三万四千兩に及べりと云ふ。明治九年、先帝東巡、傳の別邸に御休憩あらせられ、其息十次郎に謁を賜ひ、祭樂料五十兩を下賜せられたり。今の第一高等學校校長農學博士法學士新渡戸稻造氏は其孫に當る。

**臺 温**

稗貫郡湯本村は花巻町の西北にあり。糠塚山、大日向山の東南に村居せるが其字小瀬川なる瀬川館は建久三年稗貫參河守爲重の築きし所、子孫世襲して永祿年間に至り、鳥谷ヶ崎城に移り其族瀬川氏をして代つて之に居らしめたり。此村は其名によつて推するに、往昔は温泉の湧出少からさりしが如くなれど、今は即ち臺温泉を存するのみ。臺は花巻より二里餘の山中にありて車馬を通ず。嘉慶元年、全村の農小瀬川徳右衛門、採薪の際之を發見せりと傳ふ。泉源十三ヶ所。旅亭は阿部旅館富手旅館等十餘ヶ所あり。民家櫛比して郵便局等の設けあり。羽山はつやま其他の外山ぐわいざんを以て

壺中の天地を爲し般脈を極む。泉質は硫黄質にして脚氣、中風、痔疾、疝氣等に効績あり。浴客四時絶えず。其最も多き時は仙臺地方、東京地方より來浴するもあり。芋サツ網カヶ瀧、釜淵等の奇勝亦甚だ遠からざるが、殊に釜淵は臺川の河床、岩石を以て成り其斷崖幅十間高さ四十尺に及ぶもの、溪流白沫を散じて岩床を奔下し、其瀧壺は藍碧を湛へ、其西岸の懸崖に蟠踞せる老松は水に映じて翠を恣にし、實に清爽たる仙境なり。臺陶器株式會社は温泉の出口に當り、明治四十四年以後、諸種の製品を出すに努む。

**清水  
観音**

花巻川口町より志戸平、大澤、鉛等の諸温泉に到る途上、路南みなみに岐れて、太田村に音羽山清水寺あり。本邦三清水の一とす。平城天皇の大同二年、坂上田村將軍の建立にかゝり、本尊は閻浮檀金三寸三分の十一面觀世音にして、弘法大師作の本佛中に安置せられ、東國第一の札所ふたしよなり。毎年六月二十六、七の兩日、七月九、十の兩日、全月廿六、七の兩日は其緣日にして遠近より參詣の老若男女、街道一面に

人の波を作りて、往さ來るさ、引きも切らず。清水觀音の御詠と稱するものに曰く

一番 南部太田村音羽山清水寺

はやいそげ御法のみちを清水に

めぐり太田の月を見んため

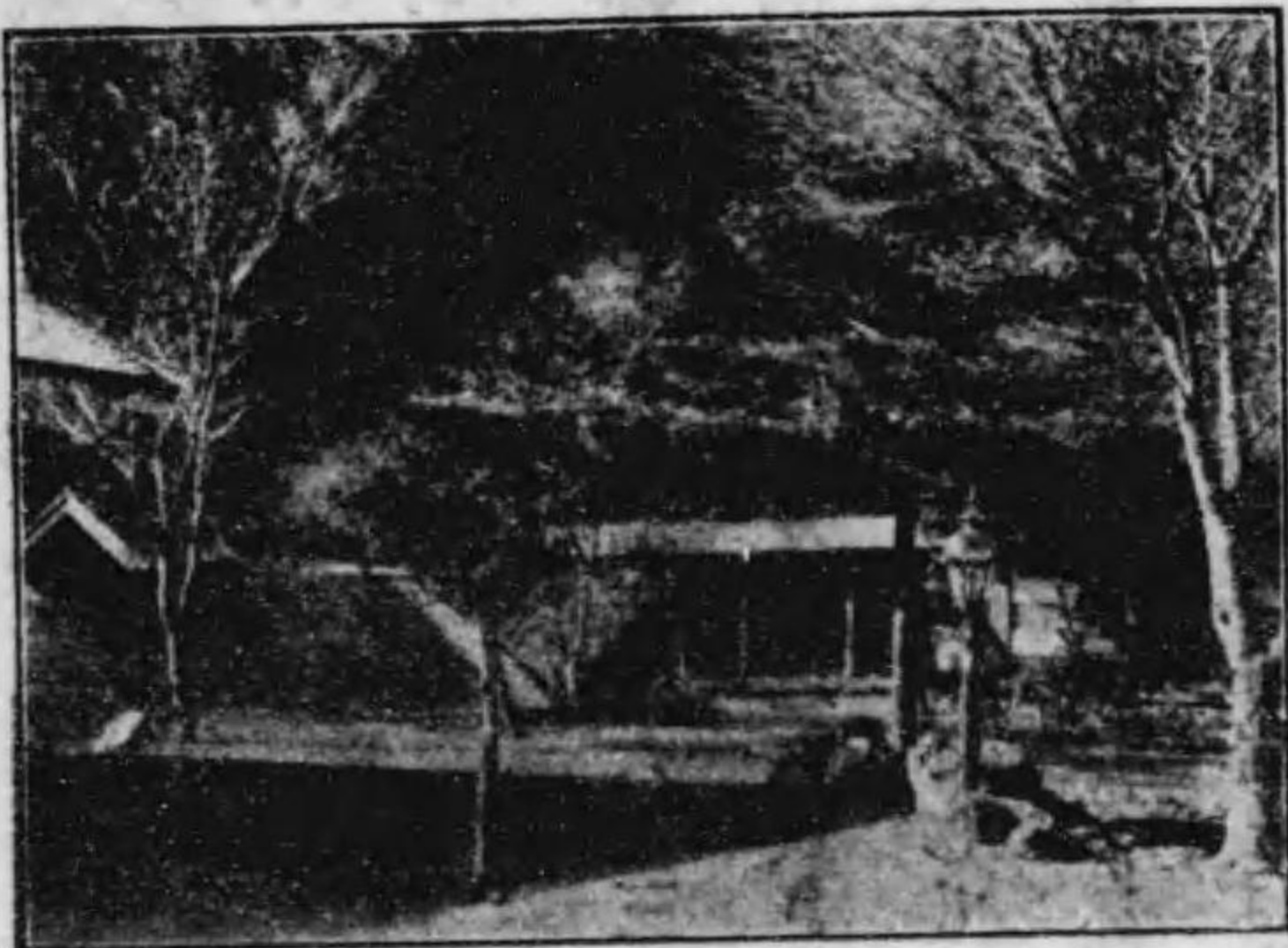
**三ッ  
山澤**

花巻町の西方二里半、太田村字三ッ澤の溪中にあり。採掘面積六十三萬坪明治十四年の發見に係る。地質は第三紀の角礫質凝灰岩及び之を貫きて岩脈を爲せる流紋岩より成り、鑛脈は重に分解せる母岩片及び帷綠色の粘土にして、大小不定の塊狀黄銅鑛の圍塊を不規則に包藏し、黄鐵鑛、方鉛鑛及び少量の石英を伴ふ。母岩片及び粘土は斷層推れの爲に母岩より生じたるものにして、鑛脈と母岩とは概ね明確に相界し、母岩のこの境界に接觸せる部分は鑛染狀を呈す。鑛脈はその幅一尺乃至八尺に達せり。



湯口の諸温泉

稗貫郡湯口村は縣下無比の温泉郷にして志戸平、大澤、鉛、西鉛の四温泉  
いづれも豊澤川の沿岸に並列し、人をして往々『東北の鹽原』なる嘆稱を發  
せしむ。蓋し其設備尙至らざる點あるを以て、彼の  
如く天下に著聞せずと雖、其風光と云ひ、泉質と云  
ひ、殆ど鹽原を髣髴するものあるを以てなり。四温  
泉とも車馬を通するを以て、夏期となれば、縣下は  
勿論、宮城、北海道、東京等よりの浴客盛んに來湯  
す。



志戸平温泉

志戸平温泉 湯口村の四温泉中、花巻驛より最も  
近きは志戸平温泉にして、即ち西方四里に過ぎず。  
其発見は元祿二年なりとも云ひ或は遙に古く延暦年  
間坂上田村麿、蝦夷征討の際、流失に中りて惱みしが、此温泉に浴し日ならずして創

痕全く癒えたるより、里人其奇効を稱して浴泉場と爲せりとも傳ふ。宿舎は久保田旅  
館の四棟にして川の南岸に位し、優に三百人を收容  
し得べし。泉質は鹽類のもの二源、單純泉のもの三  
源。温度の最も高きは百五六十度に達し、遠く之を  
花巻に引くも尙相當の高温を保ち得べしと云ふ。主  
として創痍、皮膚病等に卓効あり。近時附近に花巻  
電氣會社の發電所を設けらる。



大澤温泉

大澤温泉 志戸平より更に西に進めば、豊澤川の  
岸崖は美麗なる斷層を露呈し、水石また清奇を凝す。  
行くこと二十町ばかりにして北岸に大澤温泉あり。  
矢張久保田と稱する旅館一軒ありて間數六十を有し三百人の浴客を容る。跳橋を岩角  
に架し、四方の青巒趣致に富めり。温泉の発見せられし年代は詳ならざるも、寛永年

間、今の旅館の祖善助と云へる人、温泉場を改造して以来、漸次今日の如き盛況を見るに至れり。温泉は湧出烈しく熱度強く、且つ清潔透明なれば終日混浴するも尙瀧濁せず。眼疾、痲氣、惡疾、宿痼、痲疾等によろし。十餘年前より花卷地方の青年等主催となり、毎夏知名の講師を聘して此地に佛教講習會を開く。各地より來會するもの頗る多し。

**鉛温泉** 鉛温泉は大澤より更に一里許り奥にありて、寶曆年間の發見にかゝる。天明八年に至り藤井三之助、始めて浴場を設立したるが、舊藩主屢々暑をこゝに避けたる事あり。大澤温泉と共に各八景の名を存す。旅館は温涼館を始めとし、凡て五軒。一年間の浴客五万と稱せらる。郵便局を始め、各商店等略備はり、誠に溪中の一都市たり。鹽類泉二源、百五度乃至二十度にして脚疾、胃病等によし。西鉛温泉はこれより西三町にありて、明治二十二年の發見なるが、二十四年工を起して斷崖を削り、河底を填めて浴室を建設せり。館は名を明治館と云ひ堂々たる四層の樓なり。西鉛の泉

質は澄明にして温度また高からざるも、其空氣の爽かなると、其溪間の潤開にして水流の清きとは優に他の諸湯を壓し、夏季の好避暑地たり。此地の西嶺は桂澤山にして標高三千尺、和賀郡横川目村、澤内村、湯田村に跨る。山勢南北に亘りて北なる大杉澤山に連る。此横嶺を突切り、澤内村川舟への山徑あり。西鉛の西二里なる鴛澤鑛山よりは硫黃を産す。

**川豊澤**

は稗貫郡西部の主水脈にして湯口村の奥なる豊澤山に發源し、鉛、志戸平等の温泉場を經、太田村の北邊を過ぎ、花卷川口町の南方より



西鉛温泉

北上川に注ぐ。長さ六里。豊澤山の奥には瀑布多く、大空瀧は桂澤川の長源にして高さ二十五丈、幅一間、二條に分れ、七層に落つ。稀代の巨瀑なり。白手瀧は大空瀧の

下流凡そ八町許り。高さ十丈、幅一間半。阿佐利瀧は大杉澤にあり。豊津川の源にして高さ十五丈幅二間なり。七金瀧は出羽澤川の源にして高さ三十丈、幅一間あり。頗る壯觀。權現澤瀧は同川の下流七倉瀧を距る五町許にして高さ五丈、幅一間、共に山水の幽致を盡し、飛瀑最も奇觀なり。温泉に遊ぶ人必ず行き見て見るべし。

**塚蝦夷**

花巻川口町の東、稗貫郡根子村字上根子にあり。小丘にして穿てば石窟あり。其口は凡て巽位に向ひ、内に曲玉、刀劍、耳輪、轡等を出しき。今は殆ど開拓せられ田園となりたるが、其東南に石神社あり。祭神詳ならず。塚は蓋し古代酋長の墳墓なりしならん。

**土澤**

花巻川口町より朝日橋を渡り、釜石街道を東進すること三里、稗貫郡矢澤村を過ぎて、和賀郡十二鏑村に入れば字土澤と稱する小邑あり。花巻區裁判所の出張所等あり。此町北裏の丘上に鏑八幡を奉祀す。康平年間源頼義、安倍氏征討の時、此處に滞陣し、朝敵退散祈願の爲め、上刺の鏑矢を砂上に立てて神靈に擬し、太

刀一腰願書一卷を奉納せり。從臣十一人も同じく清砂に鏑矢を立て、願書を捧げ、蕩平を祈りたるより、後世呼んで十二个鏑矢と云ひしを、寛文年間公義巡視の折、其名餘りに長さに失すとなし、十二鏑と改む。八幡祠は前九年の役平ぎし後、其故趾によつて建立せしものなり。

**石猿川ケ**

猿ヶ石川は上閉伊郡なる仙人峠、天狗森、薬師岳より發する諸溪流の、全郡遠野町附近に於て相會して成れるものにして、其西岸に狭長なる第四紀新層の平地を開き鱒澤附近より再び古生層地に入り、更に諸種の古火成岩地を貫き狭深なる谷を穿ちて西北に流れ、花巻町の北方に於て北上川に入る。長さ十四里。其中流、遠野より鱒澤に至る間の狭長なる第四紀層平地は、其四周花崗岩若くは古成層より成り、往時湖底たりしが如き觀を呈せり。

**田瀬**

猿ヶ石川は其水清澄にして急流なるより香魚群を爲して游泳す。随つて土澤附近にして鮎築を設くる所毎歳兩三ヶ所に及ぶも、就中、古來鮎の産地とし

て聞ゆること、其更に上流に位する和賀郡谷内村字田瀬タノセに若くものなし。田瀬築は慶長年間の創設にかゝり、河底砂礫、流勢急湍、水質清冽なるを以て所産の鮎、其身大きく、其肉締り、頭部は小にして腹部は銀色あざらけく、中に汚物なくして香味優良なり。近時は遠く帝都に輸送せられ、市中著名の旗亭に供給せらる。其粕漬とせるものまた珍とすべし。此地、重轡に圍まれ風光また頗る明媚。年々晩夏の候に至れば急瀬、聲澄んで波間を上下する魚影万を以て算すべし。また地方の一名勝なり。

### 神谷内山社

和賀郡谷内村字谷内に鎮座せる郷社なり。其祭神及び奉齋の年月を詳にせず。社傳によれば神代よりの鎮座なりと云へり。光仁桓武の朝、征夷大將軍坂上田村麿、東夷征討の際、捷を此祠に祈り、賊を平ぐるの後、更に社殿を建つ。仁明帝の承知年中、釋空海の弟子月弘、不動像を安置せり。嘉祥二年叡山座主僧圓仁勅を奉じて此地に錫を留め、又康平五年、源頼義安倍貞任征討の時、往還この處を過ぎ、八幡加茂の兩宮を建つ。後鎮守府將軍藤原清衡之を崇敬し、其子基衡、孫秀衡相

繼いで信仰し、藤原氏滅亡の後、和賀領主之を祭り、和賀氏滅亡後、官之を沒收せり。文化八年南部利敬特に之を崇敬し、改めて丹内大權現と稱せり。明治五年十月より郷社となりぬ。

## 遠野地方

### 遠野盆地

和賀郡土澤町より更に東に進めば釜石街道は頓て上閉伊郡に入り、ここに北上山脈の中軸に向つて進む事となる。さればや、山崖、道の兩側より壓し來り、時に或は前途を閉塞するに非ざるかを疑はしむることあり。宮守、鱒澤、綾織等の短驛は辛うじて猿ヶ石川の河孟に僻在するを得るのみ。然れども其漸く遠野附近に至るや、山勢頓に開けて桑園稲田遠く連亘するを見るべし。此地方は文治五年阿曾沼廣綱が源頼朝に封せられし地なるが、豊臣氏勃興時代に至り、後廣郷秀吉に禮を失ひ、遂に當時三戸に蟠居せりし南部氏の附庸となり、其子廣長に至りて全く亡びたり。遠

野南部氏第二十二代南部直義、八戸より此地方に移り、以て明治維新に至れり。此地方傳説に富み、柳田國男氏の編述にかゝる『遠野物語』の如き其多くを載記し、此地方主産物の一たる馬匹等に就いても、小友村名馬墳の如き、古振りなるものあり。馬匹の外、此地方の産物には米穀、繭、煙草、苹果、木炭、木材、石材等あり。就中養蠶の如き將來有望ならん。

### 續石

遠野より西、一里三十町、上閉伊郡綾織村字山口にあり。縣道より分岐して約三町を進めば、杉林のうち二個の巨石並べり。一は高さ七尺、長さ六尺、巾六尺に及び、他は高さ七尺、長さ八尺、巾七尺許り。其上に一大石の長さ三丈八尺五寸、横一丈五尺、厚さ八尺五寸なるを重ね、形狀恰も下駄の如し。大石の上に一松樹を生じ、翠綠轉た濃やか也。傍の小祠は山神を祭る。

### 町遠野

遠野町は上閉伊郡の首都にして舊名を横田村と云ひ、戸數千三百、人口六千餘を有す。花巻より東十二里二十一町、釜石町より西十一里十七町、外に日

詰、岩谷堂、高田、盛、大槌等への通路も備はり、眞に四通八達の要地たり。唯近年他地方に於ける汽車、汽船の便開けし爲め、荷客や、此地に依らざるの氣勢を生じ、町運不振を來たしたる嫌ひあるも、岩手輕便鐵道等の開通するに至らば、往日の般賑を再現すべきや必せり。近時電氣事業等の起れる、其前兆たるなからんや。町は東西に長く、南北に狭く、南方は物見山(上閉伊、江刺、氣仙三郡の交界、標高三千尺)ありて其障塀たり。東は大平山、山王山等諸丘陵のかなた、六角牛山遙に聳えて好景を爲し、來内川クニナイは市街を貫流し、早瀬川は北境を繞りて共に西、猿ヶ石川に注ぐ。町内街衢の堂々たるは流石に遠野南部氏の舊城下たるの俤を見るべく、毎月一六の市日に際し、其廣濶なる街路の雜踏するも、尙閑雅の趣致を失はざるなり。重なる街衢は六日町、新町、一日市町、石町等コシマにして、就中新町橋際には遠野警察署、石町には遠野郵便局あり。一日市の北通り裏町は遊廓地にして馬檢場を存す。舊藩士四百餘名の邸宅を存せる坂の下町、砂場町、本町等は舊城趾の崖下に周匝せるが、此邊今は上閉伊



つ、遂に多賀神社の境内に至る。多賀神社は正保五年、南部直義の建立にかゝり、實に鍋倉城西の鎮護たりし處、近年また卯子酉明神を境内の一角に移せり。良縁を結ばんとする男女の、闇夜此明神祠に來り、左手を以て布片を樹枝に結ぶ如き、其俗甚だ幽婉なりと云ふべし。

豊年節

- 一ツトセ、 ひより山から見ながめて、あの作見さんせ明輩衆、ドモ豊年だ。
- 二ツトセ、 二人連にて樽さげて、新瀧花見に行わいな、ドモ豊年だ。(新瀧は綾織村小枕山にあり)
- 三ツトセ、 みても見事な山櫻、ひと枝折れや皆散れる、ドモ豊年だ。
- 四ツトセ、 嫁も出て見ろ孫も見ろ、いなりの作見は賑やかだ、ドモ豊年だ。
- 五ツトセ、 五月菖蒲のお節句に、お國の幟は立ちそろた、ドモ豊年だ。
- 六ツトセ、 無性にぬか温みが來たわいな、尾や團扇のひまもない、ドモ豊年だ。
- 七ツトセ、 何を言うても尾崎様、あんぶら鱒の御利生ぢや、ドモ豊年だ。

八ツトセ、 やぐらせつたの一字、今年の若衆は大はだ、ドモ豊年だ。

九ツトセ、 今年よい歳よいよなか、五穀の豊りが來たわいな、ドモ豊年だ。

十トセ、 とにもかくにも御物成、なんぼかおさまる數知れぬ、ドモ豊年だ。

伊勢兩宮神社 遠野町六日町にあり。猿ヶ石川は堂後一町ばかりの處を流る。建保年中阿曾沼廣綱の大平山に勸請したるを正徳二年遠野南部二十五代利哉、今の地に移す。境内平坦にして濶開、老樹と靈泉と自ら人の神を澄ましむ。これより遠野町の西端を傳ひ北に進めば、對泉院、常福寺、柳玄寺、瑞應院、善明寺、萬福寺、大慈寺等遠野町に於ける重なる寺院は概ね、來内川を挾んで點在せり。大慈寺は遠野南部家の菩提所にして現に其塋域を存す。

八社

上閉伊郡松崎村字白岩にある郷社にして遠野より僅に二十町。祠宇嚴整、境内幽邃にして馬場あり。建武年中阿曾沼朝綱が全村字宮城に勸請せしを寛文三年南部直義、此地に移し爾來祭典殊に流鏑矢を行ひき。







昔、某僧偽錢を鑄造せし所なりと云ふ。又其對岸半町よして山腹に一大窟あり。これ亦窟口狭けれども、洞中甚だ廣く、奥に入ることに二十餘間、高さ一丈乃至二丈、鐘乳垂下して蝙蝠群棲せり。蝙蝠窟と云ふもの即ち是れ。尙また沓掛橋より下流三町を下れば、巾八十間餘、高さ貳丈の岩壁、森林中は聳列して壯觀を極む。其形の似たるを以て屏風岩と名づく。

## 黒澤尻地方

### 黒澤尻町

花卷驛より鐵路を南行すること約三里半にして和賀郡なる黒澤尻停車場に着すべし。和賀川は西方より落ち來りて驛南を北上川に合湊し市街は北上の西岸に沿うて横はる。黒澤尻の尻は蝦夷語にして平原を意味せるものなりと云ふ。南部の古圖を一覽するに鬼柳は重要な宿邑として記され、黒澤尻は却つて閑却されたるものの如し。明治に至り附近の諸鑛山勃興し、且つ羽後に通ずる平和街道の起點とな

りしを以て、旅客貨物の集散頗る頻繁を極め、今や和賀郡役所、黒澤尻警察署、私立和賀病院等の所在地として、今や人口五千五百に達せり。生糸、傘、氷囊、米麥、等を産し、輸出せらるゝ額亦少からず。停車場より西へ進むこと六町にして右折すれば市街に入る。商家最も櫛比し全町の般賑を占斷する本町は、慶長六年和賀城没落の後、造營せられし所。當時、土地の肝入小澤平左衛門、南部侯より街路の區劃を命ぜられ、數十の白莢樹を植えて境界を作りしが、枝葉繁茂して屋上綠蔭じ、一時頗る美觀を呈しき。然るに逐年その影を絶ちて、最後の一本も近年に至り遂に伐採せられしは惜むべし。その南に中町、新町を連ぬ。就中新町は萬壽元年、田甫を埋めて新になれりと傳へ、その南境より左右二條の街路を分てり。西なるは暗香浮動する新穀町の遊廓地にして、東なるを諏訪神社の鎮座せる諏訪町とす。諏訪神社は大同二年、源義家の勸請になり、建御名方命を奉祭す。慈覺大師之に諏訪山護國寺を建立し、東奥鎮護の靈場として盛觀を極めしが、嘗て花園天皇の中宮、祈願のため、五輪の小塔と鑑



述懐するもの數多也。小藩か新藩ならば已に内亂の起る勢なれど、幸舊邦にして民其德に浴すること久し、故に或は免るゝものならん。海岸極めて長しと雖も、其防禦の法絶えて行はれず。而も盛岡は繁花なり。藩士の往來を見るに、大に立派なり。國の困窮するに似合ざる様に思はる。(「海門東北風談」)

獅子踊 豊年祭の際、鬼柳地方より出づる獅子踊は、盛岡地方のものや、其趣を異にし、頭上に鹿角をふりかざし、龍頭の如き假面を附けて大鼓を鳴らしつゝ踊る勇壯なる踊なり。春日明神毒蛇を退治せる時、奉待せる鹿その頭を食ひて欣喜雀踊せるものを型取れるものなりと稱し、之れを八人にて踊るとき春日の八ツ獅子と云ふ。その唄の一節に曰く、

こゝは花山、櫻山、

今は盛りだ、今はさかりだ。

正覺寺 鬼柳村の中にある曹洞宗の名藍にして、傳法山と號す。庭前の南の山際にいたた塚と云へる土饅頭二つあり。北越耕雲四世瑚海中珊和尚の開く所と傳ふるも、

實は其二祖秋鱈宗俊の起せるならんと云ふ。中興の祖を智禪和尚と云ひ、享保年中、伽藍の完成を見たり。

**和賀趾城**

黒澤尻町より東北一里半ばかりにして二子村の宿に達すべし。こゝは往昔飛彈が森又飛羽瀬か森と稱へられし地にして、和賀氏の居城たりし二子城の内城に屬す。其極南は即ち大門なり。本丸趾は宿の西北北上川の岸頭に位する高地にして現に日本武尊を奉祀し、白鳥神社と號す。外濠今尙存せり。和賀氏はもと源頼朝に出づ。頼朝の伊豆にあるや、伊藤祐親の女に通じ一男を生み、春若と云ふ。祐親大に怒り、侍臣をして、春若を伊東が淵に沈めしめんとす。然れども侍臣之を爲すに忍びずして密に保育せり。既にして頼朝平氏を亡ぼし、建久八年信濃國善光寺に養するに及び、春若主従行きて之に面謁し、遂に従つて鎌倉に歸る。頼朝乃ち梶原景時を召して曰く、六十州中領主なきの地ありやと。景時對ふるに奥州和賀郡を以てす。こゝに於て春若封ぜられて和賀郡主となり、名を多田式部少輔忠頼と改む。建久九年忠頼鎌倉

を發し、奥州刈田に到る。時方に嚴冬、降雪路を埋め、止むなく淹留せしが、偶々痘患を發し遂に卒す。遺子に忠明あり。和賀郡更木村梅の澤に達し、(今其趾を小田島館と云ふ)元久二年更に此地に城きて移り住む。それより二十四世主馬守忠親の時に至り、城市豊臣秀吉の沒收に遭ひ、却つて南部信直に附せらる。時に天正十八年なり。時に伊達政宗、忠親を指嗾して曰く、若し兵を募り南部氏の領地を侵略せば、則ち以て稗貫、和賀を以て之を封ぜんと。忠親大に喜び、其兄稗貫忠廣、和賀義忠等と力を協せ、花卷城を攻めて利あらず。走つて岩崎城に籠る。明年南部利直の爲に破られ、忠親逃れて宮城野の國分寺に入りしが、利直、和賀一揆の事を徳川家康に懇へしにより、遂に自裁して死せり。南部氏撥亂の事終るや、和賀城を毀ち、また舊觀を存せしめず。爾來時移り世變り、北上川の波とこしへに榮枯を歌ふのみ。本丸跡の西南に、八幡山あり。今、物見ヶ崎公園と云ひ、遠く北の方、花卷川口町の朝日橋を望み得べし。

### 正洞寺

二子の東南一里たらずにして、北上川を隔て、立花村あり。疊山は長江に臨める一勝地にして、古松翠蓋を垂れ、一望の沃野、風光極めて佳なり。山上芭蕉の「梅が香にのつと日の出る山路かな」の句碑を建つ。此村の舊館は多田滿仲の郎從藤原仲光の居住なりとの説あれども、こは和賀氏の祖先が攝津多田源氏の屬流なるにより起れる俗傳なるべきか。しかも其字黒岩なる正洞寺には謠曲仲光に見ゆる説話を存せり。寺は今曹洞宗なれど、昔は天台宗にして、一説には和賀氏の祖先多田頼親が攝津國中山寺を移して造れりとも曰ふ、寺門の北に故城趾及び瀧あり。白山宮の別當門前に残る古伽藍の遺趾は丈六と稱し、これまた正洞寺のそれならんと思惟せらる。

仲光 一名 滿仲

元清 作

シテ詞「是は多田滿仲に仕へ申す藤原仲光と申す者にて候ふ。扱も御子美女御前は、あたり近き中山寺に登せおかれ候ふ所に、學問をば御心ごんに入れ給はず。明暮武勇を御嗜み候ふ由聞し召され、以ての外の御憤りにて、某に罷り上り、御供申せとの事にて候

ふ程に、今日中山寺へ参り、美女御前を御供申し、唯今御所へ参り候ふ。加何に申し上げ候ふ。美女御前をば御供申して候ふ。満仲詞「いかに美女、久しく寺より呼び下さざるは、學問能くせよとなり。まづ／＼御經聽問せんと、紫檀の机に金泥の御經、それ／＼讀誦し給へと、美女が前にぞさし置きたる。美女、如何に父御の仰せにつきても住むかひもなき淺香山、手習ふ事もなかりしかば、ましてや御經の一字をだに、讀まざりければ今更に、涙に咽ぶばかりなり。満仲詞「實に／＼満仲が子なれば、一寺の賞翫隙を得ず、御經讀まぬは理なり、さて歌は。美女、讀み得す候ふ。満仲「管絃は。問へども云はぬ口なしの。地「こはたが爲なれば、父もさしもに云ひし事に、跡をつけぬ庭の雪、人に具せんもなながしが、子といふかひもなかるべしとて、御佩刀を取り給へば、走りいづるや仲光が、中にて兎角御袖に、取り付きすがり申しつゝ、危き美女御前の、御身の程ぞいたはしき。

満仲詞「いかに仲光。心をしづめて聞き候へ。子供を寺へ登せおくは、學問の爲にてこそ候へ。明暮武勇を嗜まんには、寺に置きてのかひは何事ぞ。シテ詞「御説尤にて候ふさりながら、折々の御折檻にてこそ候へ。先々御佩刀を賜はり候へ。満仲「所詮美女を討つて参り候へ。さなきものならば、明神氏の神も御知見あれ。仲光共にそのまゝに置くまじさぞ。シテ「何事も御説は背き申すまじく候ふ。まづ／＼御内へ御入り候へ。シテ詞「言語道斷。以ての外の御怒にて候ふ。御呵りあるべきとは存じ候へども、かほどまでとは存せず候ふ。いや／＼何と申し上げ候ふとも、一まづ落し申さばやと存じ候ふ。いかに申し上げ候ふ。美女「如何に仲光。唯今自を逃しつるは、仲光が制するによれり。美女を討つて参らせよと怒り給ふを、我物ごしに聞きし也。はや自らが首を取り、父御の御目にかけて候へ。シテ「げに／＼健氣なる事を仰せ候ふものかな。所詮何と仰せ候ふとも、一まづ落し申さうずるにて候ふ。や、何と申すぞ。御使の立ちたると申すか。あら笑止や。何と仕り候ふべき。げにや何事も報いありける憂世かな。詞「傳へ聞く阿闍世太子は頻婆娑羅を害せずや。是皆宿縁かくの如し。美女、過にてな

せば、シテ「現にやがて、地」報いは人の爲ならじ。只自がなすところを、思にや恨みある、憂き世の中と思ふらん。たかひに憂き事を、語りかたれば時移る。はや首とれや仲光と、言の葉も涙も、すゝむこそ悲しかりけれ。

シテ詞「あはれ某御年の程にて候はゞ、御命に代はり候はんずるものを、惜しからぬ命もことによりて、心にまかせぬ口をしさは候ふ。幸壽詞「いかに父上、唯今の御言葉こそ、幸壽が耳にとまりて候へ。早自はやみづかが首をとり、美女御前と仰せ候ひて、主君の御目にかけて候へ。シテ「何と申すぞ。美女御前の御命に代らうずると申すか。さすが仲光が子にて候ふ。げに／＼汝が首をとり薄衣につゝみ、夜まぎれに遠々と御目にかくるならば、さすが親子の御事なればよもさだかには御覽候ふまじ。さらば御命に代はり候へ。時刻移りては叶ふまじと、太刀おつ取つて仲光は、我子の後に立ちよれば、美女「美女は幸壽を失ふとも、共に自害に及ぶべしと、泣きかなしみ制すれば、シテ「のう御主みしうの命に代ること、弓矢取る身の習ひなり。美女「悲しやな互に争ふ命のきは、幸壽

「幸壽もすゝみ、美女、美女も立ちよる、幸壽「かなたは主君、シテ「此方こなたは思ひ子。美女「中にてなか／＼シテ「仲光が、地「自は是程に惜しからじ。何とかせましとやあらんと、猛き心にも弱り果てたるけしきかな。美女「親にだに、惜まれぬ身を何とかする。かく思ふらん中々に、情のつらさ如何ならん。幸壽「情は人の爲ならじ。今此きは御命に、代り申さずは、弓矢の家の名ぞ惜しき。地「かなたこなたも幼きいとせな、御身にだに理ことわりの、或は御主みしう子は惜し。主君をはいかて手にかげんと、心よはしやしま弓、ゆん手にあるは我子ぞと、思ひ切りつゝ親心の、鬨討うつつに現なき、我子をゆめとなしにけり。狂言「シカ／＼シテ詞「げに／＼汝が申す如く、某が心中さつし候へ。又美女御前を御供し、何方へも立ち退き候へ。

シテ詞「如何に申し候ふ。美女御前を討ち奉りて候ふ。満仲詞「いしくも仕りたるものかな。さこそ最後の未練にありつらん。シテ「いやさは御座なく候ふ。某太刀抜き持つて、少しためらひ候ふところに、やあいかに仲光おくれたるか、是を最後の御言葉

にて候ふ。満仲「いかに仲光、ねこと存むの如く、總じて美女ならて子と云ふものなし、今日よりしては汝が子の幸壽を一子と定むべし。急いで呼び出し候へ。シテ其事にて候ふ。美女御前の御別れを悲み、元結切り暮に失せて候ふ。同じくは仲光にも御いとま賜はり候へ。様替へばやと思ひ候。満仲「心づよくは云ひつれども、さぞ思ふらん美女丸をも、我子の如く手馴れしに、二人の者に別るゝ思ひ。地「よしや王土にすむ習ひ、貴命は誰ものがれぬぞと、仲光をとにかくに、すかし給ふぞよしなき。げにや親子の道なれば、あはれとや又思ひ子の、跡とふ法の事業を、營み給ふあはれさよ。ワキ「是は比叡山惠心の僧都にて候ふ。扱もさる子細候ひて、唯今多田の満仲の御所へと急ぎ候ふ。先々此方へ渡り候へ。いかに案内申し候ふ。シテ「誰にて渡り候ふぞ。や、惠心の僧都の御下向にて御座候ふよ。ワキ「いかに仲光、扱も幸壽が事は候ふ。まづ某が参りたる由御申し候へ。シテ「心得申し候ふ。如何に申上げ候ふ。惠心の僧都の御出にて候ふ。満仲「あら思ひよらずや、先此方へと申し候へ。シテ「畏つて候ふ。此

方へ御入り候へ。ワキ「心得申し候ふ。満仲「さて唯今は何の爲の御いてにて候ふぞ。ワキ「さん候ふ。唯今参る事餘の儀に非ず。美女御前の御事を申さん爲に参りて候ふ。満仲「その事にて候ふ。餘りにふしぎの者にて候ふ程に、仲光に申しつけ失ひて候ふ。ワキ「その事にて候ふ、まづ御心をしじめてきこしめされ候へ。美女御前を失ひ申せとの御使しきりなりしに、仲光心に思ふやう、いかで三世の主君を手に懸け申すべきと思ひ、我子の幸壽が首を切り、美女と申して御目にかけて候ふ。されば我子に代へて思ふ程の、美女御前の不審免しおはしませと、美女を引具し満仲の、おん前にこそ参りけれ。満仲「詞「さればこそ未練なる美女なりけり。幸壽を殺さば諸共に、などや自害に及ばざる。ワキ「詞「いやいや諸事をさし置きて、幸壽が佛事と思しめし、美女を助けてたび給へと、涙を流し申しければ、地「猛き心もよわくと、はや領掌を申しけり。仲光あまりのうれしさに、御盃や菊の酒、仙家に入りし身の、七世の孫に逢ふ事も、たとへならずや親と子の、一世のちぎりの二度逢ふぞうれしき。シテ「親子鸚鵡の盃の



いく久しさの酒宴かな。ワキ「いかに仲光、目出度き折なれは一指御舞ひ候へ。地「いく久しさの酒宴かな。シテワキ「鴛鴦の、友なき水にうきしづみ、地「下安からぬ思ひこそあれ。シテ「あはれやげに我子の幸壽があるならば、美女御前と合舞せさせ、仲光手柏子囃し、只今の涙を感涙と思はじ、いかがはうれしかるべき。地「思ひは涙、よそめは舞の手。交るは袖の、上露も下露も、わくれ先たつ憂き世の習ひ、昨日は嘆き、今日はよろこびの都にかへる、これまでなりと、惠心の僧都は、美女を伴ひ歸りければ、仲光も遙にわきごしと参り、此度の御ふしん人爲にあらず。かまひて手習學問ねんごろにおはしませと、御暇申して歸りけるが、無慙や幸壽が御供ならばと、しばしは御輿を見送り申して、うちしほれてぞとまりける。

**奥寺用水**

黒澤尻の北、飯豊村に村崎野あり。此地は其西方なる笹間、藤根、横川目の諸村と共にもと一望平蕪の地なりしが、奥寺八左衛門定恒の、所謂奥寺用水を開鑿して之に注ぎし以來耕耘の業頗る開け、今や即ち萬頃の美田となれり。定恒は

南部重信の臣、祿二百石を食む。一日、村崎野を過ぎ、其芳草徒らに緑なるを見て、之を開墾し國利を起さんと欲し、歸りて弟清定と謀り、其親族松前侯の家臣某に因りて、金三万兩を松前氏より借り、羽州阿仁銅山の鑛夫を雇ひ、横川目より墜鑿して山を貫き、和賀川を引き二坑を通ず。一は千四百六十間、一は七百間、以て水を此曠野に注ぐ。寛文五年、業を創め、延寶七年に至りて成る。歳を閲すること十五年にして、村崎野、飯豊、北笹間、南笹間、中笹間、栃内、横志田、成田、尻平川、横川目等に亘り二百石の美田を得たり。藩主其功を賞し、三千金を與へて松前氏に歸さしめ、且其地の内千石を加賜せしも、定恒辭して僅に五十石を受けき。村民其徳を慕ひ、歳時奉祀すと云ふ。

**後藤野**

藤根村の北笹間村に隣れるほとりは、丘陵の間にありて不毛の地頗る多し。これ即ち後藤野にして、此地方第一の原野とす。初春の頃、和賀、稗貫地方の農民等此野に來り、視界遙に髣髴する幻影を望み、其年の豊凶を卜する習あり。其

幻覺を稱して「後藤野の狐」の示現なりと云ふも、もとより古來の迷信に基くものならん。

**岩崎城趾**

横川目村より南、和賀川を隔て、岩崎村あり。黒澤尻より其驛邑に至るには、約二里を輕便人車鐵道により、更に和賀川を涉りて、約三十町を南すべし。其夏油川ゲトウカの西岸には岩崎城趾あり。高羽場の北東の出崎にして、西は平地なれども猶城内と呼ばれ、方三町餘、升形の跡二個を有せり。年々川水の爲に、崖岸崩壊し城趾を狭せばむ。昔は川筋遠く、東の泉徳寺前を流れたりと云へど、今甚だ地形を變じ、當年の南部陣跡の如きは今下中島にあり。堀跡の如き悉く田となりぬ。此城は天正の頃、和賀氏の臣岩崎彌十郎の居りし所、十八年、豊臣氏兵を奥羽に觀すや、彌十郎其主薩摩守義忠と共に出奔す。十九年、城地南部氏に屬し、南部氏之を毀てり。慶長五年、義忠の弟和賀主馬守忠親、伊達政宗によりて恢復を圖り竊に修めて之に據りしが、南部利直攻めて直ちに之を抜き、其柏山伊勢を置く。後之を毀ち空しく秋風の吹斷に委

せり。

**夏油川** 古くは外道川に作る。和賀川の支源にして岩崎村の西南なる山界に發源し、東北流して新田しんでんを過ぎ、岩崎に至りて本川に入る。長さ五里許り山中に瀬目温泉あり。

**瀬目温泉** 瀬目温泉は攪類泉にして、僅に硫化水素の臭氣を帯び、溫度九十二度を有つ。源泉は夏油川森の下にありて、夏油川に沿ひ、頗る峻險なり。岩崎新田の苜場より一里餘、泉は寛政五年に開く。

**和賀の鑛山郷**

岩崎、横川目の諸村は其西、湯田村、澤内村等と相連りて、實に縣下無比の鑛山郷たり。其大小にての鑛山を擧ぐる時は、實に五十を超ゆる有様にして、其多くは銅山なるが、就中水澤銅山、仙人鐵山。鷲の巢金山の如きは、其規模大なるものとす。

**水澤銅鑛山** 水澤は縣下第一の銅山にして岩崎村の宿驛より西一里許、岩崎村字山口に位し、北に和賀川を遠らせり。採掘面積二十九万五千二百坪を算し、製銅額年五十數萬斤を數ふ。明治二十三年古河市兵衛氏の創始する所にして、古河潤吉氏の

繼承するに及び益々事業を擴張し、目下は古河鑛業會社に於て之を行ふ。鑛山の東部に第三紀凝灰岩、泥板岩發達し、西部に片麻岩層を破りて迸出したる角閃花崗岩あり。而して其中間に流紋岩噴出せり。鑛脈は流紋岩及び該岩と花崗岩との接觸點に包含せられ、其走向概ね北六十度東にして、北々西に傾斜し、三尺の幅を有す。鑛石は黄銅鑛にして少量の石英を石脈とす。

●●●●●  
網取鑛山 和賀輕便人車を戸谷森に捨て、數町を歩すれば、横川目村の西部に網取銅山あり。水澤鑛山と南北殆ど相望む。發見年代詳ならず。明治十八年大光寺一三人舊坑を取明け探掘に従事し、爾來多少の變遷を経て、明治三十八年現所有者平井六右衛門氏の手に移る、探鑛、選鑛、製煉共に見るに足らず。年産額十一二万斤、三万五千圓位なり。此山の麓より更に西、平和街道に添ひ、平線へんせんと稱する地に至れば和賀橋及び平和橋あり。懸崖の麓を深き弓形を成して流る、和賀川の上に、嚴然として架せられたる大釣橋にして、二橋の間、僅に數十間に過ぎず。共に巾二間許、和賀橋

は長さ五十四間餘、支柱四十六尺。平和橋は長さ七十七間、支柱三十三尺。橋上に立ちて俯仰すれば、左右の山嶺森然として天空を遮り、眼下の清流、音微かすかにして去る。



仙人製鐵所

●●●●●  
仙人鑛山 水澤鑛山の西約一里にして仙人鑛山あり北に和賀川を控へ、岩崎、湯田の村堺に峙つ。標高三千餘尺。探鑛場は山の北麓に位せり。地質は第三紀の凝灰岩によりて被覆されたる黒雲母片麻岩層及び角閃片麻岩層より成る。花崗岩之を貫きて迸發し、石灰岩層又多少發達せり。鑛石は主として雲母鑛にして、少量の黄鐵鑛を交へ、花崗岩と石灰岩層との接觸部に廣く胚胎し、遠平より千枚鞍、姥杉、檜戸、金膚、矢立澤に連亘す。其走向は北々西より

南南東にして、東北東に傾斜し、接觸部には角閃石、柘榴石等の鑛物を成生せり。本

山に於て、將來銑鐵に製出し得べき概量は實に四十五萬噸に上るべしと云ふ。其發見の年代は詳ならず。明治の初年採掘に従事せし人ありしも成功せず。爾來幾變遷を経て明治二十八年雨宮敬次郎氏の有に歸し、二十九年諸般の設備に着手し、三十三年初めて製煉試験を行ひしが、翌年工事完成以來事業を繼續して、四十年之を株式組織に改め、仙人製鐵所と稱し今日に至れり。現在の設備は鐵鑛製煉用として十二噸高爐一基、六噸高爐一基を有す。外に製炭業、鑄鐵業、木工鍛冶工業等の附屬事業あり。一ヶ年の産額十四五萬圓と上る。

### 西和賀の峽谷

横川目を経て舊稱西和賀に入れば、全く中央山脈の中に包含せらるゝ大縦谷となり其形觀を一變す。平和街道は和賀、平和二橋のほとりより愈よ山峯に添うて進み、湯田村を経て秋田縣平鹿郡横手町方面に向つて去り、澤内方面への道路は更に湯田村川尻より分岐して、和賀川に沿ひつゝ北に進む。或は懸崖千丈砂礫雨の如く降り、俯瞰する時溪谷の幽かにして覺えず心肝を寒からしむるものあり。此

縦谷は南北凡そ十二里、東西凡そ四里、冬季にあつては雪峯重疊して、寂寞凄寥を極む。

### 川尻及び湯田

黒澤尻町の西九里餘にして川尻あり。横手へは更に七里餘。黒澤尻警察署川尻分署等を有し、此峽谷の一要驛たり。湯川温泉は此驛の南一里餘なる湯の平にあり。奥中下の三湯に分れ、鹽類泉に屬す。奥は三十八度、中は百四十度、下は百四十五度と驗せられ、奥の湯は寛政二年、中の湯は天保二年、下の湯は正徳年中の發見に係ると云ふ。湯の平の南方を支ふる高峯は三森山ミツモリヤマにして標高五千八百尺、中央脊梁山脈の一高峯たり。川尻の西には白木峠ありて又越中畑峠とも稱し、秋田縣仙北郡に誘く。また川尻の北半里の處には湯田と稱する一小邑ありて澤内小林區署あり。また一名湯本とも云ひ、温泉あり。湯田の名は寛文中、田中に湧出せる湯を開きて浴場を開きしに起ると云ふ。温度凡そ百九十六度。其效能少からず。地方は勿論、秋田縣下より來浴するもの多し。

秋風や人あらはなる山の宿

子規

山の湯や裸の上の天の川

●●●●●●●●  
 鷲の巢金山 湯田に存する鑛山中有名なるは鷲の巢金山なり。明治三十五年深澤多吉氏許可を得て其後二三人の手に移りしが、同三十九年に至り、故爲田文太郎氏の所有に歸せり。階段法により露頭より採掘するを以て其方法甚だ簡單なり。年産額八萬六千圓に達し縣下金山中第一位を占む。此山は鑛區百三十五萬七千九百九十六坪にして鑛石豊富に、且採鑛せるもの、内捨石極めて少きを以て收利従つて多く、將來益々事業旺盛なるべしと云ふ。外に村内松川金山もまた有名なり。

**新町及  
川舟**

湯田より北、澤内村に入り、進むこと二里にして新町あり。花巻區裁判所新町出張所あり。西嶺を眞晝山、高木山等とし、東嶺を志賀來山、桂澤山等とす。新町は海拔千尺許、實に深谷中の小市店を爲せり。これより北方太田の附近なる深澤館は、元龜中太田十郎の居りし處にして、天正中南部氏に歸するに至り遂に

廢滅し今僅に遺濠を有す。それより更に猿橋を経て川舟に至る。新町よりは二里半なり。山中の小市店にして、東は稗貫郡豊澤に、西は秋田縣仙北郡角館カクノヅツ、白岩等にそれぞれ山徑を出す。東北に進めは遂に貝澤、山伏峠(標高約二千尺)を越えて岩手郡御所村に入るべし。

●●●●●●●●  
 卯根倉鑛山 澤内地方に於てや、有名なる鑛山は卯根倉及び大荒澤にして共に銅山なり。就中卯根倉は明治七年地主嘉右衛門なる人、舊坑を發見したるに始まり、爾來轉々して二十一年杉本政徳氏の經營當時全盛を極めたるも忽ち衰運に傾き、三十八年佐藤二郎氏の手に移り施設を一新して稍々順境に達せり。採鑛、選鑛製煉共に概ね舊式なり。一年の産額十七八万斤。

●●●●●●●●  
 大荒澤鑛山 往時稼行の盛大なりし跡今尙現存せるも發見の年代詳ならず。明治九年照井源八氏經營せしも失敗に終り、後一二の手を経て現管理者上田徹氏の經營に移れり。採鑛、選鑛、製煉等に甚だ見るべきものなし。年産額七万斤を超ゆ。

**和賀嶽**

川舟の西北嶺は即ち和賀嶽にして標高四千六百尺と稱せらるゝも其實を詳にせず。中央山脈の一雄峯にして其主成は第三紀層に屬すと云ふ。若し此山頂に登らんか、陸中羽後の二州は一目の中にあり。南部封内郷村志の記すところによれば、山中に一窟あり。窟中に入ること數十歩すれば暗暝にして進むべからず。窟を出て、嶺上に至れば平頂の大盤石あつて相並ぶ。一池の方五六丈なるものありて、其狀、盤と同じ。深さ一尺許と。然れども何分の深山なれば容易に登攀を企てんこと難かるべし。

**和賀川** 和賀川は和賀岳、大荒澤岳等の東側に發源し、所謂眞晝山脈の東縁、縦谷の間を南流し、兩岸に狹長なる第四紀層地を作り、川舟新町等の村落を過ぎ、大葛附近より、東方に轉じ、第三紀層火山岩片麻岩等の地方を貫きて峡谷を作り。迂餘曲折して、遂に再び第四紀洪積層に出て、黒澤尻の近傍に於て本流に注ぐ。流路約十二里其上流地方に於ては大斷層を生じ、眞晝山の西麓に起りたる千屋斷層と共に、陸羽の

大地震(明治二十九年)を生じたることあり。

**水澤地方****金ヶ崎**

黒澤尻驛を發して鐵路を南に走れば膽澤郡に入り、金ヶ崎驛に着す。此間凡そ三里許。南方水澤とは一里三十丁許を距つ。其宿邑は金ヶ崎村に屬する一閭巷に過ぎざれども有名なる鳥海柵趾トリノミナソバ及び白糸城趾等を有するを以て、史癖を有するものゝ見道がす能はざる地なり。就中白糸城趾は膽澤郡の北岸に鬱然たる丘陵にして又觀音館とも云へり。永承の頃、安倍貞任の叔父、河堰太夫の居城たりしが、源義家の抜く所となり、後慶長年中、伊達政宗其臣桑折左衛門をこゝに置けり。今や時相距り、當時の偉觀を想ふによしなしと雖、南は膽澤川に限り、北は和久川を距つこと十餘町、西方遙に駒ヶ嶽を望み、東方に北上の大丘を擁せる、歴觀すれば、其天險を察

するに難からず。若しそれ鳥海柵趾に至つては白糸城趾を西北に距つこと十四五町、字西根と稱する所にあり。西北二面は平坦にして、東面は一段低く、南は膽澤川に臨み、里俗彌三郎館の稱あり。安倍鳥海彌三郎宗任の居城なり。天喜五年九月、安倍頼時の流矢に中るや、この柵に於て死せりと云ふ。康平五年宗任及び亘理經清等この柵をすて、厨川に入れり。

**稻瀨の渡**

金ヶ崎より相去を経て、東北方なる江刺郡稻瀨村に至らんとすれば、吾人は先づ北上川なる稻瀨の渡を越えざるべからず。渡津は門岡山の下にありて流水平に去り、山野甚だ平遠なり。稻瀨とは歌名所にとれる名稱なりと云ひ、西行法師此地を過ぎし時詠み出でてふ一首の古歌を傳ふ。但しこの歌、山家集中に採録せられざるを以て今其真偽を知り難し。

みちのくの門岡山のほとゝぎす

いなせのわたりかけて鳴くらん

**國見山**

江刺郡稻瀨村下門岡に國見大慈閣と云へるあり。舊仙臺藩封疆の望標たりし所にして、往昔は金福山頃岳寺と稱する古刹ありしと云ふ。嘉祥三年、慈覺大師の開く所。神宮佛宇頗る多く僧房七百餘宇を算し、山頭に大師作十一面觀音を安んぜり。爾後眞言に改宗して國見山極樂寺と稱し僅に五宇を殘せしも、時代の變遷と共に廢頽して上代盛時の壯觀を回想するによしなし。榮枯の理を見んとするものは一日節を國見山に引け。然れども詩人此寺を詠じて曰く

國觀峯

關元龍

國觀峯聳天咫尺。翼然梵閣勢如舞。橫檻北通南部雲。飛簷南灑仙臺雨。

江山村落望茫渺。蹄痒腋汗暫彷徨。秋色憑高吟不盡。胸懷一洗對斜陽。

**金峯山**

稻瀨より更に東北に進めば、廣瀨村を過ぎて福岡村に入る。此村の東部下口に金峯山萬藏寺あり。封内風土記に曰く「金峯山萬藏寺は曹洞宗なり。門あり。傳へ曰ふ。飛彈の工匠造る所なりと。古昔は文字を『般藏』に作り且つ天臺宗な

りき。寺に牛王の印あり。般藏寺と雕す。何の時曹洞宗に改宗し字を萬藏に作れるかを詳にせず。又上梁に文あり。其記に曰く、『當山千手堂。乃嘉祥三年庚午、慈覺所』と。額あり。長さ三尺廣さ一尺、其文字に水月道場と云ふ。亦慈覺が書せる所の篆家なり。又往昔大般若經一部を藏す。今存する所二百七十卷」と。この寺また時移り星變りて今や舊時の面影を止めざるも、以て其古刹たるを知るに足らんか。山内に阿古屋谷と云へる所あり。上古阿古屋と稱する惡鬼、岩谷に住居せしを、大同年中田村磨之を退治し、頂上に其骸を埋めたりとて、今尙其塚の跡を存す。

### 六原牧場

金ヶ崎停車場より西北方、膽澤郡相去村の西部に軍馬補充部六原支部あり。其用地は金ヶ崎村、相去村及び和賀郡岩崎村に跨り、總て九千九百八十八町餘の廣袤を有す。其内敷地は三十七町弱、耕作地は八百二十九町餘、放牧地は六千七百八十三町餘、草刈地は二千二百三十八町餘なり。浩々たる草原に立ちて西方を望めば、駒ヶ岳、經塚山及び之に連れる幾峯巒、層々疊々として雲際に並び立ち、駿足其

麓より踴躍し來るの状また一幅の活畫圖ならずんばあらず。此支部は明治三十一年十一月の創立にかゝり、年を重ねて益々其設備を完成せるが、明治三十二年五月には別に氣仙郡世田米村字種山に種山出張所を、下閉伊郡門馬村字田代には田代出張所を設けたり。

### 駒ヶ嶽

六原野の西方に聳ゆる雄峰は膽澤和賀二郡に跨かれる駒ヶ嶽なり。若柳村經塚山の東に連りて三千八百餘尺の標高を有し、火山岩より成る。其東南麓は黒澤川宿内川の源をなし、夫々相去村、金ヶ崎村を経て北上川に注ぐ。登路は二條にして、一は金ヶ崎村西根より至るべく、一は和賀郡下鬼柳夏油温泉よりすべし。山極めて峻険にして初夏に至るも宿雪尙消えず。峰巒の絶頂を大日嶽と云ひ之に次ぐを駒形となす。半腹の社祠は即ち延喜式内の駒形神社にして、傳説によれば、往古神駒あり。常に山岳に遊ぶ。雪毛霞暈、倒れて後之を此山頂に瘞め、即ち祠を立て、之を祭れるなりと云ふ。馬の守護神として尊崇する者多し。また山間に岩窟あり。濶三尺、





蓋し内廓なりしなるべし。往昔常備兵五千人を配置せりと云ふも此地點とす。四圍に尙堀跡を認め今多く苗代田となれり。膽澤城は延暦二十一年田村麿將軍の造營する所にして、其後弘仁三年、城を廢し鎮守府を置く。鎮守府將軍には嘗て聖武天皇の時大野東人、東海東山節度使としてこれを兼任し、更に藤原清衡祖孫之を相繼いで之に任ず。後、中絶し、後醍醐天皇の朝、北畠顯家之に任せり。但しこの鎮守府は藤原秀衡の將軍となりし以前既に荒廢せりと信ぜらる。

**膽澤川** 膽澤川は源を大深山澤山に發し、第三紀層を東方に流れ、明神藏山近傍の火山岩地を過ぎて後、平原に出て、益々東流して上野原を貫き東北に轉じ、金ヶ崎の南方に出て北上に合す。長さ凡そ十里。其支派は若柳村より分るる茂井羅堰、堀上堀下堰、壽庵堰等にして水澤附近を網絲の如く横流し、水利の便多し。

**永徳寺**

佐倉河村の西、永岡村字田野に朝恩山永徳寺あり。江刺郡黒石村の正法寺と並稱せられし古刹にして、水澤町の西北二里に位す。延文元年道叟和尚の開基にして、出羽奥州兩國曹洞宗の本山たりき。舊時門葉凡そ四百八寺。應安五年勅許

を蒙り、慶長頃此地方の領主たりし柏山家の歸依厚く、寄附の地あり。伊達氏領有後も寺門舊に依つて榮えたり。寺境東は膽澤川を以て限られ、北西は山林を以て蔽はる。本堂、山門、鐘樓、經堂等其建築の宏壯なること、地方に於て稀に見る處なり。寶物は膽澤城當時の古器物最も見るべし。

**柏山城趾** 柏山氏はまた檜山氏に作り、舊時膽澤郡の領主たり。當時の豪族たりし葛西氏の屬隸なれと、出自を知るべからず。或は平清盛の孫、頼朝の爲に此地に封せられしなりと云ふ。永徳寺を距る遠からざる水澤の地に居館大林城趾あり。天正十八年失邑して南部氏に仕へたり。

**水澤町**

金ヶ崎停車場より瀛車により南に走ること一里二十六町許にして水澤停車場あり。水澤町は其西側の平地に従つて擴がる。戸數二千人口一万余。舊邑名を鹽釜と呼び、仙臺藩の公族伊達留守<sup>オサ</sup>守氏の封地たり。此地は氣仙街道の發端にして、近郷米麥、馬匹家禽等の産多く市中また酒類漁網等を出すを以て商業従つて殷盛に、其特設電話は遙に盛岡に連絡す。目下電燈工事に着手中なれば其完成後は町況一段の

隆昌を増すべし。殊に此地をして有名ならしむるものは、幕末の偉人高野長英を始め現代の巨頭たる後藤新平男及び海軍大臣齋藤實男等の出生地たることにして、また世界四観測所の一なる臨時緯度観測所も此町の西方にあり。停車場を出て、西北へ一直線に進めば、其盡頭横に一條の大通りを見る。これ此町の最も繁盛なる街路にして右すれば大町、宮下を経て、駒形神社境内に至るべく、左すれば横町、柳町を經、左折して立町となり、更に右折して御不斷町を過ぎ郊外となる。水澤郵便局は横町の東側にあり。其向側なる通路を西に入れば水澤區裁判所、膽澤郡役所、水澤小林區署等の門前を過ぎて、水澤尋常高等小學校の校舎を見る。水澤町役場及び水澤英語學會は其兩側にあり。又郡立膽澤農業學校は其西に隣る。此他市中水澤銀行(資本金十萬圓)、水澤貯蓄銀行(資本金十萬圓)を始め物産、運送等の諸會社あり。また近時新設せられたる岩手縣蠶種検査所は鐵道線路を越えて其東に位す。

水澤城址 天喜四年源賴義之を築く。一名を臥牛城と云ふ。永和年中、葛西氏の家臣八谷右京之に居り、慶長

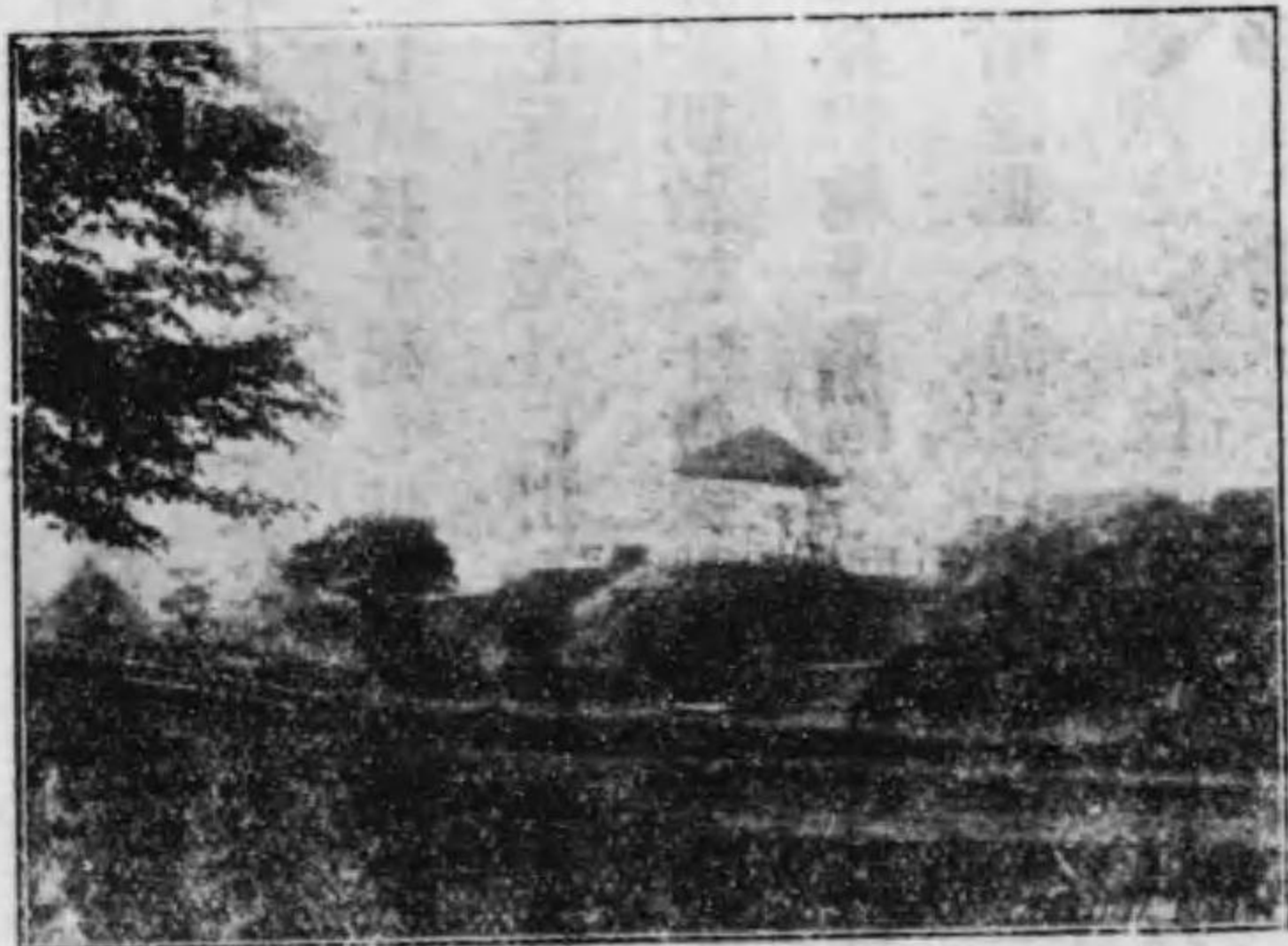
年中伊達氏の臣白石若狭に歸し、寛永六年、伊達氏の臣留守宗利と云ふもの、金ヶ崎城より移り、子孫相繼ぎて之を領すと云ふ。

**大安寺** 大白山大安寺は水澤町の東部にあり。臨濟宗にして京都妙心寺の末寺なり留守家の菩提寺にして累代の墓碑あり。有名なる中村伊豫子の碑またこゝに存す。伊豫子十四才にして留守將監宗衡に嫁し、六男四女を生む。長子死して次子邦寧繼さしが、尋いて宗衡も死せり。會々宗藩會津討伐の勅を奉じ兵を境外に出し、邦寧また軍機に參せり。伊豫子書を寄せて大に勤王の志を鼓舞す。明治二年伊豫子家士千餘人を率ゐる水澤に移住し、郷黨の育英に従事せしが、明治九年、聖上東巡の際、生徒數百人を奉迎し、白絹一疋を賜はる。後、皇后宮より國風一首を賜へり。

**水澤公園** 水澤公園は市街南方の高地にあり。老櫻參差として枝を交へ、暖風ひとたひ春を傳ふるや万朶の紅雲、爛漫として漲り渡り、花間、碧空を仰げば、經塚山遠く西方に浮び出て、其美觀云ふべからず。蓋し東北線沿道中屈指の名園なり。園中後

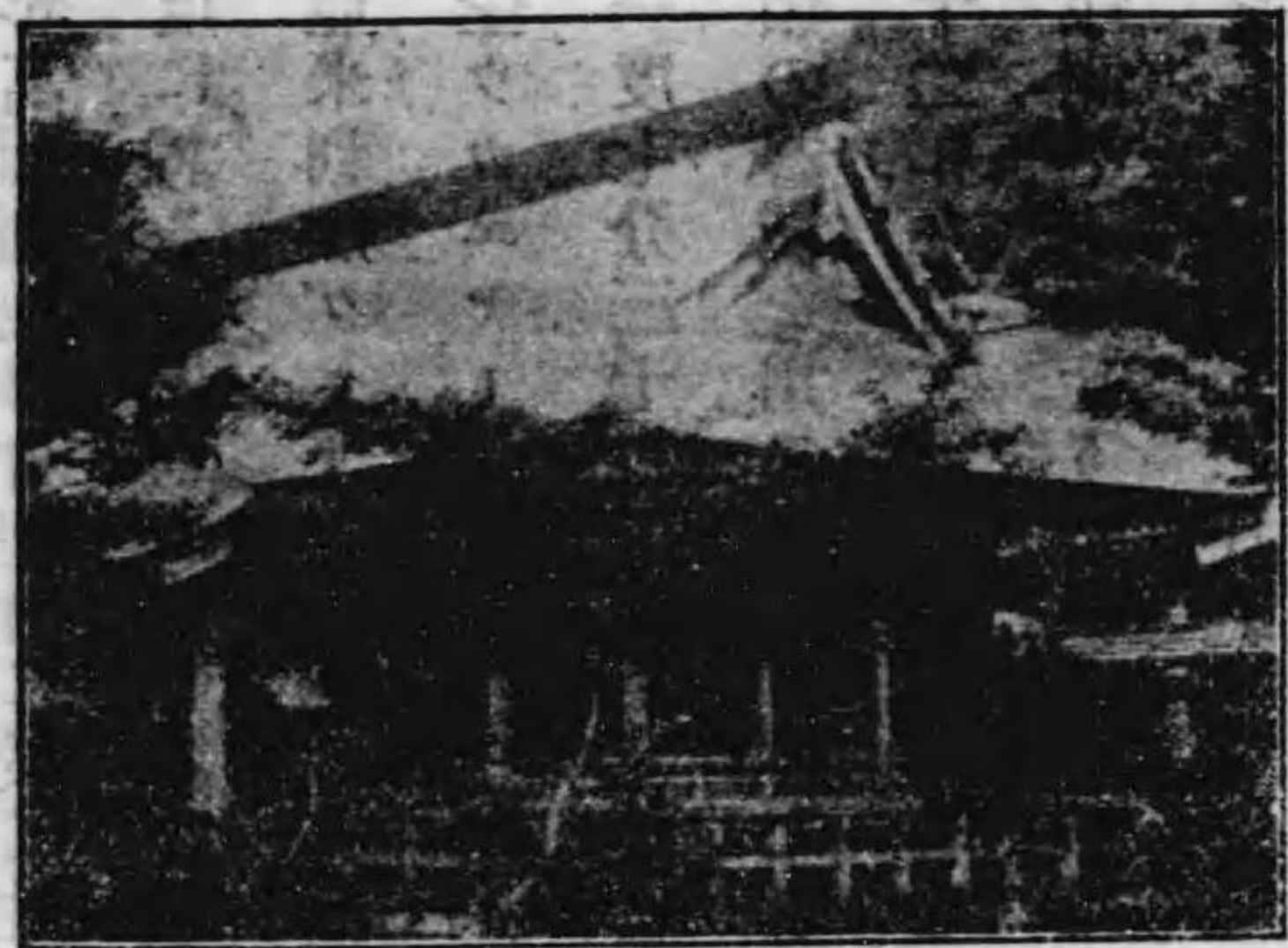
藤新平男の銅像、及び高野長英の碑等あり。茶亭また所々に存す。東方は岩手縣の聯合大競馬場にして東競馬場と云ふ。舊競馬場は公園と東競馬場との堺を爲し、數町に渉る堤上は、これまた櫻樹並木を爲し、花下駿馬の嘶くを聞く。また風流ならずとせず。

高野長英 後藤實仁の三男なり。文化元年水澤に生る。歳十四にして叔父高野玄齋の養子となり。略蘭學に通じ、又和漢の學を修む。文政三年秋、長英年十七、江戸に遊び、吉田長叔の門に入り又長崎に赴き蘭人シーホルトに學ぶ依て再び江戸に出て麹町に居り、醫術翻譯を業とす。時に天保元年英年二十七なり。同十年十二月罪を得て終身禁錮の刑に處せられしが、同十二年四月火あり官悉く罪人を放てり。長英も亦遁れて他國に奔りしが、後また江戸に歸り、高柳柳之助或は澤三伯と變名し都下に潜む。嘉永三年薩摩侯島津齊彬の命を受けて、三兵操練の書を譯述せしが、文章巧妙意義明確にして尋常譯書の比にあらざりき。同年十月官其都下に潜むを知り、捕吏を



水澤公園

して麹町の宅を圍ましむ。長英其免るべからざる知り、吏卒を斬りて自刃す。時に年四十七。其著はす所、夢物語、鳥の啼音等あり。

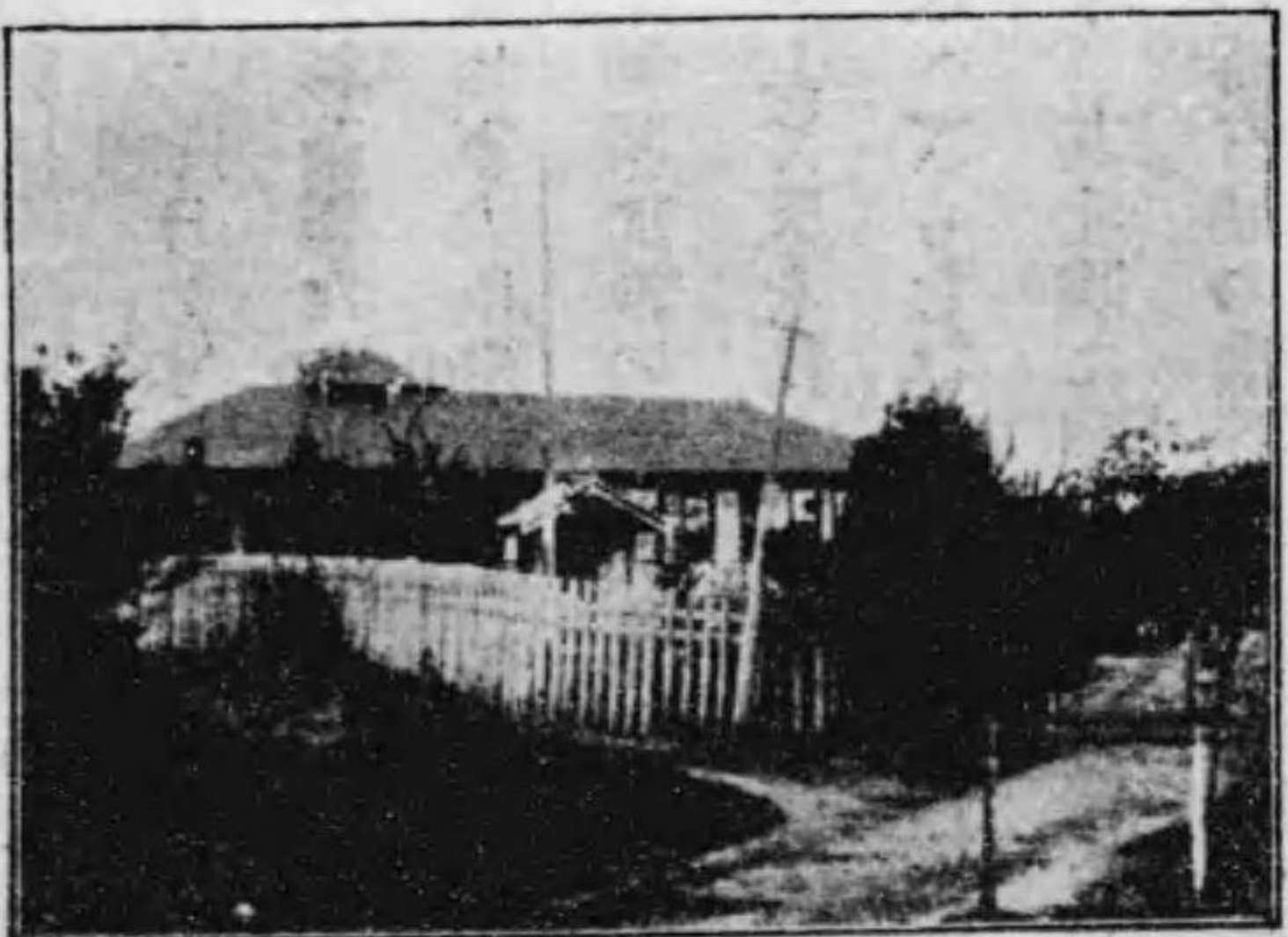


國幣小社駒形神社

駒形神社 駒形神社は國幣小社にして奥社は駒ヶ嶽にあり。毎年九月十七日を其祭日とす。水澤公園地内西方に伍し、老杉翳鬱たる所、宏壯雄大なる社殿を見る。社前には陸軍大臣奉納の大砲あり。日露戦役の戦利品にして神明加護の謝恩を表せるもの。境内老楓古杉森然として天を衝き、清涼の氣人に逼り真に崇高の感に堪へざらしむ。祭神は大日靈尊、天常立尊の二柱なり。其北隣に鹽釜神社を存す。源賴義、安倍氏征討の時宮城の鹽釜社に祈り、凱旋の

●●●●●●●●●●  
臨時緯度觀測所

水澤公園の西方に水澤臨時緯度觀測所あり。西曆一千八百九十八年萬國測地學會總會に於て地球上三十九度八の同緯度にある伊太利カローフォート(東經八度十九分)、亞米利加グーザースブルグ(西經七十七度十一分)、全ウカエヤー(西經二十三條十三分)及び東經百四十一度七分三十秒の我が水澤を選び、同日同を星同種類の器械を用ゐる觀測することの決議に基き、明治三十二年九月文部省の創設せし所。同年十二月を以て觀測を開始せり。敷地四千九十二坪、建物六棟あり。又三十四年十二月より氣象觀測を開始せるが、其備付の器械は天頂儀、子午儀、經緯儀各一、大森式微動計、恒量時辰儀各二及び氣象觀測器械等とす。其創立以來の所長理學博士木村榮氏は、Z項の發明者として盛名を世



臨時緯度觀測所

界の學壇に馳せ、遂に明治四十四年帝國學士院の表彰を受けたり。若かも此名譽ある發明が全然この臨時緯度觀測所に於て爲されたるに至つては、又水澤町の誇として數ふべき也。

●●●●●  
日高神社 水澤町の郷社にしてその西郊にあり。

本地佛は妙見大菩薩、平城天皇の大同二年坂上田村麿の勸請せる所にして火滿瓊別尊を祭る。後冷泉天皇の康平元年源義家之を再建して日高神社と稱し、天御中主尊を併祀して東奥鎮護神と尊崇す。嘉應二年藤原秀衡祠殿を建造し、寛永九年留守氏また新造す。西方膽澤平原を隔て、遠く駒形山を望むべく、風景絶佳なり。此社の附近を流るゝを太刀洗川と云

高野長英先生之碑



ひ、古くは日高川、勝負川とも稱せる歴史上有名なる川とす。源頼義父子安倍貞任を

征伐し、之に克つや、劍をこの流に濯ぐ。太刀洗川の名こゝに因すと云ふ。

**膽澤の溝渠**

水澤附近は土地開け、農作甚だ盛んなり。然かも之に灌漑するは茂井羅堰モキヲ壽庵堰等にして水利の及ぶ所一望殆と際涯なし。共に膽澤川の水を其上流若柳地方より引けるものにして、就中茂井羅堰は若柳、南都田、真城、佐倉河、姉體の諸村を通じ、若柳、都鳥、新里、柳田、南下葉場、鹽釜、瀬臺野、安土呂井、上葉場、杼木、北下葉場、那須川、四丑、下河原、八幡、下伊澤、上下姉體、須江等十八邑の用水たり。また壽庵堰は若柳村の東に分派して小山村を貫通し、前澤、中畑に灌ぎ、剩餘を北上川に排洩する迄、長さ六里を算し、これまた水路流通、利便尤も少からず。

**後藤壽庵** 壽庵堰の開鑿者後藤壽庵は名を莊兵衛と云ひ、舊葛西氏の臣にして、後伊達氏に仕ふ。其采邑を今の水澤附近福原に賜ふや、たましく其督宣教師國郡を巡行し來り、講談數日に及ぶ。後藤大に之を喜び遂に洗禮を受く。壽庵の名は實に其基督名約翰ヨハネより出でしなるべし。其膽澤川を分派し灌漑を便にせんとする時、在天の主神に祈請し、一種の運轉器を以て大石を送致し、兩岸半餘町を築成す。土人乃ち悦び以て天主の力なり

とし崇信愈深く稱して壽庵堰と云ふ。後教法の禁酷烈を極むるに及び、壽庵失踪して其終る所を知らず。

**新山神社**

水澤の南一里許、姉體村に新山神社あり。天日靈尊、天津彦穗邇々藝尊、健甕尊、御名方命を祭る。延暦二十年、土首高丸、惡路王の二賊、關を犯して駿河の清見關に入寇す。坂上田村麿乃ち勅を承けて、長驅して磐井に至り、高丸を神樂岡に、惡路王を達谷に討夷す。翌年將軍大墓公を攘夷するに當り此地新山の神木を敬養し、月を閲して社殿成る。葛西氏より伊達氏まで祭典には警固使を遣仕し崇教頗る淺からざりき境内に大槻八幡神社あり。譽田別尊を祭る。天喜二年貞任戰敗れ、當村に潛み殊戰を試む。源義家奮戰して之を陥れ、こゝに岩清水八幡宮を勸請す。後、正中元年初めて宮祠を建て應神天皇の神像を安置せり。

**前澤町**

水澤町より南二里三十町許にして前澤町あり。小學校、郵便局、水澤區裁判所出張所等を有し、膽澤郡中水澤に亞くの名邑と稱せられ、人口六千許、北上川の西岸に位す。古、小前澤と稱せしもの即ちこれなり。伊達氏の世臣三澤氏の治

所にして、其室初子は即ち演劇ゆいげ伽羅先代萩の所謂政岡まさおかなり。此町の近郊には、駒吸清水、照井館等の舊跡を存せるが、其最も奇観なるを奥の大櫻とす。此櫻は町の東なる不動堂の境内にありて、樹齡凡そ一千年を算すべく、安永の頃周廻五丈五尺、南北十六間、東西二十間餘を算しすと云ふ。其後幹枝焼失したるも當時の樹根今存し、然かも更に一木を生じて周廻二丈四尺、南に横ること四間餘に及ぶ。街道側に碑石あり、芭蕉翁が『山に富士陸奥に此櫻哉』の句刻む。神社佛閣の有名なるは熊野神社、靈桃寺等にして、就中靈桃寺は臨濟宗の名刹なり。鎌倉建長寺住職佛源禪師の勸請せる處にかゝり、伊達政宗の孫内匠忠章の墓あり。境内なる觀音堂は奥羽兩州三十三番中十八番の札所とす。また西岩寺と云へる一禪寺は其伽藍甚だ見るべきなきも五百羅漢の所在として有名なり。

### 小松 趾橋

前澤町の南郊眞城村白鳥の地に鶴木ツルギの故墟あり。白鳥川の小流を隔て、瀬原の地と堺す。古書に所謂小松橋と云ふも、はた瀬原の柵と云ふも蓋し皆これ

ならん。尙彼の衣川の本關は平泉附近に置かれし事疑なかるべきも、藤原氏盛時にあつてはこゝに新關を置きし事も事實なるが如し。此地關屋敷と稱する地に山祠を置き關明神と云ふ。尙瀬原の地は西磐井郡平泉村に屬せるが衣川の北崖に位し、腹痛藥金命丸の産地として知らる。

### 櫻木 橋

水澤町より東を指し北上川の畔に出づれば櫻木橋あり。長さ百三十餘間。橋柱高く水流に擡んで、遠く之を望めば恰も長城の大江を横ぎつて聳ゆるが如く、壯觀を極む。この橋を渡れば、對岸は江刺郡愛宕村オウガキにして道路は岩谷堂町に達するを以て、此間車馬の交通頻繁なり。輓近水澤、岩谷堂兩町有志者により、屢々馬車鐵道敷設の議唱說せらるゝを以て或は其實現せらるゝの日なしとも限らず。目下は僅に馬車の便あるのみ。兩町の間二里餘。

### 岩谷 堂

岩谷堂は往昔片岡カタオカと呼ばれし地にして、西北北上川の平野遠く開け背後に自然の障壁をなせる峰巒を負ひ、頗る要位を占む。人口二千餘、街路清修に東

海岸の盛及び釜石に至る街路なるを以て、人馬の出入繁く商業亦振ひ、又江刺郡役所、岩谷堂警察署、水澤區裁判所岩谷堂出張所、岩谷堂郵便局、岩谷堂小學校等あり。物産は繭、大豆、鑛産物等にして、わけても此地に釀造せらるる白酒は芳醇無比と稱せられ、名産羊羹と共に世上に賞用せらる。岩谷堂城趾はその近郊にあり、一名柄酌城とも云ひ、葛西七黨の一人、江刺氏の居城なりしが、慶長年中、葛西氏封を奪はれし時、江刺氏も共に滅亡し、寛文八年、伊達侯、伊達左兵衛宗規に本邑を與へて子孫長く繼承せしが維新の際廢城となりぬ。村社鎮岡神社は、大己貴命を祀り、延喜式内の古社なり。また多門寺は、岩屋戸山と號し、開創不詳の古刹にして、天和二年弘祐法印により中興せらる。昆沙門堂、藥師堂等いづれも由緒を存す。

**葛西氏** は秩父平氏の別族にして秩父將常五代の孫清重に至り、下総の葛西を領す。これ即ち葛西氏の祖なり。賴朝の興るや、清重功を以て磐井、膽澤、牡鹿等を賞賜せられ、其子清親に至りて宮城縣牡鹿郡日和山の地に築く。これより子孫漸く榮え、元弘延元の際、南朝の忠臣たり。所謂葛西七黨なるものは其一族とす。葛西氏は天正十八年、十七代晴信に至りて伊達氏の滅ぼす所となれり。

**栗山**

岩谷堂より東北に前進すれば玉里村を経て米里村に至る。道程凡そ三里十町。岩谷堂より氣仙郡盛町に至る一路はこゝより更に姥石峠を越ゆ。其郡界には鐵山頗る多く殆ど無盡藏を以て稱せらるれど、交通不便なる爲め採掘盛んならざるは惜むべし。唯栗木鐵山及び小牧倉鑛山はやゝ注目しに價すべく、前者は文久元年の發掘にかゝり、後者は明治十二年の開掘とす。採掘區域は前者四萬七千三百六十餘坪、後者は三萬坪弱にして、鑛床は孰れも東部古生紀の粘板岩及び石灰岩に接觸せる閃雲花崗岩の丘陵に包藏せらるる磁鑛床なり。

**人首川** 江刺郡の主水脈にして栗木等の連山の麓より發し、西流すること四里、岩谷堂驛に至りて南に折れ、又一里、伊手村の東嶺種山に發源し來れる伊手川と合し羽田村なる二子町田茂山の間にて北上川に入る。

**豊田**

岩谷堂を東に距る約半里にして藤里村字餅田あり。北に丘岡を負ひ今田圃となれるも其舊邑たるを疑ふべからず。これ即ち安倍賴時の女婿亘理權太夫經清が居館たりし豊田城の趾なり。康平年中、經清、貞任と共に誅に伏し、其妻子捕へ



らる。源頼義經清の妻を以て再び清原武則が子武貞に妻はす。武則其遺孤を養ひ已が子となす。藤原清衡即ちこれなり。源義家征討の時、清衡、吉彦秀武等と共に叛きしが遂に義家に歸し功を以て鎮守府將軍となり、後移りて平泉に居り、基衡、秀衡、泰衡に傳へたり。

**五十瀬神社**

岩谷堂より三里半にして伊手村の驛邑に達す。伊手村には五十瀬神社あり。天照皇太神を祭る。往昔より天然の石社泰然としてあり。其傍に大石五個あり。里人之を五枚石と云ふ。其間に一株の杉あり。之を石裂の杉と云ふ。坂上田村麿此神に祈りて戦勝を得、後また源義家此社に祈る。其報賽として義家自ら梅、松、杉、櫻各一株を社の四隅に植ゑたりと云ふ。麓に古壘あり、之を古館と云ふ。壘畔に舊井あり、平泉と云ふ。關の上に木戸脇と云ふ地あり、皆往時官軍屯營の舊跡なり。

**東漸寺**

岩谷堂町の東南一里二十餘町にして田原町に東漸寺と云へる名利あり。天安元年慈覺大師の草創なり。本尊十一面觀世音菩薩守護のため天竺王舍城の耆闍崛山より、金羅王東漸して此寺に鎮座し給ふにより、大悲山觀音寺東漸院と號す。當寺沿革の大略を擧ぐれば、草創以來二十六代の間は無本寺にして天臺一宗を旨とせり。後文治五年と承應二年と二回祝融の災に遇ひ、第三十七世住職都學慶、伽藍の再建に努め、天保十四年を以て今の寺院を造立せるものとす。

**黒石の薬師**

岩谷堂の南三里十餘町、黒石村の内にあり。今僅に一薬師堂を有するのみにして。舊觀凡て空夢に歸したれども、其盛時にあつては、佛宇林はやしの如く地方屈指の名藍たりし處なり。天平元年釋行基の創建にして、延暦年中惡路王高丸乱を構へし時兵燹にかゝりしも、幾ならずして鎮守府將軍藤原利仁勅を奉じて本堂を新造せり。嘉祥二年慈覺大師の此地に曳錫するや、手づから十二神將四天王の像を刻し、又數十の佛宇、四十八の僧房を營み、稍舊觀を復す。文治年中葛西清重薪菜供饌の山林田圃を寄附し、一時大に隆運を極めしが、天龜天正の頃、年所を経るに従つて敗壞し、遂に今日に至れり。然れども現存の薬師は尙多數地民の尊崇する處にして、殊に

其蘇民祭に至つては蓋し天下の奇觀なり。毎年舊正月六日夜、滿地の大雪白皚々たる時、万を算する群集、祠前に於て特異の儀式を行ひ、或は火を圖んで乱舞す。かくて夜央なるや、群集東西に相分れ、或る神聖なる意味を偶したる木片を爭奪し、之を獲取するを以て其歳の福祉を卜ふ。往昔は出場者悉く裸体なりしも、今僅に短褌を以て蔽へり。蘇民祭の行事は縣下別に西磐井郡白山神社、稗貫郡八重畑村五大堂等にも存すれども、黒石の薬師に於ける。その如く盛んならず。

### 正法寺

黒石の薬師を距る數十町にして正法寺あり。奥州洞家第一の叢林にして大梅ネンゲ枯華山圓通正法寺と稱す。草創は北朝の貞和四年、開山は能登諸岳山總持寺（今武藏國鶴見に移る）の出、無底良韶和尚、開基は當時の領主長部清秀なり。觀應元年五月、北朝崇光天皇より綸旨を賜はり、次いで嘉吉元年及び寛正三年には兩度後花園天皇より、永正四年には後柏原天皇より夫々勅旨を降され、爲に奥羽兩國の寺院慶長七年まで當山に於て、轉衣出世の儀式を整へ來り、總持寺及び越前吉祥山永平寺と

相並んで曹洞三區の本寺たりしが、全八年に及び幕府政治變更の爲め、此式は總持寺に於て所轄する事となれり。然れども當山は依然として奥羽兩國の末派一千二百餘ヶ寺の頂尊傑出し、現時十六字の僧堂と約二町の境内とを有す。老杉陰暗きところ、物古りたる寺門を入れれば全山奇石怪巖駢列して溪泉爽かに流れ、幽閑の氣人に迫る。宏大莊嚴なる本堂は鬱乎たる杉樹の間に聳え立ち、影堂、鐘樓また之をめぐりつゝ、三世の寂味を現示するに似たり。寺前に蛇形石横はり、古蟠梅一株花開く。疎影横斜、清香尤も愛すべし。佛殿には如意輪像を安置す。長さ一尺八寸にして、佛工春日の作る所、釋迦、文珠、普賢は即ち當麻の作、客殿の彌陀如意輪は婆阿彌か作なり。また院中古來の珍藏多く、釋左右十六羅漢三幅は雪舟の筆、飛龍觀音大幅は雪村、十六羅漢像十六幅は兆殿司、觀音左右林泉三幅は牧漢の筆にして、尙開山の自畫像、後光嚴天皇の宸翰、宮野法印の墨蹟、佛舍利三粒、六代の法衣、金毛拂子等もあり。山中及び附近に佳境少からず。就中花立坂、菩提坂は寺院の西北十町餘、靈犬塚、瑞鳥峯は南

六七町、水晶山は全三十餘町、蓮臺岩は寺西一里餘にあり。其他瑞鹿基と云ひ、怪石嶺と云ひ種々其由來を傳へ、境内また虎班竹を生ずと云ふ。

### 平泉地方

#### 平泉の興亡

平泉は岩手縣の史跡として無双なるのみならず、恐らくは日本國中を通ずるも、奈良、京都、鎌倉等を除いては、其隨一に居るべし。唯、其興亡の次第を詳にせざる遊覽者にありては、斷礎敗壁、何等の見るべきなく、或は興味の索然たらんことを恐るゝが故に、こゝにひとわたり此大史跡の今昔を叙説し置くべし。藤原時代以前、そもそも平泉は其興亡殆と藤原氏の盛衰と相伴へる觀ありて、藤氏三代の威を東北に恣にするや、平泉も隨つて興り、藤氏榮華の夢覺むるや、平泉も共に衰頽に歸せり。而して藤氏時代以前に至つては、其如何なる状態にありしか、今詳

ならず。膽澤の蝦夷が紀古佐美、坂上田村麿等に驅逐せられたる原野は、蓋し此附近なるべしと推想せらるゝも、古史載する所、衣川、母體、跡呂井等二三に止まり、遂に平泉の名なし。強ひて之を求むれば、田村麿が悪路王を誅せりと傳ふる達谷の存するのみ。達谷は正に平泉の中なり。前九年の役、後三年の役には、二役共に白鳥の名を存し、後三年の役に瀨原の名を發見するも、これ亦平泉の名を傳へず。唯僅かに前九年の役、源賴義、中尊寺山内なる月見坂に於て白山神社に賊徒討滅の祈願を爲せりてよ一事實のみ存せり。蓋し當時にあつては何等他と異なるなき原野に過ぎざりしならん。

藤原氏旺盛時代、藤原清衡、後三年の役の功により、江刺郡餅田の豊田城より移り來るや、衣川と太田川との中間に、盛んに邸宅、寺院及び市街を經營し、其子基衡、孫秀衡並に之を繼承し、昨の荒野忽ちにして、百花爛漫の一大都府となんぬ。此時藤原氏の管領する所、膽澤江刺以北、岩手以南の六郡に亘り、其所有する莊園、亦奥羽

二國を通じて一万を超えたり。況んや、當時奥州の富は驚くべきものにして、『黄金花咲くみちのく』の語、既に之を説明し盡す。嘗て聖武天皇の盧舍那佛を建立し給ふや、此國小田郡(今の宮城縣湧津方面)所産の黄金を用ひ、基衡が地領として管したりし、悪左府頼長の莊園、高倉(西磐井郡永井村方面)、遊佐(山形縣飽海郡)、本良(宮城縣本吉郡志津川方面)等よりの年貢も、亦黄金を主とせり。其他秀衡の屢々朝廷に黄金を献じたる、中尊寺、毛越寺等の建築の勘からざる黄金を材料としたるに徴すれば、其黄金の如何に多大に産出せられたるか、殆ど想像に餘りあり。古傳には黄金の採掘に就き氣仙郡竹駒の外、別に叙説せるものあるを見ざれど、恐らくは國內到る所の河川溪流より砂金を採取したるならんか。宜なり、此事遠く支那に傳知し、大明統一志等の『陸奥國産黄金』と明記せるや。かくの如き富を擁して北方の強となり了せる藤原氏の都門が、随つて堂々たるべきは推想するに難からず。其南に備ふる爲には、平泉より四里弱、金流川の邊(西磐井郡金澤村にして一ノ關、花泉間の鑿道の南端地藏像の立

てる所)に大門を構へ、其北を扞<sup>よ</sup>爲には平泉より四里餘、鵜木(膽澤郡眞城村)の隘路を扼せりと傳ふ。尙此時代にありて航海の行はれし事も争ふべからずして、南北朝の頃上國と往來せる宮城縣牡鹿郡湊の如き必ず其海港の一たりしなるべし。但し此津は、後年伊達政宗の北上川水路を鹿俣<sup>カヌマ</sup>より開鑿せし以來、其河口に勃興せる石の巻に壓倒せられ、遂に其名を湮滅するに至れり。其他全縣本吉郡志津川、氣仙沼、若くは岩手縣氣仙郡盛、高田等の中當時の港津たりしものあるべしと推せらる。いづれにもせよ、印度、南洋の珍材の如きも此航海によつて輸入せられたるは事實ならん。かくて藤原氏の勢力は、決して上國の郷相、武門に劣るべきにあらず。否、却つて之に倍したりしに相違なし。藤原氏もとより王土の一臣隸、敢て朝廷の治化に浴せざるにあらずと雖、其政治的勢力の分布より見る時は奥州の健兒藤氏あるを知つて朝廷幕府あるを知らず。上國諸州の京都若くは鎌倉を以て其政治的中心地としたる如く、彼等も別に平泉を以て、其政治的中心地と見做したる觀あるべき也。而して平泉は如實に白